

ADULT ONLY



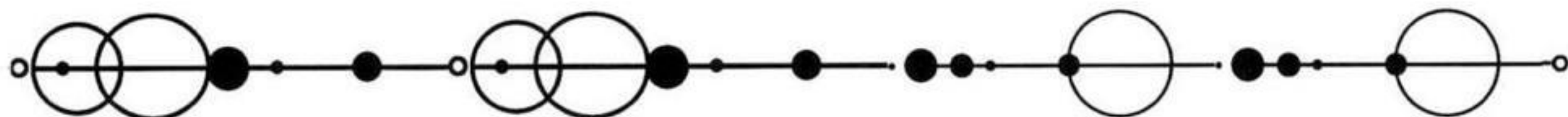
Knock Lock Shake

Knock Lock Shake

Mob* TODOROKI SHOTO

My Hero Academia
Unofficial Anthology

CONTENTS

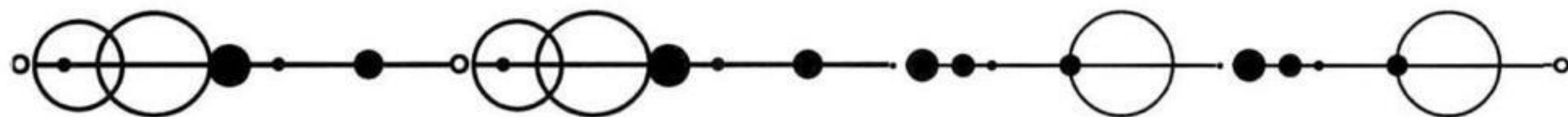


Cover Illust 土器

Illust poi

Comic & Novel

- 005 | 「**私はモブ**」 うに野
アナル舐め / ハート喘ぎ
- 017 | 「**とある性奴隷の一日**」 紫藤
性奴隷 / 貞操帯 / 玩具 / 四肢拘束 / 尿道責め / 結腸責め / 連続絶頂 / メスイキ
- 033 | 「**見えないアイツ**」 キスギ
ショタ / 痴漢
- 035 | 「**泥中に咲く花**」 halu
爆⇒轟 / 出⇒轟 / 輪姦 / 貞操帯 / 脅迫 / 玩具 / メスイキ
- 069 | 「**轟王子が触手とオークに×××される話**」 ゆめの
十傑設定 / オーク / 触手 / お漏らし / 尿道責め / 断面図 / 濁点喘ぎ
- 081 | 「**虚構の恋人**」 ヘン
プロヒーロー設定 / 脅迫 / 玩具 / 輪姦
- 095 | 「**闇オークションで落札されたヴァンパイア**」 みくに
ヴァンパイア設定 / 監禁 / 尿道責め / 貞操帯 / お漏らし / 濁点喘ぎ / ハート喘ぎ
- 099 | 「**泥濘に沈む**」 はるさめ
中学生設定 / 誘拐 / ドラッグ / 濁点喘ぎ / メスイキ / 腹ポコ / 結腸責め / 首絞め
- 109 | 「**salvation**」 煮
誘拐 / 拘束 / 女装 / イラマチオ / 催眠
- 119 | 「**三万円のパパ**」 fisk
中学生設定 / 売春 / 暴力 / 媚薬 / 玩具 / メスイキ
- 127 | 「**さようなら、また明日**」 わた
中学生設定 / 無理やり
- 137 | 「**ハッピーエンド**」 しの
誘拐 / 精通
- 149 | 「**まるはだか**」 泪飴
暴力 / ドラッグ / イラマチオ
- 155 | 「**新米バニーの前途多難な教育実習**」 ゐんこ
プロヒーロー設定 / 女装 / 疑似産卵プレイ / 騎乗位 / イラマチオ
- 175 | 「**轟焦凍間違っってエロマッサージ店へ行く**」 ドンタコス
プロヒーロー設定 / エロマッサージ / 輪姦 / イラマチオ / 攻めフェラ / ハート喘ぎ



Knock
Lock
Shake



う…嘘みたいだ

こんな日が
本当に来るなんて…

私はモブ

byうに野



はい！
その通りです！

私はモブ
名前は今は無い

ありがとうございます…



これお前の
夢がだったんだろ？

？

全力で夢叶えさせて
いただけきます！

うおおおおお

私は偶然にも
モブ化の個性を
かけられ
今はただのモブだ

お

ん
ぞん

個性：モブ化
あらゆる個人的要素を
奪われモブと化す

解除法は
個人的な夢を叶えること

そして私の夢は

スシ...

雄英体育祭を
テレビで観た時から

私は
轟焦凍くんの
虜となった

轟焦凍くんと
エッチすること!!

いつの日か彼に
我が純情を捧げたいと
願うようになったのだ



そして
モブ化した私は
やぶれかぶれで
英雄高校に乗り込み

轟焦凍くん
に
アタックした

※モブにセキュリティは
反応しないらしい

轟焦凍くん!

轟焦凍くん!

誰だ!?

かくかくしかじか
のモブです!

というわけで
君とえっちゃんが
したいです!
させて下さい!

無茶苦茶なのは
百も承知だけど

君しか私を
救えないんだ!
お願いします!

わかった

話が早い!

即答!

困ってる人を
ほっとけねえ

良い子! (涙)

知ってた!

どうすんだ?
脱ぐのか?

エッチイダカ
らしいの認識

エツアツ
マ、ママじゃ
マズいかな

場所を変えようか
人の来ない所に...

え?
ほんとに?
大丈夫?

貞操観念で言葉
知ってる?

?

轟焦凍

そしてこの状況…

まさに
ドリームズカムトゥルー！

なあ…

汗すゆえ

わが人生に悔いはないよ
轟焦凍くん！

君は何も
しなくていいんだ！

全部私がするから！
させてください！

関係者以外
立ち入り禁止

そうなのか…？

俺は
何すりゃいいんだ？

そう…
何もしなくて
いいんだ…

ただそこに
いてくれるだけで…

はーちくび
可愛い…

綺麗だ…

そうか…？
かわいい？

舐めてもいいかな？
いいよね？
夢だったんだから…

びびびび
びびびび
びびびび





またひとつ！
叶ってるよー！
私の夢が！
感激だよー！

この手で君を
イかせてあげるのを
何度夢見て
何度又いたことか！

うそ...っ



あ...ッ

あっもう...

でもちよつと
待ってね

はー



なんだよ！
もうちよいだろ！

ごめんねごめんね
でもこのままじゃ
ダメなんだ

怒った顔も
かわいいね

私の夢の
実現には...

こっちで

いつてもらわないと

おーっ

はー



ど、どうかな？
轟焦凍くん

もう指じゃあ
物足りないんじゃないかい？

もっと太くて
熱いのが
欲しいんじゃないかい？

ズ

ツ

.....?

わかりにくかったね
抽象的だったね



つまりね

これを君に
おねだりしてもう一つの
私の一番の夢なんだ

でけえ！

ギョッ

モブだから
(照)

モブは
性器だけは
やたら立派なのだ



おねだりつてのが
よくあかんねえ
けど...

いやね
あからないなら
いいんだよ!?

ごめんね！
ごめんね！

でも
ちんこ入れたら
もっと気持ちよく
なれんなら

お

か

そうしてくれ

はー

はー

はー

はー

はー



あれ？
またいつちやった？

そんなにちんこ
きもちよかった
かな？

奥？奥が
きもちいい？



アッ
まって

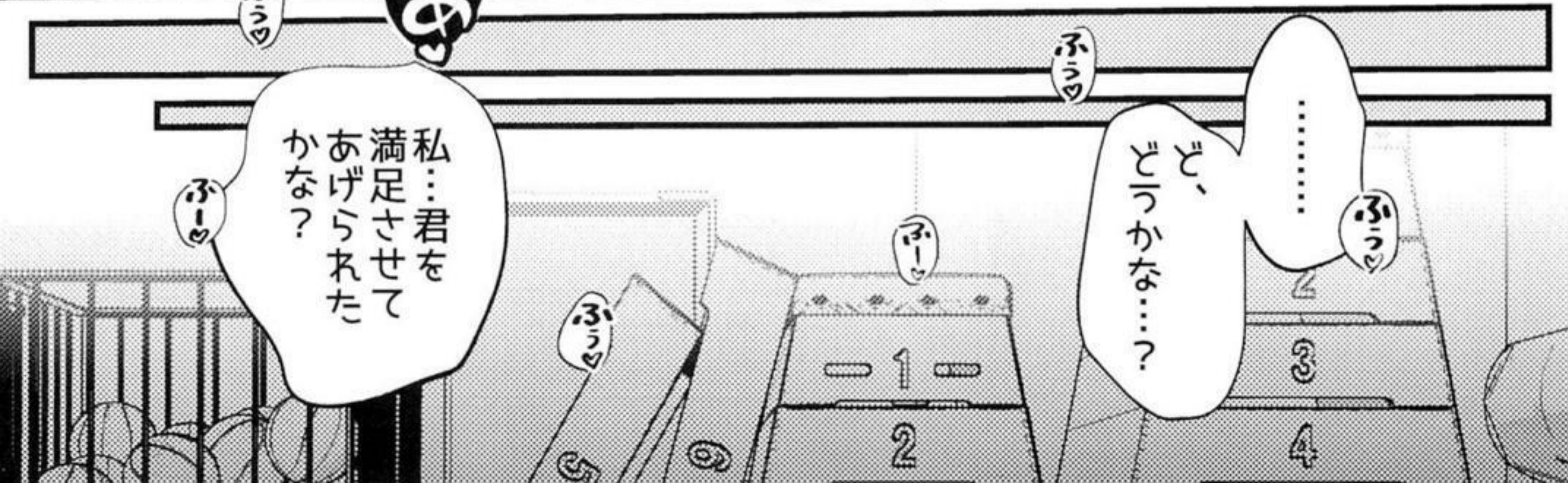
いっこのGIL

いっこの

SCNSK

いっぱい
いってね

君を満足させて
あげるのが
夢だから



どっ
どっかなあ……？

私：君を
満足させて
あげられた
かな？



とある性奴隷の一日

紫藤

薄らと浮かび上がる意識に気づいた瞬間、轟はくしゃりと顔を歪めた。

体内で蠢く感覚から得たむず痒さが一気に体中を駆け巡って、ゆらゆらと腰を揺らしながら両手で股間を抑える。その手からはヴヴヴという振動が伝わってくるが、それと同時に決して壊れそうにない鉄の冷たさを感じる。

「は、くそ……ッ」

その悪態と共に口から吐かれる息は熱い。轟は枕のシーツを噛んで腰を前後に揺らしながら簡易ベッドを揺らす。やたら広く窓もないベッドしか備わっていないその部屋には、轟のくぐもった声と機械音が響いた。

そんな時、轟が起きたタイミングを見計ったかのように、ガチャ、と部屋の扉が開く。その簡単には破れなさそうな鉄の扉から、燕尾服と丸眼鏡を身に纏った初老が入ってきた。

「目覚めましたか」

「っは、これ、外して……ください……」

初老は息を上げ必死に腰を揺らす轟を一瞥し、皿とパンが乗

ったお盆と共に部屋に入ってベッドまで足を進める。目蓋が垂れ下がっているせいで見えない瞳と笑み一つ溢さない口角は、何を考えているのか全く分からない。初老は持ってきたお盆を床に置き、轟の被っていた布団を思いきり捲った。

「……ッ」

轟の体が一気に外気に触れる。それもその筈で、彼は洋服を纏っていないのだ。ただ一点、股間に付けられた貞操帯以外は。

「どれくらい寝られました？」

「わ、か……らないです、……ッ、きのう、いつとんだ、のか、も……っ」

「左様ですか」

「う、あ……ああ……ッ！」

途端轟の体がビクビクと跳ね上がる。腰を浮かせて喉を反らし、その小さな口から艶かしい声を出した。それもそのはず、轟の貞操帯の内側・後孔にバイブが挿さっており、ヴヴヴと無造作に動いているのだ。

「ふ、あ……ッ、あ……っ」

「昨日轟様はお客様の前で失神されたのですよ」

「え、あ……っ？」

「だからお仕置きに、とご用意させていただいたものですが、

ずっと意識を失っていたらというのなら意味がないですね」

「あ、ああ……っ」

初老はそう言うのとポケットから鍵を取り出して轟の貞操帯の錠前に手をかける。そしてガチャ、と鍵を外して貞操帯を緩ませ外すと、貞操帯に接合されたバイブも一気に抜き取られる。

「ん、ん……ッ、」

轟はその勢いに持っていかれてビクンと体を跳ねさせるが、初老はそんな轟に見向きもせずポケットからゴム手袋を取り出し、抜かれた直後でヒクヒクと収縮を繰り返す轟の後孔に躊躇なく指を挿れた。

「ひ、あ……ッ、あ、ああ……っ」

「このあとお客様が参られますから、昨日のお客様の精液が残っていないか確認です」

「う……っ、あ、ああ……、やあ、ああ……っ」

初老の細く長い指が二本、轟のナカで無造作に動き回る。バラバラと指を動かしながら進んでいけば、昨日散々虐められた前立腺にたどり着いて腰を上げ背を反らし、ギョツと目を閉じた。

「……ッ、あ……ッ！」

「ここまだ残ってますね。掻き出して行きましょう」

「あ、あああ……っ、ひ、あ……っ、あああ……っ！」

ギョ、と二本の指で前立腺を摘まれたと思えば、力強く押さるや否や、轟の腹上に座り込み体を固定させて、前立腺を思いきり弄んだ。

「っ、ああ……っ!? あ、ああッ、だめ……え……ッ、それ、だめ

で、す……っ! こし、や、あ……ッ」

「暴れ回られたら掻き出し辛くなるので」

「う、や、えろお……ッ! あ、ああ……っ! あ! ……っ、あ……!」

轟は腰を動かさず快感を逃せないことによって、前立腺からの激しい刺激が一気に頭に駆け上り真っ白になる。足はジタバタと暴れて何度もそのシーツを蹴り、頭はせめてもの抵抗でブンブンと横に激しく振られる。それでも逃せない快感の方が大きく、轟は弾けそうになる頭を必死で食い止めた。

「あ、ああ……っ、いっ、いっちゃ、あ、ああ……っ、い、あ、——っ!」

しかしそれは耐えきれず、白い喉を晒してガクンと大きく体を跳ねさせ、生殖器から白濁液を飛ばす。轟が達したことを見て初老は指を抜いて、体を退いてベッドから降りた。そしてビク

ンピクンと絶頂の快感に跳ねる轟を見下ろす。

「何回も達せられてまた意識を飛ばされると困るので、このくらいにしておきます。今日のお客様は九時から一件ございますので、時間になったらプレイルームまで起こし下さい」

「は、い……………」

「ああ、それと」

「……………？ひ、あ……………っ？」

「お仕置きの続きはまだ終わっていないので」

「っ、!? あ……………っ、あ、や、め……………っ！あ、あ……………っ！」

初老はくたびれている轟に先ほどの貞操帯を履かせ、バイブを咥え込ませて鍵をかけた。そしてポケットに仕込んであるリモコンをカチカチと動かせば、ヴヴヴと轟のナカにあるバイブが暴れ回る。

「あ、ああ……………ッ、！あ、いや、あ……………っ、あ、ああ……………！」

「この鍵とリモコンはお客様に渡させていただきますね」

「っ、や、あ……………っ！こ、なじや、あるけ、ねえ……………っ、よ……………」

「っ！」

「遅れたらまたお仕置きですからね、頑張ってください。では」

そう言って初老は轟を残し、颯爽と部屋から去る。轟はその様子を見届けながら、ギョツと体に入れた。

轟はこの屋敷の飼犬であり、商品だ。紅白の髪色、顔面左の火傷、透き通ったオッドアイ、それに整った容姿と目立つ要素が多かった轟は、高校生の頃下校中に拐かわされ、まだセックスなんてしたことがなかったその体を無理やり貫かれ開発され、今では日本のどこに存在するのかも分からない屋敷の地下室で、毎日色んな男の相手をしている。さっきの初老は轟の付き人みたいなものでもあり、轟の体を内外含めて検査する人間で、いつも何を考えているのか分からない。でも轟はこの屋敷内で喋ったことがある人間は彼だけだ。おそらく彼の雇い主もいるはずだが、見たことは一度もない。

轟は肘を使ってどうにか上体を起こすが、バイブからの刺激に身震いし体を丸める。どうにかこの刺激を止めたくて股間に手を当てるが、全く意味がなく体は快感を拾っていく。部屋にかかっている時計を見た。時刻は八時五十分。客との予定まで十分しかない。部屋の場所は歩いて一、二分程度だが、この状況だ。今から出発するしかない。轟はそう思いベッドに転がっていた白いシャツを着て勢いだけでベッドから降りようとするが、立ち上がった瞬間前日の名残か、ガクンと腰の力を奪われてその場に座り込む。前日の仕事こそハードだった。大型の男の巨根に貫かれて暴かれて何度もイカされて、最後の方なんて

記憶にない。それくらいに酷いセックスだった。

「っ、はあ……っ、っ、う……っ」

轟はどうか体に入力を入れ、手で支えながらどうにか立ち上がる。そして激しく振動するバイブを感じながら一歩一歩と足を進めた。しかし動く度、足を前後にする度にバイブは暴れ回って、自分を抱きしめながらその場で立ち止まり熱い息を吐く。

「ふ、あ……っ、あ、ああ……っ、くそ、くそ……っ」

そう悪態を吐きながら確実に一歩ずつ進んで行き、どうにか出られた薄暗い廊下の壁をズルズルと伝いながら足を進めた。正直いつ快感で膝が折れても、腰が立たなくなってもおかしくなかった。だから早く、できるだけ早く部屋について思いきり座り込みたい。そしてこのバイブを外してもらいたい。轟はその一心で体に鞭を打ち、どうにか体を保った。

十十

「しつれい、いたします……っ」

ようやく辿り着いたその部屋の扉を轟がコンコンと叩けば、

「どうぞ」と中から声が聞こえてくる。聞いたことがない声だったから、初めての客だろうか。轟はその声を聞いて中に入れば、そこにいたのは三十代後半くらいの男。スラッと高身長な体は小綺麗なスーツで包みこまれ、髪の毛はオールバックに決められた、多分世の女性的には『イケおじ』と称されるような男だと思う。今までの相手は中年で小太り気味な男ばかりであったから、このような男が相手なのは少し新鮮だ。

「はじめまして。轟焦凍くん」

「は、じめまして……よろしくおねが、い、します……」

そう轟が挨拶をすれば、男はカツカツと革靴を鳴らして轟に近づく。目の前にきて分かったことは身長が一九〇手前といったところか。それなりに圧倒される。そしてその圧倒した男は舐め回すように轟を見下ろした。

「ふむ」

男はそう納得するように言うと、轟の前で屈むや否やポケットから鍵を取り出し、轟の貞操帯を外した。轟はバイブが抜けた時の快感とその開放感に思わず腰が抜けぺたりとその場に座り込めば、目の前にはしゃがんでいる男の顔が広がる。小皺は目立つが端正な顔立ちをしているようだ。

「酷いことするね、君の雇い主も」

「あ……、ありがとう、ございます……」

「礼には及ばないよ。それにしても君は本当に綺麗な顔をしてるね」

「ありがとう、う……：……：……：……：……：……：……？」

「ふふ、どうやら分かってないみたいだが」

そう言うと男は轟の二色の髪を撫で、その髪を指の隙間に通す。

「この髪は地毛？」

「そう、です……：……」

「そうなんだ。珍しくて綺麗な、良い髪だね」

そう言って男は少しだけ口角を上げる。

この屋敷に来てから初めて見る人の表情だったかもしれない。穏やかで、優しく、綺麗な顔だった。轟はその表情に触れて、ふと肩の力が抜ける。こんな優しい人、この世界にもまだいたのか。思わず目頭が熱くなって顔を伏せる。この人なら、この人になら抱かれても良い。轟はその時、その時だけ本当に心の底からそう思った。

人は見かけによらない。第一印象というものは覆されることが多い。良い人には裏がある。それが年齢十五歳の少年がまだ知らない事実だったのだ。

「じゃあ轟くん、早速こっちにおいで」

「え、あ……：……：……」

男が轟の手を取って立ち上がるのにつられて、轟も立ち上がって男の後についていく。大股な男のペースに合わせたせいで若干もつれてしまいが、なんとか転ばずに歩けば、部屋にある簡易ベッドの上に腰掛けさせられる。

「仰向けで寝転がって」

「は、い……：……」

そう返事をして轟は素直に寝転がれば、目の前に見えるのは真っ白な天井だ。早速抱かれるのか。大体客は初手にフェラを要求してくることが多いから、こうやってすぐベッドに寝かされるのが不思議で堪らなかった。轟は男の方を見れば、何やらベッドの足を弄っているように見える。

「よし、できた」

そう言うと男は轟の視界に現れて、その優しいな笑みを見せる。

「ちょっと冷たいかもしれないけど我慢してね」

すると男に腕を取られれば、その手首にヒヤリとした感覚が走る。よく見ると手錠がかけられていて、その手錠の先はおそ

らくベッドの足に繋がっているのだろうか。同じように両手、両足を手錠で拘束されれば、轟は大の字になって身動きも取れず拘束されてしまう。客を取る前の調教期間は抵抗させないよう両手両足拘束されたりしたが、客にされるのは初めてかもしれない。過去の経験からか、無意識に手足を動かせばガシャンガシャンと音がなる。少しは動かせるものの、不自由なことには変わりない。

「さて、準備は整ったね。さっきまでバイブ啜えてたから準備とかいらないもんね」

「は、い……………」

「あ、でもローションは使うよ。いくら拡がってても痛いからね」

男はスーツのジャケットを脱いで椅子の背にかけると、その傍にあるバッグを手に取って中を探る。

「僕はね、君みたいな綺麗な子の顔をぐちゃぐちゃにするのが好きなんだ」

「はあ……………」

「でも君は今まで出会った子の中で一番綺麗な子だよ。だから、そう言いかけて男がバックから取り出したのは見たことのない形体の道具だった。月みたいな形をしたもの、長細い棒、そ

れからドーム型のもの。そして何より見たことないのは、それを取り出した男の、薄気味悪い恍惚とした笑みだった。

「僕、ちょっと遠慮できないかも」

その笑みを見た瞬間、サーっと一気に血の気が引いて、知らぬ間にガシャンガシャンと手錠が鳴る。そんな轟の心境など知りもしない男はそれらの道具とピンク色のローションを持って、椅子をベッドの傍に持ってきて座れば、早速開封したローションを自分の指にかけて轟の後孔に突っ込む。

「っ、う……………」

「ああ、ごめんね、冷たかったかな」

「だ、いじょう…………ぶ、です…………っ」

「そっかそっか。ああ、やっぱりすごい拡がってるね、もう挿れても良さそうだ」

男はそう言うと、月型の道具にローションを垂らしていく。

「……………それ、なにするんです、か……………」

「これ？これはねえアナルバイブっていうやつでね」

「あな……………」

「まあ何をするかはこの後のお楽しみかな」

「っ、あ……………」

男はローションを十分に垂らしたそれを後孔に宛てがうと、ゆっくりゆっくり奥に進めていく。バイブよりは細く窮屈ではないが、その異物感に体を振らせる。男は轟の様子を見ながらぐるぐると弧を描くようにアナルバイブを挿れていく。

「ん、ん……………」

「どこかなあ、轟くんの気持ち良いところ」

「ん…………ん、っあ…………っ！」

「ここかあ」

轟はある一点・前立腺を当てられると、ビクンと体を跳ねさせた。しかし拘束もあって上手く体は動かせず、足に力を入れればジャラ、と音がする。

「ここだね、轟くんの前立腺」

「っ、あああ…………っ、ああ…………！」

グリグリとアナルバイブで押し潰され、轟はそれに合わせて嬌声を上げ腰を揺らす。バイブみたいに無造作に全体を弄る道具じゃなくて、前立腺だけを狙うものだ。そう冷静に解釈していれば、男はアナルバイブから手を離すと、カチ、と静かに音がなる。しかしその静かな音とは正反対に、アナルバイブからヴヴヴと激しい振動と快感がやってきて、轟はガクンと腰を浮

かせた。

「あっ、あああ…………っ!? あ、あ…………っ！」

「これは勝手にやってくれるから、次はこっちだね」

「あ、っ、ああ…………っ、ひ、あ…………っ!?」

轟は前立腺への直接的な刺激に頭が混乱する中、まだ勃ち上がっていない性器を掴まれてローションと共に上下に擦られる。轟の性器をこうやって自慰するみたいに触ってくる男は少ないから反応に困っていれば、若干硬くなった性器を見て男は細長い棒を取り、轟の性器の尿道に宛てがった。

「ま、まって…………、ください…………っ、そこ…………っ」

「え、ここ? あ、もしかして尿道未使用?」

「によ、ど……………」

轟は訳もわからず単語を繰り返してみるが、その単語に聞き覚えはあるのに今はあまりにも無関係で混乱する。初めて後ろを開発された時もあったが、そこは吐き出される場所で、入れる場所ではないのだ。目の前の男が何をしようとしているのが全く理解できなかった。

「そっか、僕が初めてか。じゃあ轟くんの尿道処女奪っちゃうんだね。嬉しいなあ」

「あ、まっ…………」

轟が制止しようとした手はガシャンと音がなって留まる。そして呆気なくその棒は轟の尿道に挿入された。

「ん、~~~~っ?!」

入ってはいけない箇所に入っている感覚に痛みと恐怖がやってくる。男はゆっくりゆっくり棒を進めれば進めるほどに、轟は無理矢理押し広げられるような痛みに耐えた。

「これ、尿道バイブって言ってね。すごい気持ち良くなれるモノなんだよ」

「ん、んッ、いた、い……っ、あ、ああ……っ!」

「大丈夫、この後ちゃんと気持ちよくなれるから」

「う、あああ……っ、あ、あ……っ」

正直、尿道の痛感とアナルバイブによる前立腺の快感が混ざってもう訳が分からない。その間にも尿道を割り裂く尿道バイブは奥へ奥へと進んで、轟は生理的な涙を流しながらその感覚を受け入れる。何が一体どうやったらこれが快感になるんだと言ってみようか、轟はそんな文句言う権利は持ってない。息を詰めて、くぐもった声を吐き出して、ひたすらに耐えていく。そんな時だった。

「っ、あああ……っ!」

感じたことのない感覚に全身から汗が噴き出るのを感じた。

目を見開いておそるおそる男を見れば、男は口角をゆるりと上げて目を細めて轟を見る。その表情は最初見た笑顔と全く違かった。

「~~~~っ、あ、ああ……っ!!」

コツンコツンと尿道の中で上下させられる度に轟はガクガクと揺れる。感じたことがあるのに感じたことのない感覚。でもそれは大きすぎて、何もかも持って行かれそうで、無意識に「逃げたい」と手足が暴れる。

「尿道の先に前立腺があるって知ってる？」

「え、あ……っ?」

「だから今轟くんはアナルからも尿道からも前立腺を叩かれてるんだよ」

「あ、っ、ああ……っ」

「ほらね」

「~~~~っ!」

その瞬間、頭の中で何かが弾け飛んだ。バイブの先にあるドーム状のものが亀頭に被せられた瞬間、尿道と亀頭にヴヴヴと激しい刺激が舞い込んできた瞬間、轟は達してしまった。しかもその絶頂は射精を伴わず、轟は絶頂を味わい続けることになる。

「~~~~っ、あああ……っ！あ、ああ……っ！イ、ってう、
イって……っ！あ！ああ……っ！」

メスイキも連続絶頂の経験も轟にはある。それこそバイブを
挿れさせられっぱなしの時なんかはその繰り返しで、だから
こそ地獄なのだ。今回はそれを遥かに超えるメスイキで、続け
様にやってくる快感が、一向に轟を下ろしてくれない。

「あ、め……っ、ら、め……っ！これ、ぬ、て、くだ、さ、
~~~~っ！あ、ああ……っ！」

「挿れてすぐなのにもうずっと飛んでるの？才能かな？それ  
ともさつきまでバイブ挿れっぱなしだったからすぐ気持ちよ  
くなれちゃうのかな？」

「う、~~~~っ、これ、も、だめっ、……っあ、ああ……  
……っ！ずっと、イっちゃ、う、あ、ああ……っ！」

「でもそれは妬けるなあ。僕だけで気持ちよくなって欲しいか  
らさ」

「ひ、う……っ!?」

「流石にこっちは開発済みだね」

そう言って男がピン、と指で弾いたのは轟の乳首だった。轟  
は恐ろしいものを見るかの目で男を見れば、ブルブルと頭を振  
る。

「だ、だめで、す……っ、いま、そこは、だめ……、だめ、  
です……っ！」

「ん？聞こえないなあ」

「や、や……っ！ほ、と……っ、や、えろ……っ」

「やめろ、って。誰に言ってるのかな」

「ひ、あ……っ!?」

男は怯える轟を見下ろし、ドーム形の道具を轟の胸に被せた。  
ドームの天井はブラシのようなものがついていて、轟はそれが  
一体なんなのか、何をするのか一瞬で理解してしまって、体を  
身震いさせながらガシャンガシャンと激しく手錠を揺さぶる。  
そして轟の乳首の先にブラシが当たった瞬間、男は繋がって  
いるリモコンをカチカチと動かした。

「~~~~っ、あああ……っ！」

これは頭がおかしくなる。ヴヴヴと震えるブラシが開発済み  
の敏感な乳首が削るように激しく刺激する。また頭が真っ白に  
なって達したことを察するが、快感が強すぎて何が今どうなっ  
ているのか分からない。分かるのは気持ち良すぎて辛くて逃げ  
たいのに、四肢を拘束する手錠のせいでまったく逃げられない。  
腰を振っても、胸を上下に揺らしても、玩具は一切外れず轟に  
快感を送り込んでくる。



「や、ああ……ああ……ッ！ あ、ああああ……ッ！ これ、も、だめえ………ら、かあ………っ！ イッ、い………っ、う、く………ッ！」

「すっごい気持ちよさそうだね」

「し、じゃあ………っ！ これ、し、じゃ、からあ………っ！ おねが、も、は、してえ………っ！ とめ、え………っ！ む、り、むッ、い、く………ッ！ あ、ああああ………っ！」

轟は必死になって訴えるがろくに呂律も回らず、できる限り快感を逃そうと暴れることしかできない。頭はもう真っ白で視界も霞んでいる。唾液だって、最後にいつ飲み込んだかなんて忘れてしまった。それでも男はそんな轟を見ながら微笑んでいるだけ。さっき少しでも気を許した自分は馬鹿だ。ただの悪魔にしか見えない。そんな男への恐怖を感じる暇などなく、轟は快感に快感を重ねていく。

「う、っあああ………っ！ また、い、っちゃ、く………っ、も、い、たく………にや、あ、ああ………ッ！」

「なんで？」

「き、もち、の………っ！ も、いらにや、からあ………っ！ も、とめえ、くだしや………い………っ！」

「気持ち良いの、もういらないの？」

「ひう………っ！」

ギョツと尿道バイブを押されて、亀頭への刺激と前立腺への刺激が強くなる。それでまたバチバチと弾ければ、轟は体を左右に激しく振って叫ぶように喘いだ。吐き出されるはずの精液は尿道バイブのせいで叶わず、上手く達せないもどかしさに身を震わせる。

「あ、あああ——ッ！ あ、ああ………っ！ イって、う、イって、かあ………っ！」

「うんうん、イってるね」

「ふ、あああ………ッ！ しゃせ、できなあ、の………お、やあ………あああッ！」

「そうだね、たくさん貯まっちゃってるね」

「ひ、う………ッ………う、や、ひ、やあ………あああ………っ!! おしり、のやつ………っ！ な、れ………っ！ さっき、より………っ！」

尿道バイブだけでない。何も触ってないはずのアナルバイブがさっきよりも前立腺を強く押し潰してくるので、バイブの振動がより激しくなる。

「これは轟くんが気持ち良いってギョウギョウしめつけてるか  
らね」



「しめつけ、てえ……っ、にや、あ、で……っ」

「僕は何もしてないよ」

「う、~~~~~ッ!? あ、ああ……っ! し、ど……っ、はげ、ひ、——ッ!」

「ほらまた、轟くんが締め付けたせいで」

嘘だ、今絶対強度上げただろ。そう訴えたい言葉も全部喘ぎ声で吸収されて、轟はベッドの上で躍り狂う。限界まで動かし続けている手足のせいで、手錠が当たる箇所が痛むのももう気にしてなんかいられない。頭が、身体中が、全て快感で支配されて、頭がおかしくなるどころか吹っ飛んでしまいそうだ。轟はポロポロと涙を流しながら必死に息を吸い込んで、言葉を形にしようと口を大きく開いた。

「も、だめッ、で……す、~~~~~っ、ゆ、してえ……っ! ゆ、して、くだ、しゃ……あ、い……」

「許して?」

「な、めるか、らあ……っ! あなた、の……っ! ち、こ……っ、なめて、おれん、なか……っ! すきに、うごいて、ッ、……っ、い、からあ……っ!」

「なるほど」

男は轟の訴えを感じ取ったのか、椅子から立ち上がってベッ

ドに腰をおろす。そして轟のグチャグチャになった顔を眺めて、ゆっくりその顔を摩った。その手は、さつき髪を撫でた時みたいに優しく、轟は束の間の安心を得る。この玩具地獄から解放される。そう淡い期待を描いた瞬間だった。

「言ったよね、僕」

「~~~~~っ、あ……っ!」

「君みたいな子をグチャグチャにするのが好きなの」

そう言う男は轟の腹に手を添えて、思いきり体重をかける。そのせいで轟は腰も浮かせず体も捻れず、手足と頭を動かすことが出来ない。逃せなくなった快感も頭にストレートにやってきて、崩壊しそうになる。

「——っ、あああ……!? ま、~~~~~っ、あ、あああ……っ! これ、や、ああああ……っ!」

先ほど初老にやられたが、身動きをとれないというのは存外苦しい。動くことで快感を逃すことができないのだ。こんなの、快感でなくて暴力だ。

「ひ、~~~~~ッ、おにや、か……っ! て、どか、いてえ……っ! くだ、ひや、ッ、~~~~~う!」

「いやほんと、轟くん可愛すぎて困っちゃうね」

「おねが、い、しま、ッ、す……! む、い……! も……」



…っ、むり、で、からあ……………っ！」

「最高だよ、轟くん」

「……………っ！ああああ……………っ！あ、あああッ！う、うああ……………っ！」

絶頂が止まらない。轟の体はもう限界に近くて、目はほぼ白目で口からはだらしなく唾液が溢れていて、もう意識も飛ぶ寸前と言ったところだろう。一瞬、一秒でもこの苦しみから解放されたい。意識を飛ばしてしまいたい。そう思えば少しずつ意識が霞んで行く気がする。ああ、このまま。その時、

「だめだよ」

「ん、う……………ッ!? う、ああ……………っ！な、れ……………っ！いま、い、しき……………っ」

「人間の生存本能も従えない瞬間って、ほんと、唆られるよね」

「……………ッ、あ、っあああ……………っ、や、だ、ッ、や、ああ……………っ！」

今意識を飛ばせたはずなのに、その男は直前で轟の意識を戻すように働きかける。なんだそれ。ということは轟は、この男の前ではずっと意識を飛ばすことも許されないのか。絶望に顔をくしゃりと歪ませる。そうすれば目の前の男の笑みが、さらに濃くなった気がした。

「そんな意識飛ばすくらい気持ちいいという轟くんには特別にこれを使おうか」

「う、あ……………あ、ああ……………ッ？」

男が一瞬轟から離れてカバンから持ってきたものは、先端が少し膨らんだ長いシリコンの棒で、轟は何に使うかも分からないそれを見て、ガクンガクンと腰を揺らす。

「あともっと拘束強くしようか。ベッド壊れちゃうね」

「ッ、や、やだ……………っ！やめ、ろ……………、やめて、くださ……………！」

轟は必死のあまり勢いよく首を振るが、男は取り出したベルトで轟の腹、太腿、二の腕の部分を縛って身動きの取れないくらいベッドと固定すれば、もう轟は腰を浮かせることも捻ることも手足を揺さぶることも仰反ることも許されない。ダイレクトにやってくる快感は地獄以上何物でもない。

「ひ、う……………うう……………ッ、う、あああ……………ッ!!」

「で、これを使うか」  
もう上手く顔を上げられず男がそれを使って何をするかも見れない。そして直後にやってきた後孔への不快感で、さっきの棒が入れられていることが分かった。圧迫感はないが細い棒が入ってくるのはこそばゆく不快だ。



「あ、ああああ………ッ、ッ、くくくう、あ、あああ………!!」

「さて、どこまで入るかな」

こつこつ、と棒の先端の膨らんだ部分が前立腺の先に当たる。パイプがよく入れられるところだ。セックスの時に入る最奥。男はその場所まで棒を入れると、探るようにくるくる回す。前立腺の次はそこを弄るのか。だが前立腺よりは拾う感覚が薄いから、まだ耐えられる。なんて思っていたその時、轟の全身に電流が駆け巡った。

「——ッう、あああ………!!」

何が起こったのか分からなくてチカチカと光る視界にただただ目を見開ければ、再び同じ快感がやってきて轟は声にならない叫びを上げる。もう快感なんかじゃなくて、恐怖心が腹の底から押し上げてきた。

「な、に………ッ、これえ………ッ、や、だ………ッ、やだ………ッ」

「あ、もしかしてここも開発まだだった？」

「あ、つああああ………ッ、！こんこ、しな、でえ………ッ!!」

「ここはS状結腸って言ってね。気持ちいでしょ？」

「や、や………ッ、だえ、だめえ………だめ、です………ッ」

ボロボロと流れる涙と共に轟は必死で懇願した。こんなまじ触られてしまえば、今以上に頭がおかしくなってしまう。死んでしまう。轟はふるふると頭を振って、男をじっと見つめて許しを請う。しかし男は、ふふ、と笑うと、その棒の持ち手の部分に触れた。そしてその瞬間、かつてないほどの快感が轟を襲う。

「ッ、くくくああああ………ッ!!」

ヴヴヴと激しい振動が轟の結腸を刺激して、轟は苦しい叫び声とともに強く達する。頭は何も考えられなくて快感が脳を焼き切りそうだ。それなのに、永遠に続くパイプが結腸を刺激し続けて何もかもが止まらない。両手を両足を全身を動かしたいのにそれも全く叶わず、全ての快感が轟を襲う。抵抗で揺らし続けた手首は手錠で擦り切れてじわりと血が滲んだ。

「あ、めえ………ッ!!も、これ、だめ、で………ッあああ………ッ!!もど、って、これな、あああ………!!」

頭がふわふわするなんてもんじゃない。無理やり真っ白にさせられて、ぶっ飛んで、もう自分が意識を保っているのかすら分からなくなる。でも一瞬意識が飛んだと思っても、パイプの振動を上げさせられて無理やり呼び戻される。終わらない、止



まらない地獄。

「う、う~~~~~ツ、あ、ああ……ツ!! し、じゃあ……  
っ、し、んじゃ……ツから、あ……ツ! だめ、ツ、や、えろ  
お……ツ! や、やあ……っ! や、や……あっ!」

「はー、可愛い轟くん」

「じゅ、つとお、イって、う~~~~ツ、のお……っ! ゆ、ひ  
てえ……っ! ゆ、てえ……っ!! も、むい、ら、ああ、  
ああああ……ツ!」

轟は思考を失いかけた脳内で必死に僅かな理性を保った。基本、契約時間は一人二時間。もしオーバーする場合は事前に伝えられるのが規程で、延長はスケジュールと双方の合意なしには得られない。そして、今回に関しては事前に何も伝えられてないから、契約時間は二時間はず。この部屋に時計はないから何分経ったのかなんて分からないが、最大でも二時間。それだけ耐えられれば、この地獄から解放される。大丈夫、耐えろ。轟焦凍。そう決意した時、男が「あ」と気づいたように声をあげる。

「そういえば今回、二十四時間買ったから」

「え……?」

ひゅ、と呼吸が止まった。

「つまり明日の九時。ずっと一緒にいられて嬉しいね」

「は、……」

男が何を言っているのか、轟には理解できなかった。

二十四時間買った。

明日の九時まで。

なにが。誰を。この時間を?

ガチャ、ガチャ、と手錠がなり続ける。そして全てを悟った瞬間、轟はまるで子供のよう泣きじゃくった。彼もまだ十五歳の少年なのだ。

「う、う……うそ、だ……、うそだ、う、あ……そ、  
だあ……っ!」

「ほんとだよ。あのおじいさんから何も言われてなかったの? 可哀想に。まあお仕置きって言ってたからな」

「や、だ……っ、や、やあ……っ、~~~~っ、も、ゆる、  
して……っくだ、しゃ……っ、むり、むりで、からあ……  
……っ!」

こんなの二十四時間耐えられる訳ない。無理だ。死ぬ。絶対に死んでしまう。嫌だ。嫌だ。

轟は両目から生理的ではない涙をボロボロと流し嗚咽を漏らす。涙で完全に濡れた瞳は男の表情を捕らえることが出来ない。



それでもその顔が、とてつもなく気味悪く笑っているのだけは分かった。

「改めて、今日はよろしくね、轟くん」

その言葉は、悪魔のささやき以外何物でもなかった。

終

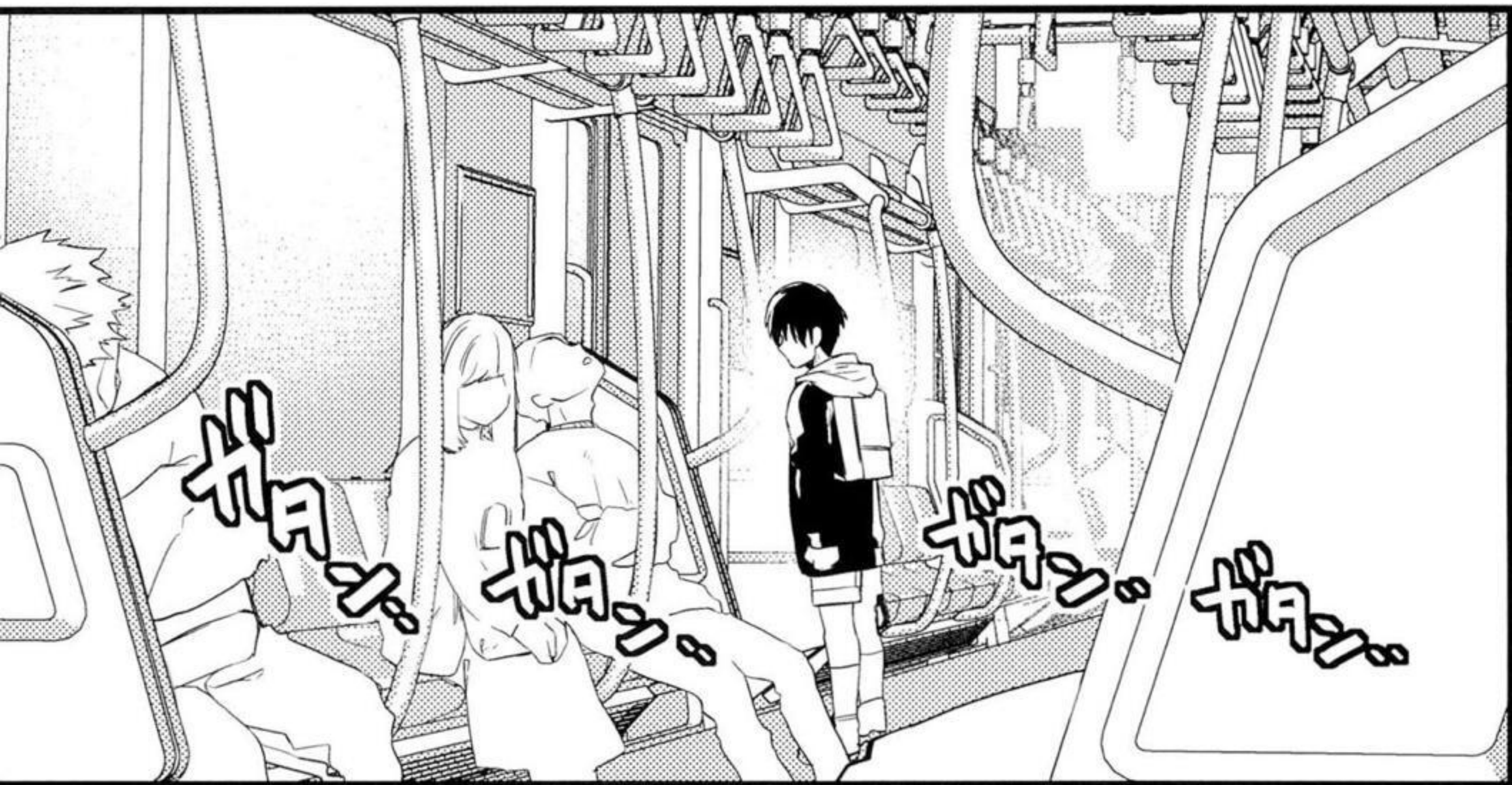


Knock  
Lock  
Shake



# 見えないアイツ

キスギ





服が

勝手に  
身体を  
まさぐって  
きやがる…!!

どこの  
どいつだっ  
絶対捕まえて  
やるっ!!

と思いつつ  
毎回餌食になる  
焦凍であった

End



ぐい、と進行方向と逆に肩を押される形となった轟くんの傾ぐ身体を、慌てて手首を掴んで引き戻す。

【前編】

はじまりは、ほんの些細な違和感だった。

移動教室の授業で塔を移るべく、長い渡り廊下を移動中にすれ違った、先輩たち。休み時間の真っ只中だ、同じように移動教室やら体育館、校庭に向かう生徒やらで双方向にそれなりの人数が行き交っている。大勢の生徒がすれ違ってもまだ余裕のある通路幅で、なんだか随分と真ん中寄りに歩いてきているな、というのを薄ら意識の端で感じ取ったのは、その集団とすれ違うほんの直前だった。そのまま何事もなくすれ違おうとしたその瞬間、その内の一人が大きく踏み出すように距離を詰めると、一番端にいた轟くんの肩に、それとわかるほどはつきりぶつかっていったのだ。

「っお、」

「っ轟くん……！」

「大丈夫か、轟くん……！」

「なんだろう、なんか感じ悪かったね……轟くん……？」

なんの事はない、日々鍛えている身体だ。こんなささいな衝撃など支障ない事はわかってはいたが、驚いたろうと視線を向けた先の表情は、予想以上に固く張り詰めたものだった。

(耳……?)

ぶつかられた方である右側の手を自身の耳に当て、先輩達が去っていった方を見つめる眼差しは、どこか体育祭以前の彼を彷彿とさせる切羽詰まったものだった。

「……………大丈夫だ。行こう」

時間にしてみればほんの数秒。こちらに向き直った彼の表情は、もういつもの涼しげなものに戻っていたものだから。

この微かな、重要な異変を、僕は見逃してしまったんだ。



「とーどろきくんっ」

「轟くん…また来てるよ…」

三日と空けず見掛けるようになったその顔に、目の前の彼の表情があからさまに曇ったのをはつきりと見て取る。ここ最近、昼休みになると度々轟くんに声を掛けにくる、同じヒーロー科の先輩。なんでも炎熱系の個性を持っているとの事で、相談と称してこうしてやってきては、轟くんを連れ出して行ってしまふのだ。見た目に軽薄そうな雰囲気があった事から、最初こそ心配した僕や飯田くんが、かなり強めに着いて行く事を主張したものだ。しかしそんな僕達を頑として拒否した轟くんは、大丈夫だ、と落ち着いた低い声ひとつ残し、さっさと先輩に着いて教室から出て行ってしまった。そうして授業開始ぎりぎりに戻った轟くんは本当に《なんて事ない》顔をしていて、戻るなり大丈夫なのか詰め寄る僕達の勢いに少し押されるくらいにして、「別に、大した話じゃなかった」と一言感想を述べるのみだった。それからというものの、本当に頻繁に轟くんを誘いに来るものだから、こちらですっかり先輩の顔を覚えてしまっていた。

「…わりい、緑谷、飯田」

「いや、気にしないでくれ！」

「うん、僕達の事は気にしないで、…行ってらっしゃい」

いつものように心底嫌そうな（あまり表情には出ていないが瞳が完全にそう言っている）、面倒そうな雰囲気醸し出す割に大人しく先輩の後ろを着いていくその姿に、心の内釈然としな何かを覚え、残された僕達は思わず顔を見合わせた。

「…轟くん、ほんとに大丈夫なのかな…」

「…時間内には必ず帰ってくるし、見た目にもこれといった変化はないようだし…本人がそう言う以上、俺達は信じるしかないだろう…」

紅白の髪を揺らしながら小さくなっていく、すっきりと背筋の伸びた後ろ姿。廊下の先に消えゆくその背を、二つの紅い瞳もまた、人知れず追いかけて動く。どこか剣呑な光を宿し眇められた瞳を逸らさないまま、爆豪は口の中で小さく舌打ちをした。



思えばその日は少し、いつもと様子が違っていた。毎度の如く先輩に呼ばれ姿を消した轟くんは、しかしいつもと違い休み時間終了間際になっても戻る事は無かった。飯田くんと二人、どうしたのだろうか、なにか揉め事があったのではといつまでも埋まらない空席を見遣り心配を募らせたまま、授業開始時刻が迫り、自分達も各々の席に戻るしかなくなってしまった。そしてとうとう、授業開始のベルが鳴り始めたその時。滑り込むようにして教室に入ってきたその人をやっと視界の端に認め、緑谷は内心深く安堵の息をついた。自身の席からは彼の様子を具には伺えないが、無事戻ったならば一安心だ。自分の中で一先ず決着のついた問題に人心地ついた気分で、緑谷は改めて目の前の教科書に向き直った。

「…轟くん！……大丈夫？…なにか、あった？」

その、授業終わり。とはいえ轟の様子が気になり、号令が終わるや否や彼の席まで来てみれば、小さな白い顔がいつもより更に色味を失って見える事が気になった。ちらりとこちらを伺った感情の読めない瞳が、そのままついと教壇の方へ移動する。

そこに先生に呼ばれ話し込む飯田の姿を確認すると、再び目の前に視線を戻した彼は、ゆっくりとその長いまつ毛を伏せるようにして緑谷を視界の外へ追い出してしまった。

「…べつに、…なんもねえ」

なんでもないことないだろ。明らかに暗く落ちたその声に内心毒づくも、そう言い切られてしまえばそれ以上、こちらが踏み込める事などなくなってしまふ。様子のおかしい彼に、どこかもしかしい想いを抱えたまま探るよう整ったかんばせを見下ろした緑谷は、ふとその目の端にかかる髪の一房、その先端付近が色濃く束になり固まってしまっている事に気が付いた。

「あれ、轟くん。ここ、髪のところ…なんかついてるかも、」

「…ツツ!!」

お昼ご飯の時にでも、なにか付いてしまったのだろう。何の気なしに毛束を解してやろうと伸ばしかけたその手はしかし、彼に届く事はなかった。猛烈な勢いで弾かれてしまった右手を中途半端な位置で浮かせたまま、緑谷は驚きに丸く目を見開く。



ガタ、と机を揺らすほどの大振りで手を振り払った轟は、その表情は、咄嗟に起こした自らの行動に驚いているようにも——自身に伸ばされた手に、緑谷に怯えているようにも見えた。こちらにも動揺に大きく見開かれた瞳はそのままに、あ、と小さく吐息を溢すと、微かに震える指先で指摘された髪束をぐしゃりと掴む。ついで弾かれるように席を立つと、廊下に出るなり、近くの手洗い場に大股で歩み寄った。

そのまま頭を突っ込むように体勢を低くした轟に、慌てて緑谷がその背を追う。

「待って、まって轟くん!!」

慌てて開かれた蛇口を逆に捻ったときには時既に遅し、肩口まで濡れ鼠になった轟くんは、手洗い場に両手をついたまま項垂れている。長めの横髪が頬に張り付き、髪の毛の先に溜まった水の粒がまるい頬のラインに沿って首筋を伝うのが、やけに扇情的に映ってどきりとした。

「…轟くん、これ。ハンカチ使って」

「……………わりい、緑谷」

咄嗟に差し出したオールマイイト柄のハンカチを、受け取ってもらえた事にまずは安堵する。びしょ濡れになってしまった顔や髪を雑に拭っていく轟くんの、もはや真っ白ともいえる横顔を至近距離で観察する。長い睫毛の先まで水に濡れた事で、その鮮やかな色合いを深めている様に思わず目を奪われ、つくづく綺麗な造形をしているな、なんて場違いな事に一瞬思考を持っていかれた。

「洗って返すな、これ。…ありがとう」

「…あ、ウン、いやそのままで、」

「洗って返すから」

「……………っ」

いいよ、と続けようとした言葉を遮り繰り返された言葉は、やけに力が籠っていた。先程乱暴に掴んだ毛束をもう一度慎重に指先で摘みあげると、目の端で確認しながら、固まっていた汚れを指先で完全に拭い去る。備え付けのハンドソープから出した液状石鹸を泡立てると、今度はゆっくりとした動作で蛇口を捻り、流水で指先を丁寧に洗い流す。轟くんがその一連の動



作を終えるまで、一言も口を聞かずに彼を見守った。この休み時間に彼に何かがあった事など明白だが、すっかりと口を噤んでしまった轟くんの頑なな様子から、どうやらもう何も聞き出せそうにはないと知る。

「：轟くん、何か、困った事があったら。いつでも頼ってくれていいんだからね」  
「：うん」

辛うじて絞り出した言葉は、彼に届いただろうか。雑に拭いたせいで濡れたままのうなじを自身の指先で拭ってやりたいなんて、胸の内沸いた衝動めいた何か、じりじりと胸を焦がす。どこか不安定に揺れて見える友人の、宝石色をした瞳をひとと見据えたまま。緑谷は胸に燦る想いをもみ消すよう、ぐっと握り拳に力を込めた。

×××××

はじまりこそ、ある種身に馴染んでしまったとも言える、数ある些末事の一つだと思っていたんだ。

「これさ、轟くんだよねえ」

人気のない準備室にわざわざ呼び出された時点で、どうせ何かしらのくだらない言いがかりをつけられる事など、ある程度想定は出来ていた。どこまでも一方的な想いをぶつけられ、あげく身勝手に要求されるあれそれにいちいち取り合っていたのではこちらの身が持たない。それは轟が、大して長くもない人生で早々に身につけざるを得なかった処世術だ。

それでも、常であれば無視するであろう誘いにわざわざ出向いたのは、その内容に大切な友人が名指しで含まれていたからだ。甘んじて受け入れるかどうかは別として、自分をどうしようとするのは勝手だが、友人を己の事情に巻き込むことだけは絶対に避けなければならない。今更何を要求されたとしても、自分だけで対処できるし、してみせる。大切な友人に危害など決して加えさせない。轟にとって、それは自分よりも何よりも優先すべき必須事項であった。

「知らないだろうけどさ、俺、轟くんと同じ凝山中学出身なの。で、君の時も居たでしょ？」



××先生。

「忘れたと、忘れられたと思っていた。どうしても忘れたかったその名前に、身体がびくりと反応する。名前を聞いて明らかに強張った轟の表情を認め、満足そうに笑みを深めた先輩は、殊更に楽しげな口調でこう続けた。

「部活の顧問だったからさ、俺けっこう仲良くてね。未だにやり取りするんだわ」

「で、下に同中でドロキシショートが入ってきたって話をね、何の気なしにしてみたわけよ。君有名人だったじゃない？昔から」

「…そしたらさ。これが送られてきたわけですよ。……これ、どう見ても君だよねえ？轟くん」

心の奥底に仕舞い込んでいた、忌むべき記憶が津波のようにフラッシュバックする。

これは教育的立場からの、あくまで指導なのだと思わしき事を盾に、どこまでも汚らしい欲望を一方的にぶつけてきた男。

感情など、轟の気持ちなど置き去りにして、とうとう最後まで暴かれる事を覚え込まされた身体。いつものように校内で難癖をつけられ、しかしいつもよりも過剰な攻撃を受けたがために仕方なくした、あくまで自衛のための正当防衛のはずだった。それなのに事態を把握するや庇うどころか逆手に取り、父親の名前までちらつかせてきた最低な男は、条件として卒業までの期間、轟の身体を要求した。そうして轟は卒業までの約三ヶ月間、あらゆる《男として》屈辱的な行為を甘んじて受け入れる事で、自らの犯した失態を清算するはめになったのだ。

『…ぐっ、…んぐッ、う、う、…ッ』

「ああ、轟、いい、いいよ、いい子だねッ、お口使うの上手になったね」

どこから撮ったのか、携帯には男の下半身に顔を埋める少年の後頭部しか写っていないが、特徴的な紅白髪ではっきりと個人を特定出来てしまう。先輩の携帯から聞こえる少し籠った音声は、それでも何を言っているのかまで聞き取れるものだった。忘れもしない、機械を通して聞くやつの声は明らか興奮に上擦り、湿っていて、ざあっと全身鳥肌が立つ感覚が肌の表面を



走る。

「いいよッ、良い…ちゃんと、喉奥まで啞えられるようになったね、」

「君と仲の良しさ、…なんて言っただけ、そう、緑谷くん！彼と俺のね、友達が委員会で知り合いらしくて」

「実は緑谷くんの、連絡先教えてもらっちゃったんだよねえ。友達の友達ってもう友達じゃんね？」

「お友達には、有意義な情報は、共有してあげるべきだと思わない？」

緑谷の名前を出されてから、ブンと世界の解像度が一段落ちたような錯覚に陥る。滔々と並べられる言葉を理解するのを、脳が拒絶する。耳鳴りとともに、耳元で感じる激しい鼓動。全力疾走したかのような息切れに肩で息をすれば、握り込んだ手の中が急速にかいた汗で滑った。

スマホの画面をすすると撫でる指先から、目が離せなくなる。

わからない、わかりたくなんてない。

奴はいま、何を言ってる？

「数こなすうちに上達したんだねえ。真面目だね。でももう、暫く誰にもしゃぶらせて貰ってないでしょ？」

「そろそろ、欲しいでしょ」

俺ので良ければ使わせてあげる、お友達にお披露目するんだっつたらもつと上達してからのが良いもんね。

そうだよね？轟くん。

いつのまにか目の前数センチに迫った先輩が、握り込んだ轟の拳をそっと手に取りゆっくりりと開かせていく。解かれたその指先が、ベルトのバックルに導かれるのを、見開かれた瞳でただ、見ていた。かちやり。軽い金属の音が響いたのを合図に、後は、そのまま。

慣れた仕草で、寛がせたズボンに縋るようにして跪いた轟の頭を優しくかき混ぜた先輩は、かわいいねと生温い息をその耳元に吹き込んだ。

元々、うまく行きすぎている気はしてたんだ。俺に今更そん



な、優しさで満たされた世界で生きていける権利なんて、あるわけないって。

(今日、お友達呼んだから)

いつか、廊下ですれ違い様告げられた一言。それから、その一言から、状況は坂道を転がるようにして悪化の一途を辿った。

——轟くん、今日は友達二人呼んだから三本ね、時間配分考えてやってね

——しゃぶる時さ、ズボン脱いでシャツだけになってよ

あ、いいね、コーフンするわその格好

——ほら、口ばっか動かしてないでちゃんと手エ動かして！後つかえてるから！

——そこら辺の女の子より綺麗な顔してるよねえ。おっぱい見せてよ、ほら自分で乳首摘んでぐりぐりっして

——おっいいね、勃ってきた！吸ってもっとかわいくしてあげるね

——今日は手え縛るから、お口だけで頑張ってみて

——あー出る出る、どこに出して欲しい？やっぱ顔かな？きれいなお顔にぶっかけてあげるよ！

——じゃあ俺ここ、乳首の先っぽまでセーエキ塗ってあげるからねっ

——エロいケツしてんね、パンツの上から擦っていい？はあ、もうコレ擬似セだね、轟くんッ、お尻気持ちいい？

——おっまえほんと変態な！あーでも、これさあ、実際どこまでヤツていいかわかんなくなってくるわ、

あー、いれてえ。

呟いたのは、誰だったか。

気がつけば複数人の男のモノを奉仕する事が当たり前前に、最近では身体まで性処理の道具として扱われるようになって。最後の一線を超える、ぎりぎりのところまで追い詰められて、後戻りできなくなっている。

不定期の約束が、三日と空けない習慣となり、ついに少しの時間も待てないと教室まであいつが捕まえに来るようになった



のは、いつからだったか。

繰り返される狂気じみた時間に、静かに壊れていく心は、痛みを逃し方を覚え始める。身に起こるすべては当然の事であり、轟にはそれを受け入れるしか術はないのだと。大切な人に拒絶され、とつくに汚された醜い己には、元々誰に愛される資格もなかったのだ。これは捨てる事など出来ない過去から目を逸らし、一瞬でも温かい場所で生きていけると、許されたのだと思いがり勘違いをした、その、罰なのだ。

\*\*\*\*\*

「おっ、しょーとくん！久しぶり〜」

「……………先輩」

食堂で早めの昼食を終え、食器を各々の配膳台に戻し終えたところだった。次の授業が体育館での実技訓練を予定していたため、少し余裕を持って着いた分、ウォーミングアップに時間を充てたかったのだ。すれ違いで入ってきた顔馴染みのない上級生の一人が、轟くんに声をかけてきた。随分と馴れ馴れしい様に面食らった僕達と対照的に、轟くんはあくまで落ち着いた

物腰で、声をかけてきたその人に向き直る。反応した彼の様子をご機嫌に伺うと、その肩に腕を回し、先輩は自分のいるグループへそのまま彼を引き摺るようにして連れて行ってしまった。

「ッ轟く…っ、」

「おい、あれ大丈夫なのかよ」

慌てて引き留めようとした声は届かず、輪に引き込まれた彼はすっかり上背のある上級生に囲まれる形となってしまう。不安げに彼の背中を見つめる緑谷の耳に、遠まきに事態に気がついた切島や上鳴が漏らした声が届いた。

「体操着姿、新鮮だね！今度はそれ着てきてよ」

「次いつ？俺ぜってえ参加するわ、今すーごい溜まってんのよ」

「今最高四？次五でいってみようか、轟くん」

彼を一人残して行く事も出来ず、心配でその場に留まった緑谷は、内心はらはらしながら場の様子を見守った。先輩達の間で軽いタッチで交わされる会話が、意識して聞かずとも耳に流れ込んでくる。飛び交うそのどれもが不可解な言葉の羅列で、



ひとつも理解出来ないそれに、不穏な気配にざわざわと血の巡りが早くなるのを感じる。一挙一動も見逃すまいと必死に見つめる彼の背中、どこまでも真っ直ぐで、静かで、清潔なままだ。やがてその美しい背に、締まった腰にするりと一人の腕が回され引き寄せられるその様を、ただ、緑谷は見ている。

「次はさあ、自分でシてるところを見せてよ。俺しょーとくんのイ顔見たいな」

「轟くんどんどん上手になってるからさ、ハードル上げてかないとね」

「俺達も負けてらんねえよな！勉強させてもらいます、轟センパイ！」

「お前、いつも早えもんな！」

響く下品な笑い声も、彼の柔らかな髪を嫌らしく弄ぶ指先も、腰に回されたままの腕も。その全てが痲痺に障って仕方がなくて、今すぐ輪に割って入って彼に触れる手を端から捻り上げてしまいたくなる。もはや彼を見つめる男達の視線すら気に食わなくて、緑谷は一人、身を焼くほどの焦燥感にその場で拳を握り込んだ。当の本人である轟は、一見どこ吹く風ではあ、まあ、なん

て無愛想にのりくらり受け流しているように見える。轟がそんな態度でいるのだ、第三者である自分が乱入してあえて事を荒立てることだけは、絶対に避けなければならないだろう。間にすれば、ほんの数分かそこらの出来事だったのかもしれない。それでも緑谷には、永遠に続くとも感じられるほど、それは長く耐えがたい時間だった。

「…待っててくれたのか。わりい」

「……………緑谷？」

やっと先輩達から解放され、ぱたぱたとこちらへ戻ってきた彼を見る僕の顔は、どんな表情を浮かべていたのだろう。僕を見るなりちよつとだけ苦しげに眉を下げた轟くんは、どこまで優しい人なんだろう。心配そうに僕を伺う彼の、長くて繊細な指先をそつと絡めとる。ぴくりと反応したものの、されるがままになっているのを良い事に、そのまま彼の片手を両手で目一杯握り込んだ。

「ッて、緑谷、っなんだ、イテエ、」

「轟くんッ！…僕は、君の力になりたいんだ…友達だから、」



自分が何を不安に思っていて、彼に何を求めているのか、いないのか、全くもってわからなかった。ただただ、あんな人達に気安く彼に触れられるのが、どうしようもなく不快で腹立たしくて、許せないと思った。触らせて、欲しくなかった。…それは、友人として？僕はいま、どの立場から物を言ってる？

明らかに様子のおかしい緑谷に、轟は手を取られたまま、気遣わしげな、どこか悲しげな視線を投げかけ立ち尽くしている。力になりたい、振り絞るように繰り返した言葉は、小さく震えながら、二人の間に重く落ちた。

\*\*\*\*\*

「轟くん、居る？」

授業終わり、わざわざ教室まで顔を出した男が轟を従え出て行くのを、じっと目線だけで追う。一時期頻繁に昼休みに来ていた、一学年上の男だ。昼休みによく来ていたのが、最近になって放課後にまでその姿を見せるようになった。人好きするよう

な笑顔で轟になにかしら騒がしく話しかけてはいるが、轟がまともに取り合っているのを見た試しがない。轟は、あれで結構興味のあるなしがはっきりと表に出るタイプの人間なのだ。

そんな轟が、大して興味もないはずのモブが迎えに来る度、毎度黙ってついて行く。隣を歩く轟の腰を男の手がこれ見よがしに撫でるのを、振り返り様デク達に向けられた顔が意味深に歪むのを、一つも見逃すまいと、気付けば瞳に焼き付けるようにして見ていた。違和感しかないそれに、滲む男の執着に、腹の底に溶けない憤りがマグマのように溜まっていく。あんなモブに、何だってあそこまでの接触を許しているというのか。

気になっている事はもう一つあった。最近たまたま耳に入っただ、それこそ根も葉もないような噂話のたぐいだ。

——しゃぶるの大好きな綺麗な子が、タダでヌいてくれるんだって。

色めきたって騒ぎ立てる連中に、アホらしいと切って捨てる事が出来なかったのは、その中に最近よく見る顔を見つけてしまったからだ。少し前から、あいつが迎えに来ると轟が疲れたような、どこか諦めたような表情を見せるようになった事に、気が付いている。あいつの近くで時間を過ごす事が多いデクも眼鏡も、どこか様子のおかしい轟を心配しているのがわかる。



散り散りになったいくつかのピースがしかし、決定的にハマる瞬間だけは見せる事なく、放置されたままになっている。

その薄気味悪い違和感を、引き剥がして、暴いてやりたかった。

「…轟」

夜も深い時間になった頃、やっと姿を見せた奴に声を掛ける。デクが携帯に連絡があった、良かったと騒いでいるのを聞いていたので、帰りが遅くなるのはわかっていた事だった。共同スペースのソファの背もたれで死角になっていたのだろう、突如かけられた声に轟がびくりと肩を震わせたのが、暗闇の中でもわかった。

「…なにしてんだお前、こんなところで」

「待ってた。…お前を」

戸惑いながらも近づいてきた奴に、合わせるようにこちらも立ち上がり大股で距離を縮める。いきなり目の前に迫った爆豪に少し引いた身体を逃すまいと捕まえて、近くの壁に力任せに

押さえつけた。ぐ、と衝撃に呻いた轟が、なにすんだと咄嗟に肩を押さえる爆豪の腕を掴み返してくる。そうだ、本来のお前は案外気が短くて、やられっぱなしは性に合わなくて、右頬を殴ったら左頬を殴り返してくるようなやつのはずだろうが。間髪入れず引き剥がそうとしてくるのを力づくで抑え込みながら、ぎらぎらと燃えるうつくしい瞳を睨め付けた。

「…てめえ、最近随分と楽しそうじゃねえか。毎日毎日、モブどもと仲良しごっこか？ウゼエんだわ、…ここんとこずっと、紙みてえな顔色しやがって。明らか調子崩しとんだろが。自己管理もできねえなんて雑魚かよなにしてやがる、イラつくんだよ舐めプがッ」

言葉を吐き出すほどに苛つきも増して、勢いに任せて胸ぐらを掴んだ拍子に、大きく皺のよった襟元から轟の胸元が露出した。見るともなしにそこを視界に入れた爆豪は、大きく瞳を開くと、驚きに喉をひゅっと震わせる。力の抜けた両手は轟のシャツから離れたが、乱されたそこから覗くものから、爆豪は視線を逸らす事すら出来ずに息を詰めたまま後ずさった。

そこには、暗闇の中はつきりと自己主張する真赤な痕跡が、



どこかの誰かの彼に対する歪んだ執着が、確かに肌に刻まれ存在感を示していた。動揺に震える爆豪の唇が、核心的な言葉を紡いでいく。

「……お前、あいつらと、…何しとんだ……」

「いや、ちげえな」

「…あいつらに、何されてやがる」

顔を俯かせたまま立ち竦む轟が、爆豪の掠れた声に、ぴくりと反応する。

「………関係ねえ。…ほっとけ」

低く小さく落とされたそれに、鳩尾のあたりから忘れていた猛烈な怒りが込み上げるのを感じる。噴き出す感情を叩きつけるように、轟の両肩に必死に掴みかかりその顔を無理やりに上げさせた。

「触らせてんのか？あんな連中に？」

「それ知ってどうすんだ。お前に迷惑かけてねえ、」

「ふざけんなゆるさねえ！」

「は？ッ、なにがだよ落ち着け、」

「じゃあこの痕はなんなんだよッ!!」

首がぐくりと振れるほど揺さぶられた轟は、改めて指摘されたそれに、ここにきて初めて大きく表情を歪めてみせた。震えるまつ毛がゆっくりと伏せられ、自身の首から胸元に散るそれを見やると、眉が辛そうに下げられ小さな口がきゅっと引き結ばれる。初めて見る心許ない、どこか幼気にすら見える表情に、心がつきりと痛んだ。表情の割に震える事もない、ただ暗く、押し殺したような声が、薄い唇から紡がれる。

「………別になにもされてねえよ」

「どうって事ねえ、同じ男のモノしゃぶらされる事くらい」

自嘲気味に一言そう落とすと、低く嗤う。

「あんなものは我慢して口提供してりゃ終わる、…あいつら早えしよ」



「身体触られるのだって、ぶっかけられんのだって別に良い。洗えば良いし、そんな事は別にどうでもいいんだよ、俺が、我慢すりゃ済む事だから」

一息に喋ると疲れたのか、はぁ、と息をひとつ、深く継いで。

見捨てられた迷子のように、両手で顔を覆ってしまおうと、聞いた事もない弱々しい声が掌の隙間から零れ落ちた。

あの轟からは想像もつかない、心の奥底、一等やわいところを、曝け出すような姿だった。

「……………緑谷に、知られるのが怖い。……………知られて、軽蔑されるのが怖い」

「…それが一番怖えんだ…どうしよう爆豪…ッ」

親を見失った、あるいは、水中で溺れる非力な子どものように。必死に縫り付くものを探した両手が、爆豪の胸元の布を握り込んだ。

強い力で掴み返された胸元がぎりりと締まり、力の入った全身は細かく震え、乱れる呼吸に合わせ不規則に揺れている。

泣いているのかと思った。

額を擦り寄せられた肩口から、ばくごう、と。吐息混じりに漏れた声に、どうしようもなく欲情した。

熱いと感じるほど高い体温が押しつけられた爆豪の肩口は、それでもなお、濡れる事はついぞ無かった。

### 【後編】

一体どこから聞きつけたというのか。

廊下から不意に顔を覗かせた奴を見て、心臓がギクリと嫌な音を立てた。唐突に自習になった、本日の最終授業。期末テストに向け実技を詰めようと早々に教室を出て行く者、筆記試験範囲を友人と確認し合う者、たわいない雑談に勤しむ者。教室は生徒達の活気ある音に溢れ賑わっている。

ざわつく教室内で一人、男を見つけるなりあからさまに身体を強ばらせた轟に、分かりやすく笑みを深めた男がゆっくりと距離を詰めてくる。

「最終授業、自習になったんだって？ウチも元々自習でさ〜退屈してたところお互い丁度良いかなって」



《自主学习》、付き合っただけよっか？

白々しく投げてきた問いの意図なんて、今更わざわざ確認するまでもない。張り詰めた無表情のまま自席から見上げる轟を、辿り着いたその机に手を着いた男の影が覆う。親切ごかした口調とは裏腹に、上から押さえつけるようなその両目が湛えているのは、一方的な捕食者の色だ。

なんの反応も示さない轟に焦れたのか、やや強引な仕草で手首を掴み上げられた。引き上げられる力に抗わずにいれば、腕と繋がる関節が軋んだ音を立て全身が強制的に持ち上がる。自らの意思を裏切り自然と身体を支えた両足に、轟はここにきてやっと薄ら絶望を覚えた。じゃれつくように装って勢い良く肩を抱き込まれ、身体が揺れる。

しっかりと回された腕の先、いやらしく二の腕を辿る指先に、服の下でぶわりと鳥肌が立つのがわかった。

「…ね、ホラ。折角だから身体動かさに行こーぜ」

そのまま出口に向け誘導する男に、力なく瞳を伏せる。促されるまま教室の外へと足を向けたその瞬間、——思いがけず強

い力に左腕が捕まった。

「轟くん、僕との約束は？」

「…緑谷、」

いつからそこに居たのか。轟の左手首をがっちり捕まえた緑谷の、硬質な声が場の空気を揺らした。真っ直ぐとこちらを見つめる瞳の思い掛けない激しさに、思わずたじろぐ。その瞳も、熱い掌から伝わる圧も、納得のいく応えがもらえるまでこの場から逃がすつもりはないのだと轟に伝えてきていた。

「…………みどり、」

「あー、もしかして先約？悪いね、そしたらちよーっとだけ先に時間貰えないかな？そんなかかんないからさ」

肩に回されていた手が、腰に滑る。軽く掴まれ、びくりと身体が震えた。

「…終わったら、後でちゃんと、俺から《連絡》するから」

「…っ!!」



わざわざもう片方の手でスマホを翳しながら、殊更ゆっくりと吐き出されたセリフ。背筋を駆け上った恐怖心にも似た感情のまま、反射的に掴まれた左手を引いていた。身体ごと強く引いたはずのそれに、しかし緑谷の手は解かれる事なく着いてくる。もはや軋むほどに力の込められたそこに、緑谷の本気具合を伺い知れた。

ここで力任せに振り解くのは、賢明ではないかもしれない。焦りで煮立った頭の中、なんとかさう判断した轟は一旦腕の力を抜くと、手を掴まれたまま緑谷に向き直った。優しくその手を外しながら、極力落ち着いた声を意識して呼びかける。

「：わりい、緑谷。《約束》、：またにしてもらっても良いか？」

身に覚えのない約束にわざわざことわりを入れ、言外にも謝罪の意を含ませる。

少しだけ眉毛を下げ微笑んだ轟に、見上げる大きな瞳が揺れた。心からの心配と、隠し切れない疑念と、それから。複雑な色の混じる瞳を一瞬考えるように伏せた緑谷だったが、優しくも有無を言わせない響きを轟の言葉尻に捉えると、外された手を

握り込み静かに身体の横に下ろした。ややあって再び上げられた瞳はしかし、変わらない強さで轟のみを映している。

「…………轟くんっ、」

「また、放課後にな」

続きそうな言葉を遮り、一方的に会話を打ち切る。言いしな振り切るように身体の向きを変え、早くも出口へと歩き出している男の背を追った。

——まって、轟くんっ

縋るような、責めるような、叫びにも似た声が背中を追い掛けてくる。それでも実際に追ってまで来ないのは、ひとえに緑谷の優しさからだろう。

酷く心配しながらも、轟の態度に強い拒絶を感じ、踏み込みたい気持ちをとるか抑えてくれている。緑谷らしくないと言えはそうかもしれないが、緑谷はとりわけ人の機微に聡いやつだ。強引にでも突き進み視界を開いてやれる強さも、無理に暴く事で傷口を広げてしまわないようにする優しさも併せ持っている。ことこの件に関しては度々引っ掛かる様子を見せながらも、轟の意思を尊重しあくまでまだ、見守る姿勢を貫いてくれ



ていた。

放課後に、なんて。守れるかわからない事を言ってしまったな。

面白いものでも見たような表情でこちらを振り返った男が、廊下の真ん中で轟を待っている。ひたひたと心を侵食する絶望にとらわれ重たい足を引きずり、轟は自らにとっての地獄へと、今日もまた甘んじてその身を投じた。

\*\*\*\*\*

「だいぶコッチも慣れてきたよねえ、轟くん」

「…うあ、ツあっあっは…ッ、…う、」

「…、っく、」

もう何度目かになる、腹の中を熱い液体が断続的に濡らしていく感覚。体内で排泄される事と同義のそれは、屈辱でしかない。今しがた出た体液を馴染ませるようゆっくりと奥までひと

突きした陰茎が、ずるりと後孔から抜き去られていく。食い締めていたモノがなくなり、後ろがぼかりと口を開けてひくつくのが自分でもわかった。男達の不躰な視線が集まるのを感じ、羞恥に背中が震える。下品な言葉を吐き掛けられながら、太い指先で縁をくじられる。垂れた体液が太腿を伝い落ちる様に、AVみてえ、と興奮した男の呟きが溢れた。力を失くした上半身はとうに床に潰れ、男に後ろからわし掴まれた腰だけを高く上げた無様な格好で恥部を晒している。伸びてきた手に尖りきった乳首を弄られ、腰に鋭く甘い痺れが走る。戯れに尻たぶを叩かれて、殺し切れなかった声にまた揶揄するような笑い声が上がった。

轟と同中出身だというその男は、ある日突然目の前に現れると、一瞬で轟の世界を真っ黒に塗り替えていった。消えない過去を、轟が教師のモノを必死に奉仕する動画を、これ見よがしに提示して男は嗤う。

男からの要求は、実にシンプルなものだった。高校の友人に、緑谷にバラされたくなければ、黙って要求に従えと。他にもぐちゃぐちゃ得意げに話をしていたが、話を要約すると、どうもそういう事らしかった。



要はまた、そういうことだと、轟は理解した。

始めこそ、主犯の男一人の求めだけに応じていれば良いと思っていた。それが次第に男の友人が加わり、轟を共有する輪となって、多対一が常態化するまでが早かった。更に噂が広まったのか、相手が男の友人から知人程度までになり、見る顔は日によって様変わりするようになった。

緑谷や飯田達には違和感のないよう炎熱系と説明していたが、主犯の男の本当の個性は、モノ自体の持つ記憶やデータに干渉できる類のものだ。行為に参加するには、男との事前の連絡先交換が必須条件だった。行為中の轟の痴態はその場では各々のスマホに抑えられても、最終的にすべて個性によって男の管理下に収集される。

だからあくまでも主従関係は、対男との間でのみ成り立っていたはずだった。

それなのに気付けば《貸し出し》なんてふざけた体で、現場に元凶の男が不在のまま、事に及ぶ日すら出てくるようになっていた。こうなってしまうえば、縛りなどあってないようなものだ。

こうしてどこまでもひっそりと、しかし着実に、轟を共有する輪は男たちの間で広がっていったのだった。

相手する人数が増えるにつれ、男達から轟への要求はエスカ

レートしていった。ついに轟本人を前にして挿入の話題が必ず場に登るようになった頃、久しぶりに主犯の男が顔を見せた。轟にとっては運の尽き、男達にとっては渡りに船とばかりの夕イミングだ。轟に群がる男達に、主犯の男はあっさりと許可を出した。どうせ処女じゃないしね、なんて、クソみたいな言葉付きで。

本当の意味でからだを犯されたのは、そう遠くもない最近の話だ。下準備は、自分でやって来るように言われた。中学の教師相手には慣らすところからされていたから、どの程度ほぐせば良いのかなんて到底わかるはずもなく、屈辱に歯を食いしばりながら震える指先で後孔を弄った。恐怖心から溢れる程ナカを濡らしたために、指定場所に着く頃にはローションが漏れズボンにまで染み出てきていた。轟を組み伏せるなりベルトをじつとりと外していた男が、轟の尻から太腿にかけて色を変えたズボンに気が付き興奮に息を荒げる。男にすぐ犯してもらえよう自ら準備してきた轟に、自分達でそう指示しておいて、男達は嬉しそうに淫乱だと罵った。

本来そうあるべきでない器官を無理やり開いて使うのだ、初めてではないからといって恐怖心がなくなるものでもない。後ろの窄まりに早急に押し当てられた熱に、身体の震えが止ま



らなかつた。やがて身体を貫かれる凄まじい衝撃に、終わらない嵐のような暴力に、轟は最後にはわけも分からないまま涙を散らしていた。

一度落ちてしまえば真つ逆さま、男達の欲するままに身体を差し出して、好き勝手突かれて揺さぶられて、奥に吐き出されて。

もはや、何人に穴を使われたかわからない。

しかし人間という生き物は慣れるもので、はたまた轟に元からその素質があつたのか、何度も抱かれる内に轟の身体は後ろでも快感を拾うようつくり変えられていった。望まぬ快感を無理やり引き出され、何度も強制的に絶頂を迎えさせられる。疲弊する心身に一方的に叩き込まれる過ぎた快楽は、苦痛でしかなかった。

それでも今にして思えば、ただの穴として扱われていた間は、まだいくらかはマシだったのだ。誰が言い出したのか、開発、なんてふざけたお題目がこの行為に冠せられたその日から、状況は轟にとって、更に悪化の一途を辿っていった。

まるで蟻地獄だ。一度足を取られてしまったら最後、這い上がり日の目を見る事は二度と叶わない。轟にとっての温かな光は、親友の瞳をただただ真直ぐに見返す事ができる自分自身、

あるいは、またともに曇りなく笑いあえる日常そのものだった。ただ、それだけが欲しかったのに。

\*\*\*\*\*

《十八時三十、いつもの倉庫ね》

金曜の放課後、来たる休日に向け浮き足立つ雰囲気のある教室内で一人、届いたラインに胃の腑が急激に気持ち悪くなる。

指定されたのは、今はほぼ保管庫と化している体育館脇の倉庫だった。一日を通して人気がないそこは、《長時間にわたり複数人で》轟を甚振るために奴らが好んで使う場所だ。

最近、特に轟を注意深く観察している様子の緑谷をちらりと伺う。麗日と談笑する、その穏やかな横顔をどこか後ろめたい気持ちで盗み見た。刻み込まれた記憶に否応なく込み上げる吐き気を堪え、鞆を取り上げると、轟は足早に教室を後にした。

クラスメイト達が、皆揃ってマフラーやら手袋やらの防寒具を身につけ出す季節柄だ。この時期は日が落ちるのが早い。薄



闇の中、ぽっかりと真暗な口を開け佇む倉庫に言い知れぬ恐れを感じ足が竦んだ。先客がいるのだろう、無駄に重厚なつくりの両扉は開け放たれている。固まった足を無理矢理に動かし一歩踏み入れるなり、入口脇に居たらしい男に背中から突き飛ばされた。バランスを崩し二、三步たたらを踏んだ轟の背後で、重たい金属の音が倉庫内に反響する。頑丈な扉は、閉め切ってしまえば防音の役割を果たすだろう。暗い倉庫の奥、深まる闇に佇む人影が、捕らえられた哀れな獲物にゆらゆらと動きを見せた。いくつもの足音が不規則にこだまして、鈍く鼓膜を叩いていく。ゆっくりと迫る不協和音を聞きながら、轟は心と身体を切り離すよう、静かに一度、瞼を閉ざした。

「はい、そこ、敷いてあるから」

轟を突き飛ばした男——今日は居たらしい、主犯の男が轟の腰を抱き、エスコートするように開けた場所へと誘導する。男が半笑いで告げた内容は、雑な命令だ。薄汚れたマットに、下履きを脱いで靴下で上がる。真ん中あたりで振り向いて、その場にどさりと腰を下ろした。両手を後ろ手について、足は大きく開脚する。服はそれ以上、自ら脱がない。全て男達に仕込まれた

手順だ。無防備に腹を見せた服従の格好で、轟は自身を見下ろす男達に冷え切った視線を投げた。

早速と足の間に入った茶髪の男に、両肩から押し倒され埃が舞う。鼻息荒くネクタイが解かれ胸元がはだけられていく様を、どこか他人事のように眺める。背中を僅か持ち上げられ、ジャケットを引き剥がすように腕から抜かれる。両脇の男にそれぞれ腕を取られ万歳された先、一纏めにされた手首を結ぶのにネクタイがそのまま使われた。

「轟くん、目もそうだけど色素薄いよね」

「肌キレイなのいいね、コーフンする」

早急にシャツの前を全開にした茶髪の男が、インナー下の素肌へと指を這わせていく。確かめるように胸元から腹へ何度も肌を撫でられ、抑えきれない嫌悪感に鳥肌が立った。インナーをたくし上げられ、裾を口許に充てがわれる。無言の指示に従い、大人しく裾を自ら噛んで啜えた。露わになった胸を、両脇の男にそれぞれ揉まれる。肉をかき集め、掬い上げ強調するような動きが羞恥を煽り、啜えた布をきつく噛み締める。乱暴なそれはしかし、いたずらに胸の先端をかすめ、時に形を変えるよ



うに押し潰しては離れていく。指先がそこに触れる度腰の奥に  
びりっとした疼きが生まれ、靴下を履いたままのつま先にきゅ  
っと力が入った。

「アレ持ってきた？」

「持ってきたよ、結構値段したわ。後でワリカンな」

上半身を責められる一方、下半身の方で交わされる会話が気  
になり身体が強張る。衣ずれと靴音に微か混じる、金属音に余  
計に不安を煽られる。

傍観していた主犯の男が、轟の顔の脇にすんとしゃがみこ  
んだ。啞えていたインナーを外されると、呼吸がいくらか楽に  
なる。無意識に噛み締めていた布地はいつの間にかじっとり  
湿って、口許からいく筋か唾液の糸を引いた。横たわる轟の小  
さな顎を掴んで顔を向けさせ、潤んだオッドアイが良く見える  
よう前髪を払うと、男はにこりと微笑んだ。

「轟くん、今日も美人さんだねえ。何して遊びたい？バイブは  
もういくつか遊んだもんねえ。ほら、こっちのサイズがお気に  
入りね」

間延びした話し方が、いちいち癩に触る。男は徐に男性器を  
模したグロテスクな玩具を取り出すと、轟の目の前に突きつけ  
た。やわらかな頬の形が変わるほどぐりぐりと押し当てられ、  
男達の囁し立てる声が飛ぶ。思い切り顔を逸らそうとするが、  
強い力で男の正面に引き戻された。

「んー、欲しそうな顔してるね。でも残念、こっちじゃなくて、  
今日はコレ！使ってみよっかあ」

轟くんのために僕たち奮発しちゃいました、などとふざけた  
調子で取り出されたそれに、轟は思わず瞑目した。黒のレザー  
と冷たい金属で作られたそれは、ぱっと見趣味の悪い下着のよ  
うな形状をしている。ただし普通と明らかに異なっている箇所  
がいくつかあり、用途のわからないそこが異様に目を引いた。  
特に目につくのは、股間部分の網目状のデザインと、その上部  
に付いている錠前だ。複雑な形状に理解が追い付かず目を白黒  
させる轟に、男は殊更楽しげに目を細めた。

「これ、なんだと思う？」



「おまえ良いシュミしてんね」

「いやいや、轟くんに似合うやつめっちゃ探したんだから」

軽いやり取りの間にも、絶え間なく与え続けられる刺激に、どうしようもなく呼吸が荒くなっていく。正面の男は今は鎖骨の窪みをしつこく舌でねぶり、鬱血痕を散らすのに執心している。身体の左右から異なる刺激を与えられ続けた乳首は充血し、今やぷっくりと膨れて存在を主張していた。先端を強めに弾かれ、びくびくとわかりやすく腰が跳ねる。

「焦凍くんのおっぱい、すごい敏感そう」

「クリトリスみてえ」

「男のくせに胸にクリトリス生やすとか、ド淫乱かよ」

一転、先端をかりかりと爪先でいやらしくあやされる。つきつきと下腹の奥の方が切なく疼いて、また腰が揺れて、逃しようにもない快感に唇の端から唾液が一筋伝った。

「っ、うあっあ…！、っふ、うう、っぐ、」

「説明してあげようかと思っただけど、聞けそうにないね。とり

あえず着けちゃおうか」

顎先から指を伝う唾液を轟の太腿で雑に拭くと、主犯の男が徐に立ち上がる。上半身を責めていた男達が一旦離れると、後ろに回った体格の良い男に上体を起こされ、人形のように腰を掴み上げられ身体が浮いた。腰回り、尻の割れ目に沿って細いレザーのベルトを通される。網目状の籠のようになってい部分の前貼りにあたる正面にきて、得体のしれない恐ろしい予感に自然と呼吸が激しく乱れていく。腰を振った抵抗も二人がかりでは軽くないなされ、とうとう正面に立った男に、緩く反応していた性器をそっと掴まれた。感度を確認するように、親指で敏感な先端をくるくると撫でられる。直接的な刺激にびくりと腰が震え、とぷりと溢れた先走りを掬うと、細身の性器に滑らせぐちぐちと扱かれた。抗えない男としての快樂に頬に朱を走らせ息を上げた轟を見遣ると、男は嗜虐的な笑みを深める。ややあって扱く手を止めると、男は勃起しきった性器の根本を改めて軽く掴んだ。轟の顔を具に観察しながら、根本から、徐々に下向きに力を加え押さえ付けていく。身体欲求に抗う苦痛を伴う行為に、身体が強張る。予測のつかない動きに、男の手元から目が離せない。やがて完全に下向きになった性器を、あろう



事か、男は網目状の籠の中に丁寧に収めてしまった。初見の印象通り、レーザーで作られた、卑猥なデザインの下着を履いているような見た目が完成する。窮屈な籠の中、強制的に下向きに固定された性器が苦しい。目の前で得意げに錠前をひらめかせた男に、轟はここにきてやっとその意図を理解した。理解した途端、耳元でざあっと血の気が引く音が、聞こえた気がした。

「気づいちゃった？コレね、ここに付けたらね、完成」

かちやり。あまりに軽く、無情な音が落ちる。金属の鍵をズボンのポケットにしまうと、男は似合ってるよ、とまた轟に微笑みかけた。

「コレね、貞操帯っていうの」

「轟くんはこれでもうおちんちん使えないから、オンナノコみたいに後ろだけでイけるようになるうね」

言われている、言葉の意味がわからない。

このままの状態で、：後ろだけで、イく？

「：ひっ！！、——あ、ッ」

「ダメだよー、逃げちゃ」

無意識に逃げを打つ身体を後ろから強く引かれ、腰を上げられて四つん這いの体勢に組み伏せられる。尻の間を通るレーザーをぱちりと外されると、濡れそぼった後孔が露になった。既に準備されているそこへ、早速と指を二本突き立てられ、ぐちゅりと卑猥な音がした。前を封じられたまま、このまま身体の奥、最も弱いところを暴かれたら自分はどうなってしまうのか。本能からくる恐れに腕だけで前へずり上がれば、嗜めるようにすぐ様腰を引き戻された。挿入された指でぐるりと中の様子を探ると、あっさりと見つけ出したその場所をくっくと突き上げられる。腹側浅いところ、何度も慣らされた場所への刺激に、あっという間に腰に熱が集まった。きゅうっと腹の奥が切なく疼いて、どうしようもなく陰茎に血が集まっていくのがわかる。それでも狭い檻の中、張った陰茎は勃起を許される事はない。身の内で暴れる欲求が辛くて痛くて、もどかしくてたまらない。

唐突に胸の先端を引っ張られて、かくりと頭がのけぞった。晒された首筋に舌が這って、止んでいた他の性感帯への責めが容赦なく再開される。顔の前で主犯の男が悠々と股間を寛げ始



めたのを、轟は絶望的な気分で見上げた。

「っあ、ま、て、くくくッやめ、ろおッ！！！！」

「こーら、暴れないのっ」

「腕ちゃんと押さえつけとけよ」

「やっめ、ッうあっあ、くくくッっ！！！！！！」

心の準備も出来ぬまま、後ろにひたりと熱い塊が充てがわれる。すぐ様狭い肉をかき分け挿入ってきた剛直に、性感帯をあます事なく擦り上げられ声にならない悲鳴を上げた。突き上げられかひゅ、と喉から空気が漏れる。じんじんするところをぬるりと性器の先端で撫でられて、込み上げる衝動を逃せずには腰があわく揺らいた。当たっているそこを、そこをもっと深く、もっと強くされたら、もっと、いい。浅いところを拡げて擦って、引き抜かれる陰茎に、内壁が逃すまいと追い縋るのがわかってしまった。低い嘲笑とともにずん、とすぐさま奥までハメられ、堪らず舌を突き出して打ち震える。

間髪入れず腰をがっちりと掴まれたまま、道具のように陰茎を抽送される。行き止まりまでばちゅばちゅと腰を打ち付けられ、みっちり奥までハメられて、暴力的な快感に足ががくが

くと震える。突かれる度中のモノをきゅうつと食い締めて、イイところに自分で当ててはまた感じて、止まらない快感の連鎖に轟は頭を振りたくった。

「ア、っあつく、ふあ、あっあっあっは、うくくッッ！——ッああ！！！！う、ああっ、んあ：っ」

後ろから容赦なく突かれて、身勝手に揺さぶられる。間違はなく、とうに絶頂を迎えていていくらしいの性感だ。そうならないのは貞操帯により性器が拘束されていて、射精どころか、勃起すら禁じられているからだ。送り込まれる許容量を超えた快感が、身の内で暴れている。行き場のない苦しみ、押しえ付けられた腕の先、指先でがりりと床に爪を立てた。身悶える轟の事などお構いなしに、無理やりに顔を引き上げられる。唇の端に両親指を掛け、めいっばい口を開かされる。狭い口腔内にぬるついた陰茎を差し込まれ、揺れに合わせ奥まで突かれて、たまらず喉の奥を引くつかせて嘔吐いた。マットの隙間から伸びた手に乳首を捏ね回されて、堪え切れず何度も腰を振る。前を封じられながらの惨めな動きに、男達の興奮した笑い声が反響した。



「——っあ、」  
——なにか、くる。

一際深く突き込まれ、性器の先端で奥を捏ねられた瞬間。意識が一瞬浮いて、身体の中、何かおそろしいものが首をもたげた予感を感じ取る。なにか、くる。決壊する。身の内で急速に沸き上がる未知のそれがこわくて、逃れたくて、轟は身も世もなく身体を暴れさせ全身でのたうった。

「——っ!!!、っあ、あ~~~~っつ、うう、ふあ、っあっあっあ  
あ!!!!!!あん、ア、あ~~~~っつツツツ!!!!!!」

「喘ぎ声やばっ」

「ちゃんと押さえとけよっ」

きつきつに固定された前が痛い。後ろが気持ち良い。痛い、こわい、きもちいい、いききたい、いききたい、つらい、いききたい。いききたい。

もう、なんでもいいから、ゆるしてくれ。

「~~~~や、くる、くる!!!!!!あっあ、なんかきちや、や、あ  
——っ!!!!!!はずし、まえ、んんっん、あ、あう、やめ、こ  
わ、こわい!!!!!!やら、や、あっあっあああッツツ」  
「~~~~は、えっろ……」

固くしこった両乳首の先端をぐりぐり捏ねられ、強い力で引き絞られた。凶悪な性器のきつききに最奥を押し開かれ、がくりと視界が揺れる。

ぱきん、と自分の中、なにかの針がふれきったような音が、した。

「っお あ、」

陰茎を咥え込んだ後孔がばくばくと収縮して、焦点のブレた瞳を目一杯に見開く。ドクンと身体の奥何かが弾けて、ふわりと意識が飛んで、超えてはいけないラインをからだの許容量を、とうとう快感が飛び越えてしまったのがわかった。

全身の筋肉が緊張して、舌の根が痺れて、脳天から指先まで電流のように走った甘い官能に打ち震える。全身が性器になったみたいに気持ち良くて、暴れ狂う快感が止まらなくて、沸き上



がる衝動のままに声を上げていた。獣のようにびくびくと腰を振る。透明なよだれが垂れて、のけぞった拍子に見開かれた瞳から涙が溢れた。

ぐっぐつと奥まで突かれる度、真っ白な頭にまた快感の波がきては、視界に星が散る。

どこにも逃げていかない快感が、身体の中ばちばちと跳ね回って、胎動して、巡る。暴れ狂う。ぶっ飛んで、バカになる。気持ち良い。きもちが、いい。あたまのなか、きもちいいしか、かんながえられなくなる。

「……………、最っ高」

腹の奥に熱い飛沫を感じ、酷使された喉から遅れて掠れた喘ぎが押し出される。疲れきった全身が泥のように重い。何も考えられなくて、そんな自分を遠くから見ているような、どこか心地良いまどろみに落ちていくような、そんな感覚がした。

誰かのスマホの、録画終了のまぬけな電子音が耳に微かに届く。しょうとくんのメスイキ初撮りだね、なんて軽い声を、意識の端でふわふわと聞きながら。

轟はゆっくりと長い睫毛を閉ざし、現実から、すべての感覚

を遮断した。

\*\*\*\*\*

(~~~~~っ、く、そ、ッ)

背中を気づかれない程度に丸め、机の下、疼く腹にそつと掌をあてがう。どこまでも冷えていく思考とは裏腹に、どうしようもなく次第に熱を孕んでいくそこを震える手で抑え込んだ。

今日も昼休みに遊ばれた、その《お土産》を腹の奥に仕込まれていた。挿れられた男根を模したパイプは、先日使われた貞操帯によって轟の弱いところに当たるよう留められている。下向きに自身の性器を固定される瞬間は、男性性を根底から否定されているようで、絶え難い屈辱を感じた。

——午後の授業は座学だけなんでしょ？轟くんには退屈だろうからさ

男のふざけた口調が脳裏に蘇る。ともすれば溢れてしまいそうになる喘ぎを押し殺そうと、轟は今一度強く歯の根を噛み合



わせた。

本日の授業も残り二コマ、その一つが始まってすぐにとうとう動きを見せたバイブに、その威力に轟は全身に鳥肌を立てて慄いた。先生の教科書を読み上げる声が淡々と響く中、咄嗟に歯を食いしばり前屈みに全身に力を込める。そうでもしないと、あらぬ声を喉の奥から溢れさせてしまいそうだった。

前立腺を的確に抉り、胎内で震えるそれにダイレクトに性感を煽られ、腰の奥に覚えのある熱が溜まっていく。絶えず襲うびりびりとした快感の波に、陰茎に血が集まり脈打っているのがわかる。狭い檻の中張り詰めた前が痛くて、もどかしくて、腹にあてた手をそつとずらすと股の間にぎゅっと押し込んだ。

機械的に一定の快感を送り込んでくる玩具に翻弄され、授業が終わる頃には、轟の息はすっかりと上がりきってしまった。終盤に差し掛かったあたりから、隣の八百万からちらちらと心配そうな視線を感じていた。この状態で声を掛けられるのだけは避けたいが、優しい彼女の事だ、このままいけばそれはほぼ既定路線になってしまうように思えた。

となれば、声を掛けられる前に自ら動くしかないだろう。動く事で胎内で新たな刺激が生まれてしまうリスクはあるが、背に腹は変えられない。最後の授業だってまだ残っているが、幸

い得意科目の英語だ。轟の出席番号的にも本日当たる可能性が高い以上、どうしたってこのまま出席する事は不可能に近かった。轟は心中ひそかに決心すると、終業のベルが鳴るや否や鞆を引っ掴んで教室を飛び出した。案の定心配して八百万が呼びかける声を背中に聞いた気がしたが、もはや気にしていらぬ余裕はなかった。勢い良く動いた事でバイブがずれ、新たに胎内に生まれた快感に身体を震わせながらも、一刻も早く教室から離れたたい一心でなんとか力の抜けた足を踏み出す。廊下の壁に手をつき、腹を抑えながら出来る限りの早足で、保健室に向かった。本当は自室まで戻りたいところだが、距離がありすぎた。今はとにかくクラスメイト達から離れた場所で、一人になりたかった。

人目に付かなさそうなところを選びながら、なんとか辿り着いた保健室のベッドの上。カーテンを引くなり倒れ込んだ轟は、じくじくと疼く腹を庇うように身体を丸め熱く震える息を吐き出した。ここに向かう途中から気付いてはいた事だったが、振動が授業中に比べやや弱くなっている。恐らく男の手元のスイッチで、強弱をコントロールされているのだろう。

人の身体で遊びやがって。

どこまでも悪趣味な男の嗜好に、誰も居ない事を良いことに



ひとり激しく舌を打つ。決定的な刺激からは程遠く、今は生殺しの淡い快感だけを孕んだ腹の奥に、堪らず太腿を擦り合わせた。出したくて堪らない。ふざけた南京錠を外してしまつて、バイブで良いところを何度も突いて、前を扱いて思いっきり出してしまいたい。

だって、轟は今、自分でそれが出来る状態にある。

ズボンの右ポケットを握りしめる。そこには果たして、男から手渡された貞操帯の鍵が仕舞われているのだった。

目の前の欲に飛び付きそうになる鈍い思考に、必死に昼間男と交わした約束を脳裏に思い返す。それは男からすれば完全に遊びの一環、ただの思い付きでの提案だったろう。胎内の違和感に身じろぐ轟に、愉悦の笑みを浮かべた男が楽しそうに言い出した、《賭け》の条件。

——おれさ、面白い事思い付いちやつた。いっこ賭けしない？  
轟くん。

手のひらに、自らを戒める楔の鍵を落とされる。

——それ、轟くんからお願いして誰か、お友達に外してもら

つてよ。

轟くんさ、緑谷くんには気づかれたくないんだよね？この関係。

男の口元が、嗜虐の笑みを湛えてゆがむ。

——無事ミッションクリアできたら、緑谷くんには知られる事のないように、卒業まで協力してあげる。もっと隠れてやるようにするよ。緑谷くんの居る前では、もう君に話しかけないよう皆にも言って徹底してあげる。残念ながらもうやらないとは言えないけど、そこだけは保証してあげるよ。

どうする？勿論このままこっちで鍵預かってても良いけど。やる？

その場合約束は無効だけど、放課後会いに来てくれた時にちやんと外したげるね。

鍵の乗った手を上から両手で包みながら、耳元で上機嫌に告げた男は、轟の選択など最初から分かりきっていたのだろう。

男の個性は、モノの持つ《記憶》を抽出する事ができるもの



だ。それは電子機器でいうところのデータ類に限らず、すべてのモノに適用される。

つまりこの鍵が誰によってどのように使われたのかも、男からすればすぐにわかってしまうというわけだ。

男が持ち出した条件は、この関係の継続が大前提にある以上、果たされる可能性は十分にあるように思えた。また男達にとっても、轟の近しい人物に関係がバレるのは、間違いなく煩わしい事であると言えるだろう。

そして轟には、この条件を飲んでくれるかもしれない協力者に、一人心当たりがあった。

恐らく轟が男達からどんな扱いを受けているか既に勘づいており、その上で、轟の秘密を守り抜いてくれそうな、信用に足る人物。

愉快そうにこちらを伺う男に、鍵を握らされた手に力を込めると、轟はそっと顎を引き了承の意を示した。

それは今の轟にとっては、何を置いても乗らない手などないくらいの条件に思えたのだった。

いつの間にかじつとりと全身にかいていた、汗が冷える感覚に目が覚める。窓から射す光は茜色を通り越しすっかりと夜色

で、正確な時間は分からないが、少なくとも夕飯の時間はとうに過ぎてしまっているように感じた。

身体を苛む熱をやり過ぎしているうちに、いつの間にか寝入ってしまったらしい。そっと掌をあてたそこは今は落ち着いていて、ゆっくりと上体を起こすと、安堵の息を細く吐き出した。

「おはよう、轟くん」

びくりと全身が揺れる。

弾かれたように声のした方へ顔を向けると、居るはずのない人物をそこに認め心臓が大きくひとつ音を立てた。いつから居たのか、わざわざ轟を探し出したのか。ベッド脇の丸椅子に腰掛けた緑谷が、薄闇の中へらりと緩い笑みを浮かべている。

「みっ…、どり、や」

「ごめんね、あんまり良く寝てたから。起こすの可哀想で」

最近、轟くん、良く眠れてなかったでしょう。

自然な所作で伸ばされた指先は、やっぱりごく自然な動きで轟の目の下を優しくひと撫でして去っていった。離れていく体



温を目で追えば、一瞬迷った後、それは慎重に轟の手の上に重ねられる。シーツを握り締めた指先を一本ずつ解いて、白くなくなったそこを、絡め取る。

ぎゅっと一度力を込められた後、緑谷の優しく、まるい声が入ってくる。

「…轟くん……、話をして、欲しい」

「もう、これ以上は、誤魔化されてあげられない…君のためにならない」

絡められた指先が熱い。視線が、そこから外せなくなる。緑谷はどんな表情でこれを伝えてくれているのだろう。何もかもを曝け出すような白々しい蛍光灯の下、隣の緑谷の顔を正面から見る事が、今の轟には難しかった。二人の間に重苦しい沈黙が落ちる。

「………、なんのだ」

「わかってるでしょ？…逃げないで、僕に話して、ちゃんと」

痛いほどの視線を感じる。きつく握り込まれた手は、今度こ

そ離してもらえそうになかった。ああ、どうしよう。どうしたら良い。切り抜ける都合の良い言葉など何一つ出てこなくて、頭がぐるぐるとして轟は断罪の時を思い瞳を閉じた。轟の今の状況など、言えるわけがない。友人として、純粹な心配を向けてくれる緑谷に心が苦しくなる。

だって俺は、お前にだけは。

汚い過去を、こんな自分を、知ってほしくなかった。

お前にだけは、俺の側から、離れて行ってほしくなかったんだ。

「………ねえ、轟くん」

「いっこだけ。いっこだけ聞いても良いかな」

どれくらい時間が経ったのか。

轟にとって永遠にも思えた時間が過ぎ、ふっと息を漏らした緑谷が唐突に声をあげた。弱くなった指先の拘束に、少し明るくなった声色。やっぱり、緑谷は優しい。轟の頑なさを見てゆるまった追求の姿勢に、轟は内心でほっと息を吐いた。少しだけ冷静さを取り戻した思考がやっと回り始める。そうだ、いつも通り、差し障りのない説明で逃げれば良いだけだ。先輩と練習



とか、相談とか、ちょっと頻度は多かったって、上辺だけ見ればなんらおかしい事はない。たとえそれで取り繕えなくなっていたとしても、構うものか、押し通せば良い。だってなにも、決定的な証拠を押さえられたわけでもないのだから。落ち着きを取り戻した頭でそう結論を出すと、轟は早速いつもの言い訳を口にしようと顔を上げた。

「っ緑谷、大丈夫だ…っ、」

「触らせてるの？」

するり、手の甲を親指で撫でられる。一瞬で温度を変えた声に、肌をすべるざらついた皮膚の感触に、言われた言葉がすぐに入ってこなかった。

操られるように上げた視線の先、緑谷は笑っていた。笑いながら肩を掴まれ、強い力で抱き寄せられる。背中に添えられた掌の温度は確かに、轟の好きな、少し熱い緑谷のそれだった。

「……なに、」

「わからなかった？」

「まさか、僕以外に、触らせてなんかないよね？って聞いているの」

目を見開く。全身に鳥肌が立つ。急速に身体が冷えて、胃が気持ち悪くなって、わけもわからずに目の前の男を渾身の力で突き飛ばす。

緑谷に名前を呼ばれたような気もするが、耳に入らず転がるように保健室から飛び出した。

似ても似つかないのに、有り得ないのに。そんなわけがないのに。

瞬間、親友と自らを良いように弄ぶ、あの男達との姿が、自分の中で重なってしまった。

怖い、気持ち悪い。頭が混乱して割れそうだ。

どうして、なんでよりによってお前が、俺を。

——俺を、そんな目で見るんだよ!!

「…っは、はあっ…ハアッ…っは、は、ッ」

ぐちゃぐちゃの心のまま走って、気がつけば寮にまで帰ってきていた。人の居ないエントランス、ロビーを駆け抜け、やって



きたエレベーターに転がり込む。膝に手をつきながら、呼吸が  
整い切る前に、震える指先で四階のボタンを何度も押した。

彼とはあの夜、轟が突き飛ばして逃げて以来顔を合わせてい  
ないが、今日、インターンから帰ってきているのはわかってい  
た。

何が悲しいのか、何に焦っているのか、自分で自分の感情が  
わからない。

それでも今、いま彼に——爆豪に会いたくて、仕方がなかつ  
た。

身勝手でも彼に会って、否定してもらって、認めて、安心させ  
て欲しかった。

「……ンだよこんな時間に、っ!!」

内側から開けられるドアが待ちきれなくて、薄く開いた隙間  
に手を差し入れ強く引く。大きく開いたドアから顔を覗かせた  
爆豪が、驚愕に瞳を見開いた。胎内で図ったように疼き出した  
熱に、急速に滲み出した視界に、あの夜のように衝動のまま彼  
の黒いシャツに縋り付いた。

「爆豪、爆豪、……っばくごう、」

「わりい、なあ、ごめん、……っごめん、」

「……っあ、これ、……これ、取って、くれ……」

震える指先で掴んだ手を、そこに誘導する。制服の上から  
下腹部に手のひらを当てがわせると、服の上からでもわかる  
振動に、爆豪が鋭く息を呑んだのがわかった。力強い手に腕  
を掴み返され、室内に引き入れられる。閉まるなり背中をド  
アに押しつけられて、爆豪が片手で鍵を施錠する音が響いた。  
至近距離で、感情の読めない瞳が鈍く、紅く光っている。

「……っこれ、これで……っんん、あ、お願い、っなあ、頼む……、  
からあっ、……んう、」

これ以上耐えられなくて、爆豪にしがみついたままむずかる  
ように腰を揺する。必死に取り出した鍵を、彼の厚い掌に押し  
付ける。辛くて辛くて、彼の手で解放して欲しくて、額をシャツ  
の首元に何度も擦り付けた。

助けて欲しくて、もう楽になりたくて。余裕がなくて、自分の  
ことに必死だったから。



この時の爆豪の表情なんて、気付けるはずもなかったんだ。かちやり。ベルトのバックルが外される音に、早く早くと太腿を擦り合わせる。焦らしているのかと思うほど丁寧な手付きのそれに、強くなってきた振動に呼吸が荒くなるのを止められない。強制的に高められる性感に、視界が潤んでいく。ふうふうと湿った吐息が、爆豪の肩口に染み込んでいく。ついに下履きごとズボンを脱がされ、痴態を暴かれた。晒された羞恥と止まぬ快感に、びくびくと腰が跳ねるのをとめられない。

卑猥な拘束具に覆われた肢体を、性器を見ても、爆豪は何も言わなかった。無言のままに手の動きを再開させると、性器を戒めるレーザー部分を撫で上げ、その上の小さな錠前を軽く揺らす。爆豪は、轟のこの様を見ても、ここにきて何も言っていなかった。内心引いていたとしても、優しい爆豪なら、協力してくれる。それがわかったただけでも酷く安堵して、轟は爆豪の腕の中、またぶるりと身を震わせた。先程手渡した鍵を早速と眼前に持ってきた爆豪に、早く外して、助けてくれと口走りそうになる。期待に濡れた瞳を上げ、爆豪の顔を覗き込み、そうして、——

今度こそ轟は、完全に言葉を失った。  
ひゅうつと喉がおかしな音を立て、呼吸が止まる。寒気が走る。全身が、強張る。

見紛う事などない。そこにあったのは、轟を己の欲で汚した男達と同じ——親友と信じて止まなかった男が見せたものと同じ、——爛々と輝く、二つの、捕食者の瞳だった。鍵の落ちる耳障りな金属音が、高く響く。シャツを握り締めていた指先を、逃すまいと逆に絡め取られた。

——良い？条件は、外して《だけ》もらう事だからね？

男の声がりフレインする。その可能性なんて、考えてもいなかった。

間髪入れず、身体が反転させられる。だん、と音を立て押さえ付けられた身体に、尻に腰を擦り付けられた。押し当てられた熱に、なす術なく、爆豪から轟に向けられた情欲を受け取る。拘束具をずらされる。ずるりと玩具が抜かれて、孔が物欲しげにひくつくのがわかった。

信賴していた、友達だと思っていた男の、欲望に荒く湿った呼吸をうなじに感じる。

その熱いくらいの体温に侵されながら、どこか奇妙に冷静な頭で、轟は唐突に理解した。

いや、思い出していた。



(…そうだった、これは、)

大事なものも、守りたかったものも、誰かに奪われたわけじゃない。

この後に及んで、何をまだ思い上がって、浅ましくも期待して、勘違いしていたんだろう。

大切な人を傷つけて。醜い過去から、自分から目を逸らし続けて。

誰に愛される資格もない自分に、誰かを、大事にする権利なんて。

(これは、——罰だ)

初めから、持ち合わせてなどいなかったのだ。

「轟、」

「」

耳元で諭すよう、あやすように囁かれた言葉に瞳を見開く。

執着の全てを手放す事は、自由になる事と同義なのだと理解した。

底の無い絶望という名の安寧に身を委ねる快感に、轟は一人、

うっそりと、華のように微笑んだ。

終



なんだ…頭がくらくらするような…

確か魔王軍との交戦中にみんなとはぐれて…

「」はどこだ？

う…

…っな!?

車  
轟王子が  
触手オーブに  
話  
×××  
される

ゆめの



お目覚めかな？王子よ

ようこそ

此処は我等オークの巢食う  
触手の森

お前には我等の  
「雌」になつてもらう

…!!?  
俺はメスじゃねえ！  
離しやがれ！

どろろ





随分と生意気な口をきくものだい  
…まあその威勢も長くは持つまい



なに…

体が動かね…



服が…!

変形自在の  
そいつらには

媚薬や  
弛緩させる作用がある

さあ  
宴と行こうか  
王子よ























王子ともあろう者が  
潮をまき散らしながら失禁とは…

なかなかの見物だったぞ

では今度は  
我々を気持ちよくして  
もらおうか





やめっ...  
放せっ！

厭らしいメス穴の  
匂いだ



たまらんな

んん？！



俺が先だ！

おい！早くしろよ！  
次は俺だ！



お...  
びび...





負けない

おはた

おはた

おはた

おはた



負けない

おはた



俺は……

おはた

おはた



こんな奴らに

おはた

おはた





クソ触…じゃ、ね…  
野郎…ッ

はー

はー

すげえな

尻から射精  
してるみてえ

ほう…これほどまで身体を  
穢され凌辱されてもなお

心は屈さぬ—、か



おもしろい

これからも  
楽しませて  
もらおう

轟王子よ



ヘン

「轟さん」

いつからかそんな風に轟のことをラストネームで呼ぶようになった彼の後輩は過ちを犯した。

憧れと、夢と、未来への希望に溢れていた。ヒーローとして真っ当に慕われていたと感じていた、その時の曇りのない表情をこんなときに思い出して、今真っ暗な目をしたそいつと同じ顔の男にお前は誰だと胸の内でも問いかける。

どうすればよかったんだろう。

無意味に答えのない問いをいくつも連ね、のしかかる重みに目を閉じれば、誰にも掬われることのない涙がこぼれた。

\*

事の発端は三か月半ほど前に遡る。

某作戦に参加したシヨートは深手を負い、意識不明の重体に追い込まれ、直ちに集中治療を受けた。

いくつもの管に繋がれ、指一本動かすのも億劫に思えるよう

な有様で頬に湿り気を感じ覚醒する。

辺りは暗闇に覆われ、ここは何処で、今が何時で、自分は一体どうなっているのかわからない状況に、まだ夢の中にいるのかと疑った。

耳に当たる息と蠢く影に、誰かに囲われていることを悟って咄嗟に声を発しようとした口からは掠れた息しか漏れなかった。

「……………は、っ、」

必死に体に入力して何者かの服に爪を立てる。

轟が意識を取り戻したことに気がついたそいつは暗闇の中で鋭い目を光らせた。

「……………ん」

こんな傷病者の体に乗り上げて一体なんだというのか。

治療などとは違う意図を孕んだ舌先の接触に、轟は漸く自分の身に置かれた状況を悟った。

病院着の防御力は無に等しい。開かれた合わせ目から侵入してくる手は自分が優位に立っていることを示しているかのよう

に傷口に這わされる。

気づいていようが止める気はないらしい。むしろ、意識があるにも関わらず満足に抵抗できずに藻掻く轟に、より一層興奮



を煽られているらしかった。

いつからこんなことをされていたんだろう。寝ている間に体をまさぐられていなかったかどうかなんて判断出来るはずもない。

緊張に呼吸が乱れ、酸素マスクを曇らせる。

ピチャ、と耳を舐める水音に犯され、夢なら覚めろと目を固く閉じて、頭の中で木霊するその音が余計に大きく感じるだけで消えてなくなりはしなかった。

雲の切れ間に顔を出した月が轟の生白い頬を仄かに照らす。

薄く開いた目で確かめてみても、月に背を向けた男の影がより濃くなっただけだった。

ただ男はそうではなかったらしい。何を思ったか、輝く白の方の髪を指で解き梳かし、まるで恋人にするかのようにこめかみにキスをする。

その挙動が余程悍ましかった。

個性を手繰り寄せようとしてみるが、その手には氷も炎も宿る心配はない。

不全状態で暴走することのないよう、個性の発動を防止する薬を投与されているのだろう。熱っぽい体はされるがままで、未だ思い通りに動いてはくれない。

そうしている間にも酸素マスクを取り上げた男は、轟の唇に唇をつけた。

「んう、…うう…」

頑なに閉じたそこをチロチロ舐めた男が顎を掴んで口を開かせる。指を噛ませて轟の口の中に舌を挿じ込んだ男は、無遠慮に内側を舐め回し唾液を飲ませた。

荒い鼻息と抑えきれない興奮に漏れる獣のような呻き、胸を撫でる手はやがて執拗に突起を刺激し、内腿に股間を擦り付けられて、あまりの気持ち悪さに轟の体は震えていた。

ああ、俺はこれから、この男にレイプされる。

そうとわかっているのに動かない体が口惜しくてならなかった。

下半身を露出した男の肉棒を握らされた轟が上げた小さな悲鳴は再びつけられたマスクに吸い込まれていく。

その熱、感触、脈動とぬめる先走った欲望、これでお前を犯してやるという悪趣味な脅迫。怯えを見せれば男を更に昂ぶらせるだろう。

奥歯を噛み締めて悲鳴を殺し、僅かな抵抗を諦めたところで、男が轟の体に興味を失くすことはなかった。

同じ男であることを主張するそれを見ればあるいは正気にな



つてくれるんじゃないだろうかという一抹の希望も虚しく、秘められた中心を晒され、容易く触られる。

嫌悪に萎縮しながらも熱に浮かされた体は無闇に敏感で、他人の体温を押し当てられる度にゾワゾワと悪寒が走っては引き攣ってしまう。

いやだ、やめろ、触るな、

開かせた足の間に陣取って秘所を好き勝手弄った男はせつなくように猛るソレを押し付けた。

「ひう、ん…、ん、んっ…！」

じんわりと異物が侵入してくる感覚に息を詰める轟の強ばった体を強引に押し開き、腰を埋めた男は、その感触を確かめるようにゆるく腰を揺らし、ゆっくりと挿挿を繰り返す。

どうしてこんなこと、

静かな病室に、少しの機械音とベッドの軋む音、息遣いが大袈裟に響いている。

作戦はどうなったのか、みんな無事だろうか、現実から乖離していく思考とは裏腹に、一方的に与えられる暴力は痛みを伴って轟を逃がしてはくれなかった。

理解できず思い通りに動くこともままならないで押さえつけられ、熱を受け入れさせられる。

酷い仕打ちを嘆くには、あまりにも不条理に慣れすぎていた。

男の名は麻田、その日の当直の看護師だった。

悪い噂のひとつもなく、温厚で物腰も柔らかいと評判で、動けない患者を無理やり組み敷くなど誰も思いもよらない。

この事が露見すれば誰が苦しむことになるだろう。

一家のスキヤンダルに振り回されてきた轟にとって、周囲に与える歪みには敏感だった。

自分さえ黙っていれば、なかったことに出来るだろうか。

男がどんなつもりで自分を犯したのか、ひとつの言葉もなく事に及ばれたのでは理解のしようもなかったが、その後、体が回復に向かっても尚しがらみの多さ故に拒みきれなかった轟は、入院中だけであと三度、男の欲望を受け入れさせられた。

\*

復帰して一週間が経った。

周囲の心配ムードは落ち着きを取り戻しつつある。

懐かれている後輩からの誘いを断った轟は事務所から二つ入った通りに停めてある車に乗り込んだ。



麻田との関係は、病院内だけで終わらなかった。

知らない人から突然入った連絡の内容は恋人に対して送るよ  
うなもので人違いを疑った轟だったが、メッセージの中には「焦  
凍」という名前が使われていてそうじゃないことがわかった。

適当な路肩に停車して、窓の外を眺める轟の方に身を乗り出  
してシートを倒す。

シートベルトの上側を座席の後ろに回し、半端に拘束した男  
は街頭に照らされた轟の髪をあの日と同じように指を絡めて解  
き梳かしてから、生え際をなぞって頬を撫でた。

そして当然のように唇を寄せられて漸く顔を反らした轟は相  
手の胸を押す。

「：いや、」

「焦凍」

「もうやめろよ：なんでこんなことするんだ」

「なんで：？」

俺を拒むのかと瞬きもせず、苦い顔をする轟を見つめた麻  
田はその頬を張った。それを数度繰り返して、火傷に爪を立て  
る。

「かわいそうに、誰にやられたんだ？お父さんか？お兄ちゃん

か？それとも、お母さん：？お前を見ていたら誰だって酷くし  
たくなる」

皮膚を抉って流れた血に舌を這わせた男は、今度は優しく轟  
の両頬を包み込んで猫撫で声を出した。

「ごめんね、焦凍。痛かったよね」

正気じゃない。無理強いの上に構築した関係を、あたかも愛  
し合っているものと思いつりしている。この愛情に応  
えない轟を裏切り者だと詰り黙らせて、罰するように、あるい  
は偽物の愛を植え付けるように抱きしめた。

メッセージの後に送られてきた写真は乱された轟の痛々しい  
姿が写し出されていた。

弱みを握っているつもりなのか、轟に脅迫が通用するという  
算段があるのだ。

実際、彼の一家に纏わる醜聞は根が深い。そしてどこでどん  
な情報が漏れるかわからない世の中だ。こんなことで恥を上塗  
り、過去の事を掘り返すようなことは誰も望んでいないだろう。  
気慰みに応じることが正しい判断であるはずもないことくら  
いはわかっていたが、自分の体、あるいは男の罪、その天秤の反  
対側にかかっているのが家族や仲間が好奇の目に晒されるリス



クとなれば、容易く選ぶことは出来なかった。

身を固くしてただ波風が通り過ぎるのを待つ。

飽きもせず轟の体を貪る男は逃げを打つ腰を掴んで無遠慮に肉棒を押し込み、不本意に犯されて揺れる体と苦しげな表情に興奮を煽られ、少しも見逃さないように血走った目を見開いていた。

＊

テレビの中では現実にかけているいくつもの事件を取り扱っている。

敵組織によるテロの被害規模を見せられて、世の中の情勢が変わっても実害がなければ他人事だ。

麻田は子どもの頃からヒーローに大した興味を抱かなかった。彼らの活躍も不祥事も、大きく心動かされることなく、ただ惰性で情報が自分の中を素通りしていく。

それでも彼らが存在感を示す社会で、そんな社会の影響をモロにくらった少年の悲惨な過去が有名なヒーローの不祥事と背中合わせで明るみに出ってしまった。

本当かどうかは知らない。ただ世界はそういう歪みをつつ

て暴き、大袈裟に騒ぎ立てるのが好きなんだ。

ひとつの苦勞も知らないような綺麗な顔と強い個性を持った少年の暗い傷を知って同情こそすれ、僅かな加虐心が引きずり出されるとは麻田にとっても思いもよらなかった。

衝動であり、執着であり、運命だった。

いくつもの管に繋がれ、深手を負った轟焦凍が無防備な状態で差し出されたことに、魔が差してしまっても仕方がないと思うだろう。

意識のない彼の繊細な顔かたちを穴があくほど眺めて肌に触れればたまらない気持ちになった。

引き攣る目尻、控えめに漏れる声、拒む指先、逃げを打つ腰、自分の挙動に対する反応の全てがいじらしく、腹の底がゾクゾクした。

自分のものにしたい、でなければ、ひけらかしたい。

うっかり手を滑らせれば簡単に彼の露わな姿を世界に発信することが自分には出来る。

そういうスリルに身を委ねていた。

その後も、男は生活に影響が出るか出ないかというギリギリ



のラインを狙って何度も体の関係を迫った。

安いホテルの他、車の中、居酒屋の個室、カラオケボックス、公衆トイレ、思いつく限り刺激的な場所での行為を強要し、何度も精を受け入れさせた。

当然強ばってばかりいた轟の体にも弱いスポットが存在する。突き止めたそこを虐め抜いてやれば、甘く高い声を上げて望まない快感にビクビク跳ねる体と悩ましげな表情を見せられ、その全てに狂おしいほど熱中し、執拗く時間をかけて犯し尽くしたのだった。

＊

麻田は更なるスリルを求めていた。

会えばセックスに纏れこんでばかりいる忙しい恋人と、たまには外でデートをするのもいいだろう。

そういう設定で誘い込んだのは人も疎らな小さい映画館。適当に選んだレイトショーに勿論用はなかった。

隣を見れば俯いた轟が呼吸を乱し小刻みに震えている。

男は生唾を飲み込んで、項垂れて真下に流れる轟の髪を耳にかけた。

指でわざと頬を掠めれば擦ったがるように肩を竦める仕草、汗の浮いた額、寄せられた眉、潤んだ瞳に紅潮する肌。

男の手から逃れるように顔を背けた轟を今すぐにも裸に剥いて犯したい気持ちをぐっと押さえ込んだ男は劇場予告が終わったタイミングで席を立った。

今まで嫌がっていた轟が心細げに自分を見上げるのに気をよくしながら、すぐに戻ってくるからと念を押して背を向ける。そしてその一連を見計らったかのように、すぐに別の男たちが轟の両隣を囲んだ。

堪えるように上半身を丸め、自らの掌で口を覆った轟は差し迫った状態にあった。

状況に対して違和感を覚える前にそれを悟られてはいけないという強迫観念を抱き、必死で纏わりついてくる感覚をやり過ぎそうとしていた。

そうしてじっとしていると、ふと足を開いて座った隣の男の膝が轟の足に触れる。

反射で避ければ今度は反対に座っていた男が轟の太腿に手を置いた。

「……っ、……」

はっとして男を見れば何食わぬ顔でスクリーンを見ながら、



その手はあからさまに轟の内腿を撫で、するすると付け根の方へと近づいていく。

身を跳ねさせて咄嗟に立ち上がるろうとした時、またその反対の男に腕を引かれバランスを崩し、その肩にしなだれ掛かるような体勢になってしまった。

「はっ、…あ、はあっ…」

なんとか立て直そうと男の膝についた手をとられ、肩を抱かれる。

「大丈夫ですか？顔が赤いですけど、」

熱があるんじゃないですか。白々しくそう聞いた男は轟の額に触れ、そのまま頬と首、鎖骨を撫でて襟を開いた。

「ん、んやっ、あ…、」

その手の侵入を阻もうと掴んだ手に指を絡められ、今度はシヤツの裾からもう一方の手が差し入れられる。

筋肉の溝をそって撫でる邪な手つきにいよいよただ事じゃないと理解した轟だったが、逃げることを許さないとばかりに内腿を撫でていた男が轟の股間に手を伸ばした。

「ひっ…！…うあ…っ」

「あのさあ、なんで勃ってんの？」

「…やめ…っ、さわんな…！」

「なんでだよ。こんなエロい顔しちゃって誘ってるんじゃないの？」

「ちょっと触っただけでこんなに感じちゃうのおかしいねえ、ね、ショート」

ショートってとつてもえっちなヒーローだったんだね。

ヒーロー名を呼ばれ一層凍りつく轟だったが、今となっては余程メディア離れした人間でもない限り彼の顔すら見た事もないという人を探す方が難しい。

轟の困惑を余所に体をまさぐる手はどんどんエスカレートしていた。

「やあ、めろ…ってえ…」

身を振り逃れようとするが、触れられる度ゾクゾクと込み上げる快感を押し込めるのに精一杯で、二人の男を振り切ることすらままならない。

そうこうしている間に轟の下着の中に手を入れた男は、彼が必死に守っていた隠し事を暴いてしまう。

「ねえショート、これなに？」

下着の中で垂れているコードをクンツと軽く引いた男は、これみよがしにそれが繋がる尻の穴に指を這わせた。

「あっ…！…い、やっ、…いやだっ！」



「シー、大きい声出したらみんなにバレちゃうよ」

それとも、ここにいる全員でマワして欲しいのかな。

男の言葉にドキリと心臓が脈打つのを感ずる。部屋の中には十人足らずの人がいたのだろうか。

こんなものをおしりの中に仕込んで来るなんて、痴漢されたいと思われても文句は言えないなどと、言葉で責め立てられながら入り口を指でグリグリ押されては言い訳もうまく紡ぎ出せない。

ここに至るまでに強力な催淫剤を含む飲料を飲まされていたことと、発情した館内のトイレで中途半端に触られ寸止め状態にあったこと、更には秘部に仕込まれたローターにもたっぷり媚薬が塗り込まれたことでナカは過剰に熱を持ち、脳が侵され、轟は今どこをどう触られても異常に性感を得てしまう極限状態にあった。

「んんーっ、んうっ、」

男の大きな手に口を覆われた轟の声は押し止められたが、呼吸すらままならず苦しみ藻掻く姿は加虐心を煽る。

スクリーンの中では作りもののヒーローが劣勢に追い込まれていた。

画面の中で起こる爆発とそれに付随する音が些細な水音や悲

鳴をかき消したのだろうか。

あまりに他人行儀な空間でひとり、性的にいたぶられていた。そして、太腿にガムテープで貼り付けられたローターのリモコンを見つけた男はそれを取り出す。止める間もなくあっさりと、そして一思いにスイッチを押した。

「——ッ、あ、ああ——っ：!!」

体の中を駆け巡る痛いほどの刺激、そして快感。細やかに振動する玩具に呆気なく達した轟の痴態に男たちは笑みを深くする。

口を塞いだ男の手の中に押し込められるはずだった悲鳴は解放され、劇場内の音響をもってしてもかき消し切れることは出来なかつただろう。

だがそんなことは瑣末なことに過ぎない。この陵辱ははじめから仕組まれていたのだから。

いつの間にか轟のまわりを囲むように男たちが集まっていた。その中に麻田がいることに気づくほどの余裕は今の轟にはない。自分以外の男に酷く犯される轟を見たい。麻田の狂った轟への加虐願望がこの狂った空間をつくりだしていた。

「はあっ、あ、あ、……」

「きもちかった？すぐイっちゃったね」



「おいおい、まだ俺なんもしてねーけど」

シャツの中に手を入れたままの男は執拗に胸を撫でている。一度の絶頂ではおさまることの無かった欲求はいっそ暴力的なまでに轟に襲いかかっていた。

「あー、はやくつつこみてえー」

轟の耳元に吹き込まれる声は、この行為がまだ始まったばかりであることを教えてくる。リモコンを悪戯に操作する男も待ってはくれない。

「っ、あ、あ、まっ…て…！またイ…っあ！」

指を振じ込んだ男は容赦なく振動するローターを肉壁に押し付ける。

「ああっ…！あ！あっ！ああっ！」

ビクビク跳ねる体とひっきりなしに漏れる喘ぎはもはや轟の意思で抑えられるものではなかった。

誰かが生唾を飲み、自慰をはじめめる。

耐え難い、しかしどこかもしかしい、決定的な刺激が得られないままかわいがられ、そうして誰も見ていないスクリーンがエンドロールを映し出すまで何人もの男に体を弄り回されていた。

複数人で連れだって劇場を出た男たちは、ふらふらと足取り

も覚束無い轟を抱えそのまま近くの安ホテルにつっこむ。お待ちかねの時間だった。

終始カメラを回している麻田はこの記録を後日轟に見せながらまた楽しむことを想像するだけでゾクゾクと沸き立つ興奮を止められないでいる。

もっと、もっと酷いことをしてやりたい。そうして歪む轟の顔を見ることこそが自分に最上のエクスタシーを与えてくれる。そんな劣情に逆らうことは愚かにすら思えた。

「あーあー、もうどろどろじゃん」

「顔真っ赤だもん、かわいい」

「えろい」

何を言われても反論する気さえ起きない。入りっぱなしのローターは何度もオンとオフを繰り返され、今は不気味に静止している。本当はもうどうしようもないほど激しく突かれたかった。

「ショートもう我慢できないって」

服を中途半端に脱がされ、足を開かれて、せつつくように腰を押し付ける男の方こそ我慢の限界をむかえていた。

怒張するペニスをあてがわれた轟は一瞬抵抗を忘れた自分にはっとする。



「……………あ、まだ、入っ、」

著しく消耗したなけなしの自制心をもって小さく訴えようとした言葉も虚しく、一気に奥まで貫かれた。

「…っいぎ、い、ーっ…ああーっ！」

男のペニスがローターを押し込み、ごっごっ肉壁を刺激する。カチツと弾けるように視界が白んだ轟に追いうちをかけるようにスイッチをオンにされたローターが振動しだした。

「あっ、あっ、あうあ…！いやっああ…！！」

「あー、やっべーたまんねー」

「とめ、ああっ！っとめて…、とめろってえ…！！」

少しも逃さないとはかりに腰をグツと掴んだ男は二度三度と挿挿を繰り返す。

その間もずっと体を這い回るいくつもの手、男たちの興奮した息遣いと呻き声、におい、轟の手や髪を勝手に使って自分のものを擦りつけ汚していく。

「ああっ！っや…！…いやっあ、イ…っんあ！イってる…、からあっ！！」

「へばんなよ、これから全員相手してもらうんだからさっ」

「朝まで無理矢理イかせまくってやるーぜ」

「みんな、休む間を与えないように頑張ろうな」

止むことのない輪姦は轟の身も心も痛めつけ、尊厳と希望を奪っていった。

\*

「轟さん、今夜ですよ」

「ん、…ああ。わかってる」

「絶対ですからね！」

その日は、暫く放置していた後輩の誘いに久しぶりに頷いた。あれからどういうわけか、麻田との連絡は途絶えている。あの日がピークだったのか、自分で仕向けておいて他の男に犯された体に興味をなくしたのかは轟に判断できるはずもなかったが、それならそれでよかった。

あれ以上続いていけば間もなく轟の心は止まっていただろう。男たちが轟に植え付けた傷はこれからも消えないが、それでも懸命に振り切ろうとしていた。

仕事終わりに後輩と二人、居酒屋の個室に入る。

麻田ともこういうシチュエーションで行為にもつれ込んだことがあったために少しの警戒はしたが、あの男に囚われるのは



嫌だった。

「轟さんに見せたいものがあって、」

食事も終わり、ひと段落ついた頃にそう言ってタブレットを持ち出した後輩が、轟が目を向けるのを確認してすぐさま画面をタップする。

真っ黒だった画面はとある映像を映し出した。

『あっ、あっ、あうあ…！いやっああ…!!』

複数人の男に囲まれ、喘ぎ乱れるそいつの顔を見て咄嗟に身を引いた轟は無意味に目をそらす。

狼狽えた頭では理解出来ず漏れる音声だけが鼓膜を揺らした。

「やめろ…、止めてくれ、」

「ねえ轟さん、これ、」

「止めろって…！…なんで…っ！」

動画を止めようとタブレットに伸ばした手を掴まれ、机の上に押さえつけられる。

残っていたグラスが音を立てたが気にする者はいなかった。

「これって合意ですか？」

「ちがうっ、そんなわけないだろ！」

「あーよかった、そうだと思ったんですよ」

ねえ轟さん、この人たち今どうなったか知ってます？

そう続けられた言葉に背筋が凍った。

どうだっていい、こんなやつら、勝手にくたばっちまえ。そう思えたならよかったかもしれない。

轟焦凍はもうずっと前から、自分を酷く傷つけた相手であってもそんなふうには思うことは出来ない人だった。

そして目の前の後輩がこの件に関わってしまったのだとしたら到底無視できるはずもない。

「なにかしたのか」

低い声を出した轟に笑みを浮かべた後輩は、僕のお願いをきいてくれますかと言った。

「僕のお願いをきいてくれたら、教えてあげます」

絶えず流れてくる映像と音声はじわじわと轟を苦しめる。頷く他に術がなかった。

いつからか轟の名をラストネームで呼ぶようになった後輩も、はじめはそうじゃなかった。

憧れのヒーローであるショートの後ろをついて回るような、人懐っこい後輩だった。

ひたすらかっこいい存在だった彼のあまりにも深い情に触れ、大事にされ、意外なほど多くの表情を見せられてしまえば、恋



に落ちるのは簡単だった。

「これって合意ですよね」

連れ込まれた部屋で即刻シングルベッドに押し倒された轟は肯定も否定もしない。

大人しく寝転がっている轟と視線が絡んで、その目のあまりの美しさにドキリとした。

目だけじゃない、その人はどこもかしこも綺麗で、そんな人が自分の下でこれから自分の思った通りに扱われてくれるらしい。

その恍惚は想像を絶するものだ。

優しく髪に触れれば揺れる瞳がいじらしく、まるで恋人にでもなったような錯覚に陥る。

ああ、悪いのはこの人だ。あなたを見ていけば、誰だって酷くしたくなる。唐突にそうと悟った。

「ずっとこうしたかった」

みんなと同じようにショートと呼ばば彼のファーストネームをあっさり呼ぶことが出来た。

それでもヒーローじゃなくて、ただの轟焦凍として接して欲しくて轟さんと呼ぶようになった。

重症を負ったあの時を境に轟が見せる表情が違って見えたの

は、彼のことをずっと見ていたからかもしれない。

ある日の朝、轟を事務所に降ろして走り去った車を見てしまい、気が気ではなくてそいつのことを調べた。

つけていった男の部屋にはこれまで轟にした酷い仕打ちの記録が残されていた。

「やつの体液には麻薬と同じ成分が微量に含まれていたんですよ」

それを何度も、何日も摂取させられ続ければ、どれほどの毒になるだろう。轟の判断力を奪うほどには、多くの体液を注いでいたということだ。

「かわいいそうな轟さん」

薬漬けにされて、支配されて、そればかりか何人もの男に好きなように扱われてしまった。

「僕が上書きしてあげます」

自分はそうじゃないと思いついでいる後輩に、幻想を抱いているのはお前の方だと言えばその目は覚めるのだろうか。

虚しく独りよがりな熱を押し付け、揺さぶってくる後輩の狂気を理解することも出来ず目を閉じる。

犯されることに慣れた体を皮肉に思いながら。



＊

あの日轟を囲んだ男たちは、一人残らず不能な状態にされ、麻田に至っては自室の押し入れで裸で拘束、放置されていた。幸か不幸か、衰弱こそすれ誰ひとり死に至ってはいなかったが、それで罪が無くなる訳では無い。たとえ相手が非道な強姦魔であつたとしても。

取調室で警察に向き合った轟は、参考人として事情聴取に応じることを自ら望んでここにいる。

緊張した空気を吸って口を開いた轟の覚悟は決まっていた。

「四か月前、重傷を負って入院した病院で、麻田から性的暴行を受けました」

隣の部屋からマジックミラー越しに複数人が不躡な目を向けていることだろう。

それを悟りながら、これから轟は自分の受けた仕打ちを自らの口で告白し、傷を抉る作業をするのだ。

麻田らと後輩に罰を与え、彼らの道を正すために。

終



Knock  
Lock  
Shake



ただいま  
シヨート君

お  
い

早くっ…  
早くっ…

ごめんね  
遅くなっちゃって

鍵ッ…  
し…  
もど

お  
い

オークションで美しい  
生き物を手に入れた

おちんちん  
苦しそうだね

…いま楽にして  
あげるね…

ナチャ

闇オークションで落札  
されたヴァンパイア  
みくに

ナチャ  
ナチャ  
ナチャ  
ナチャ

お  
い

お  
い

お  
い



はあ、すっごい  
えつちな匂いだね…

これも外して  
あげるね

はあ…  
中、ドロドロ  
になってる…



押すな…

ココも大分  
広がったね…

ちゃんとしてあげてからね

はあ…すごく  
綺麗だよショート君…

我慢しないで  
いっぱいおもらし  
していいんだよ







くたえ...♡

はぁ...  
いっぱい我慢  
してたんだね...

シヨート君は  
本当に我慢強くて  
偉いね...

ご褒美  
あげなきゃね...

びくっ♡

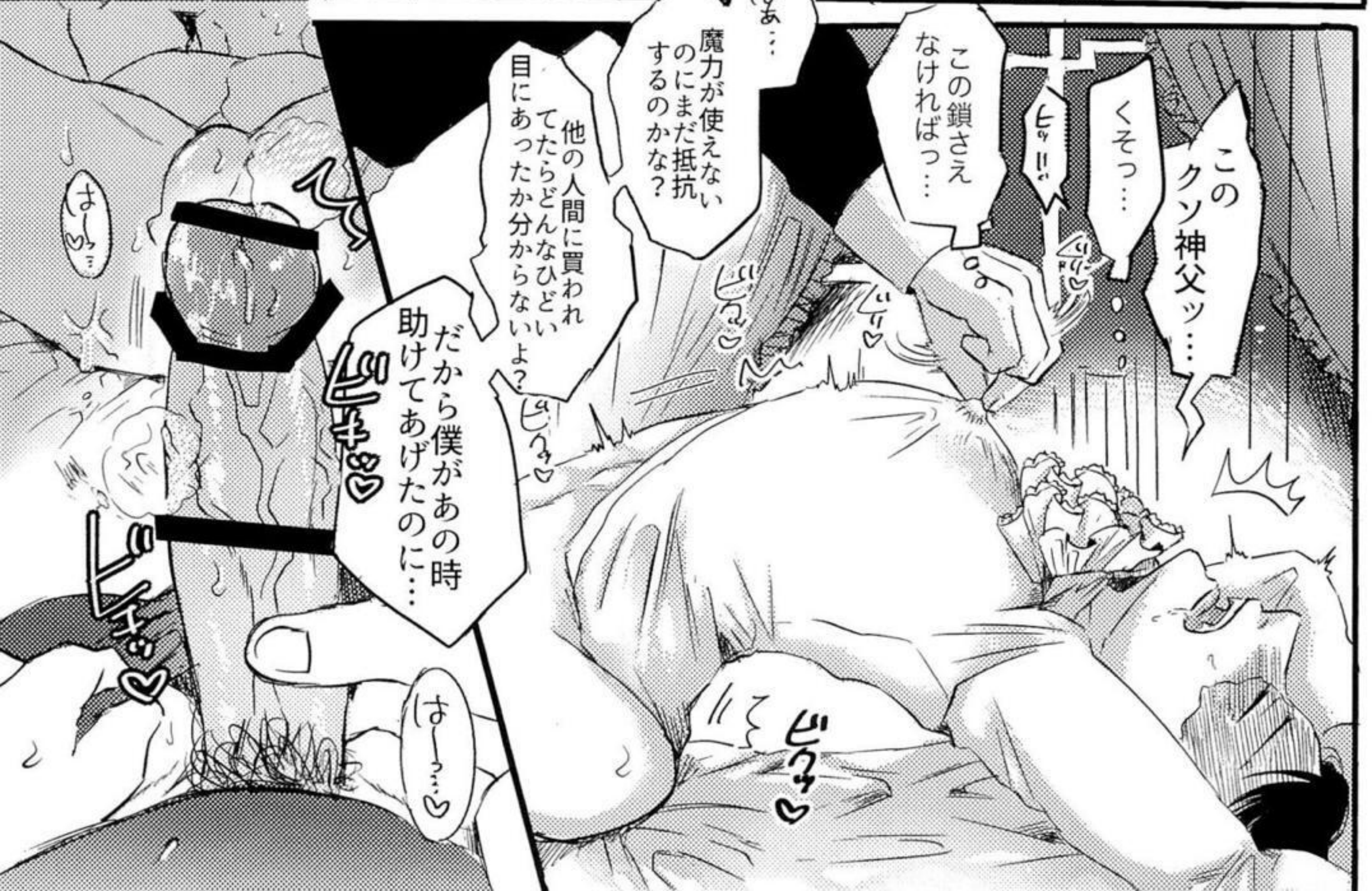
はぁ

はぁ

びくっ♡

はぁ...♡

びくっ♡



この鎖さえ  
なければっ...

くそっ...

この  
クソ神父ッ...

魔力が使えない  
のにまだ抵抗  
するのかな?

他の人間に買われ  
てたらどんなひどい  
目にあつたか分からないよ?

だから僕があの時  
助けてあげたのに...

はぁ...

はぁ...

はぁ...♡

びくっ♡





今日ねっ...新しい  
お洋服買ってきて  
あげたんだッ...

気に入って  
くれたら...  
嬉しいなッ...



っつて...はは  
聞こえて  
ないかあ

後でお着替え  
しようねっ...



泥濘に沈む

はるさめ

日も沈み、街灯だけが灯る薄暗い道を轟は一人で歩いていた。時刻は二十一時。最終下校時刻を過ぎて学校から追い出されてから、真っ直ぐ家まで帰れば二十分程度の道を轟はぐるぐると遠回りをしながら宛もなく歩いていた。目的など何も無い。ただ家に帰りたくない、それだけだった。

轟焦凍は凝山中学の三年生である。推薦枠で雄英高校への入学が決まり、残り僅かの中学生生活をただ時が過ぎるのを待ちながら過ごしていた。特に馴染みのある同級生もいない。一人クラスで浮いた存在である轟を担当もクラスメイトも持て余していた。そしてそれは担任やクラスメイトだけではない。家族である姉や兄も、決してなんでも分かち合える仲のいい兄弟という訳ではなかった。家庭内でも腫れ物に触るような扱いを受けていた轟には、ここが自分の居場所だと感じられる場所がどこにもなかった。

「流石に帰らねえとな…」

気がつけば随分と家から離れた場所まで来てしまっていた。

住宅街からも少し離れたこの場所は人通りがなく、辺りは静まり返っている。どれだけ帰りたくないと思っても、泊まるあてのない轟に家出などできる訳もない。小さな反抗心を抑え、苦虫を噛み潰したような顔で轟は家へと向かう道を歩き始めた。しばらく歩いていると一台の車が轟を追い抜いていった。全く車通りのない道なのに、やけに速度が遅いなと違和感を覚える。その車は轟の数メートル前をしばらく走行した後、ゆっくと停車した。道路沿いに止められた車は白いワゴン車で、車の窓にはスモークがかかっている。気味が悪いなと思った轟が早足で通り過ぎようとした時、車のドアが開きガタイのよい男が二人降りてきた。二十代半ばといったところか。ガラの悪い見た目をした男達は目を逸らした轟を気にすることなく近づいてくる。

「そんなに怖がらないでよ」

「ごめんねーお兄さん。高校生かな？」

二人は轟の前に立ちほだかると、いかにも人の良さそうな笑みを張り付けて声をかける。無視をすることもできず、仕方なく轟は口を開いた。

「…なんですか」



「ちょっと道に迷っちゃってさ。この辺詳しい？案内して欲しいんだけど」

「俺たち困ってるんだよね、人助けだと思ってさ」

へらへらと笑う男達は、到底困っているようには見えない。急いでいるので、と逃げるように通り過ぎようとした轟の腕を男が掴む。男に握られた右腕がチクリと痛んだ気がした。そこから微かなしびれを感じたと同時に身体に力が入らなくなる。ふらりとよろけた轟を男が抱きかかえた。煙草の匂いが鼻につく。押しつけようと腕を突っぱるが思うように力が入らない。それどころか熱が籠ったように身体が熱くなり、頭の中にぼんやりと霧がかかったように思考が鈍くなる。

「は…あ、くそ、はな…せ」

「あれ、どうしたのかな。体調悪いの？」

「顔赤くなってるよ、大丈夫？」

「ちが…何を…」

「仕方ない、お家まで送ってあげるからね」

「ほら、早く乗れよ」

抵抗する間もなく男達に車に引きずり込まれる。一緒に乗り込んだ男が慌てたように運転席へと声をかけた。

「おい、早く車出せ」

「分かってるよ」

ボタンとドアが閉まり車が発進する。周囲に人がいる気配はなかった。目撃者は誰もいないだろう。監視カメラがあったかどうかも怪しい。身代金目当てか、ヒーローをしている父親への当て付けか。興奮したように騒ぐ男たちの声を聞きながら轟は小さく舌打ちをした。

車内は後部座席のシートが倒されており、狭いながらも余裕のあるスペースに轟は転がされる。そして轟を挟み込むようにして座った二人の男がにやにやと笑いながら、頭のとっぺんから足の爪先までを舐めるように見つめた。

「なんだよ、お前ら…」

「ははっ、意外とお口悪いんだね」

「暗くて顔あんま見えてなかったけど火傷痕あるじゃん」

「まあでも顔はいいし、いけるでしょ」

ひとりの男が鞆の中を漁り、学生証を取り出すと驚いたように声を上げた。

「え、凝山中？やべえじゃん、こいつまだ中学生かよ」

「うわ、まじかー。乱暴しちゃってごめんね」



発進した車はスピードを出して人気の無い道をどんどん進んでいく。寝転がされた轟には外の景色が見えず、轟の不安を煽るだけだった。

「何が目的だ？」

「あれ？何が目的か分かんない？」

「まあいいよ、すぐにわかるから」

そう言った男は轟の上に覆いかぶさると、制服のボタンに手をかける。驚いた轟が男の手を払いのけようとするが思うように力が入らない。結果、男の腕に縋りつくように手を添えただけのようになってしまう。

「力入らない？薬効いてるね」

「ほーら、服脱ごうね」

「くそ、やめ：」

されるがままに制服を脱がされ、轟の肌が露わになる。ベルトも引き抜かれ、ズボンも脱がされて焦ったように声を上げる轟のことなどお構いなしだ。

「ほら、パンツも脱ごうか」

「あつ、やだ、やめ：っ」

必死に開かれた脚を閉じようとするが、二人がかりの大人の男に敵うわけがなく轟が身につけているのはカッターシャツ一

枚になった。

「くそっ、変態野郎が」

「今の自分の格好のほうに変態だけどね」

「このまま外に放り出してもいいんだぞ」

恐ろしいことを言われて轟が口を紡ぐ。窓の外は見えないが車はどんどんどこかへと向かって進んでおり、知らない場所で裸のまま放り出されるなど考えたこともなかった。

「じゃあ大人しくしてろよ」

「痛くないように慣らしてあげるからね」

そう言った男は軟膏のチューブのようなものを取り出すと、中身を自身の指に塗り轟の後ろの穴に押し当てる。

「ひっ、やめ、や、あつ」

押し当てられた指がゆっくりと中へと入っていくのが分かった。ぞわぞわとした不快な感覚に轟はぐっと目を瞑る。逃げようと腰を動かすも押さえつけられているため全く意味をなさなかった。

「んぐ、うう、うえっ」

「動かすぞ」

「うう、あつ、うあ、やだ」

まだ異物感がある中を男の指がゆっくりと出入りする。その



動きは徐々に早くなり、膿んだように中がじくじくと熱くなるのを感じた。不快感だけではなく、いく感覚に轟は戸惑いを隠せない。

「なんだよ、これ、あつ、へん、おかしい」

「あ、ばれた？気持ちよくなってほしくてさ、ちよっとお薬使っちゃった」

「だとしても感じすぎだろ」

「はは、轟くん才能あるね」

「あつ、やだ、抜け、ああつ」

ただでさえ火照っていた身体が内側から熱くなっていく。無遠慮に弄られている中はだんだんと快感を拾うようになっていた。男は慣れた手つきで轟の中へ挿入した指を動かし、確実に性感を煽ってくる。

「一回イっところか」

「は、ああつ、やめ、あつ、っ」

びりびりと電気が走るところを指でぐりぐりと押された同時に、もう一人の男に性器を擦られて途端に絶頂に押し上げられる。吐き出された精子は腹の上へと飛び散った。

「うそ、あ、なんで…」

「マジでイけたね、本当に処女？」

呆然とした轟を男達が嘲笑する。処女もなにも男同士の性行為のやり方など知らなかったし、男女での交わりも轟はまだ経験がない。それなのに突如作り変えられたような己の身体に轟は戸惑いを隠せなかった。

「まあいいわ、もう一回ね」

「やあつ、もう、やだ、やあつ」

「本番が楽しみだねー」

「おい、着いたぞ」

「了解。後ろ開けて」

運転席からの声に目の前の男が返事をする。暫くするとバックドアが開き、先ほどまで運転をしていた男がこちらを覗いていた。

「どんな感じ？」

「もーそろそろやれそう。車内じゃ動きにくいからいつもの感じでもいいか」

「おー、そうするか」

ごそごそと後ろで動く音が聞こえるが、何をしているか気にする余裕すら轟にはない。前戯で何度も弄ばれた身体はじつと



りと汗ばんでおり、轟が吐き出した精液が太ももや腹にこびりついている。轟の反応を面白がった男達の中だけでなく胸も弄っていたため、轟の小さなピンク色の乳首は赤く腫れてしまっていた。

もういいぞ、と声が聞こえたと同時に轟は男に抱き上げられ、車外に連れ出された。周囲は真っ暗で辺りには木が生い茂っている。近くに民家がある様子もなく、大声を出しても誰も気が付くことはないだろう。すぐ近くの地面には雑にブルーシートが広げられていた。

「はい、ごろんしましょうねー」

「うっ、あ…」

ブルーシートの上に転がされた轟の上に男が覆いかぶさる。まだ地獄は始まったばかりだ。

「轟くん、さっきので終わりじゃないからね」

「自分だけが楽しんでんじゃねえよ」

抱えられた脚の間から男のいきり立った性器が見えた。何度も弄られて赤くなった穴に押し当てられ轟の顔が青くなる。

「あ、やだ、それだけは、やめて、もうやだ」

「何言ってるの、これからは楽しいんでしょ」

「あっ、うそ、やだ、ああっ」

ずぷりと入り込んだ性器はゆっくりと轟の中へ中へと侵入してくる。じくじくと膿んだ中を硬い性器に擦られ轟は身震いした。指とは質量が違うため痛みを伴っているが、微かな快感がそこにあるのが分かる。

「うっわ、めっちゃ締め付けてくる…」

「う、ぐ…ぬい、て」

「だいじょーぶだいじょーぶ、力抜いてね」

「やだ、や、ああ、ぐ」

「もうちょっと…ほら、よっ」

「ッ、あぐ、」

狭い穴を無理やりこじ開けられ、痛みにも身体を強ばらせた轟の身体を男が撫で回す。

「ちゃんと全部挿入ったからな」

「轟くん処女卒業じゃん。おめでとー」

「ッ、うそだろ、嫌、あっ」

「嘘じゃないって、気持ちよくなるうね」

「んう、ぐっ…あっあ、とまって」

ゆさゆさと好き勝手に揺さぶられる轟の口から抑えきれない声が漏れる。上擦った自分の声が気持ち悪くて思わず両手で口を押さえるが、それも引き剥がされてしまう。



「っ、ん、あッ、やあ、あッ」

「めっちゃ薬効いてんじゃん」

ピリピリと引き攣った痛みがぞくぞくと背筋を震わせるような快感に変わる。硬く熱い性器が中を擦りあげる度に轟は身悶えて啼くことしかできない。

「あっ、ああっ、だめ、そこやだあ」

「ここが轟くんのイイところね」

「めっちゃ反応よくなったじゃん、こっちも触ってあげるね」

「ひっ、やあ、ああ、——っ！」

後ろから回り込んだ手に性器を扱かれ、轟はガクガクと痙攣し達してしまう。その反応に気を良くした男達は、轟の身体に手を伸ばして更に性感を高めるように性器や胸に触れる。

「さわ、るなあ、あっ、あう」

「はは、喜んで締め付けてるくせに何言ってるの」

「やだ、やっ、あ、ああっ」

「またイってんじゃん」

絶頂に達した状態であるにも関わらず男が動きを止める様子はない。それどころかぐりぐりと奥に性器を押し付けられて轟が身震いする。

「こんなの、しらない。」

身体の神経がびりびりと痺れるような、自分が自分じゃなくなるような快感を轟は知らなかった。必死に抗おうとする心とは正反対に、身体は男達の欲を受け入れもつと悦んでいる。なんて浅ましい、汚れきった人間なんだろうと轟は自身に絶望した。そんな轟などお構い無しに男は律動を早める。

「あっ、あぐ、だめ、おくだめ」

「ははっ、すっかりハマってんじゃん」

「蕩けた顔してさ、さすが優等生だねー」

「んん、うっ、や、ああっだめッ」

ぐりぐりと最奥に龟头を押し付けられ訳が分からないまま喘ぐ。頭の中が真っ白になって、もう何も考えられない。縋り付くように必死に伸ばした手は、男によって地面に縫い付けられてしまった。

「ヤダ、いっちゃう、やッ…」

轟の喘ぎ声が一際高くなり、背筋を弓なりに反らせる。面白かった男達は更に轟を追い詰めるように身体を弄んだ。締め付ける中を楽しむように奥を何度も突き上げる。ピンと勃った乳首を摘むと甲高い喘ぎ声が響いた。

「マジで全身性感帯だな」

「ひう、らめ、なか、イってるから」



「イってる時に動かされると気持ちいいでしょ？」

「あっ、あっ、あ、中おかしい、イってるのに、また、やだ」

「あー、やば、俺も出そう」

「やだっ！や、ああっ、だめ、だめえ」

上から腰を押さえつけられ、暴力的な快感から逃れられなくなった轟が頭を振り乱して泣き叫ぶ。

「っ！っ！っ！あッ！」

「おら、出すぞッ」

ガクガクと痙攣する身体に覆いかぶさった男が射精に合わせて孕ませるように腰を押し付ける。本来は薄い轟の腹は、何度も男達に出されたせいか僅かに膨れているように感じる。びゅうびゅうと最奥に叩きつけられる精子に轟は力なく喘いだ。吐き出された精子を全部飲み込むようにぎゅうぎゅうと中が収縮しているが、くったりと萎えた性器からは何も出ていない。どうやら射精を伴わずに達したようだ。

「轟くん、メスイキしちゃったんだね」

「まじで？才能あるなー」

「おい、そろそろ代われよ」

「わりいわりい、ほら轟くん。こいつの相手もしてやってねー」

「あ…や…も、むり…」

性器を引き抜かれた轟の穴はヒクヒクと収縮し、中からこぼりと精液がこぼれ落ちる。男は轟の背部に回ると、後ろから両膝を持って轟を抱き上げ開脚させる。順番を待っていた男は轟の脚の間に入り込むと、いきりたった性器を取り出し濡れそぼった穴に押し付けた。その規格外の大きさに轟の顔が真っ青になる。

「そんな、はいらねえ…」

「だいじょーぶ、轟くん名器だから挿入るでしょ」

「ほら、力抜けよ」

押し付けられた精器の切っ先がぐぷりと中へ入り込むと、そのまま奥へ奥へと推し進められる。

「ふづっ、ううー」

「うわ、マジでやばい」

「だろー？轟くんセックス得意だよ」

「めっちゃ媚びてくるな、薬のせいだけじゃねえだろ、これ」

あまりに屈辱的な言葉に男達を睨みつけるが、勿論怯む様子などなく馬鹿にされたように笑われるだけだった。

「生意気な顔してんじゃねえよッ」

「あっ、ぐ、おぐ、やっ」

「は？聞こえねえって」



中に挿入された性器がどちゅどちゅと抉るように轟の最奥を突き上げる。ボロボロと涙を流し悲鳴を上げる轟はとうに限界を超えているのだろう。

「あっ、あ——っ！やだ、ああっ」

「お前のデカすぎて轟くん腹ボコしてるじゃん」

「えぐ、突き上げる度に形浮き出てるな」

「お前らのじゃ無理だよなあ」

「うるせえよ！」

ゲラゲラと笑う男たちの声など轟には聞こえていない。男の律動に合わせて好き勝手に揺さぶられ、顔は涙と涎でぐちゃぐちゃになっていた。澄ました顔でひとり帰り道を歩いていた少年はもうどこにもいない。

「あー、まじでイイわ」

「あっ、ああー、あッ、やあ」

「轟くん大丈夫ー？」

「もうお喋りもできないね」

「んぐー、や、とま、っああ」

「はは、何言ってるか分かんねー」

切っ先まで引き抜かれた性器が、前立腺を擦り上げて最奥に当たるのが堪らなく気持ちいい。摩擦でジクジクと熟れた轟の

中は喜んで男のものを締め付ける。

「や、あ、あ：ッ！」

「あー、なんか奥まだ入りそうなんだけど」

「まじで？いっちゃあう？」

「あっ、だめ、だめ！」

「何言ってるんだよ、拒否権ねーだろ」

体勢を変え、地面に転がされた轟の腰がグツと持ち上げられる。そして上から何度も奥を突くと、ぐぱりとこじ開けられた弁が男の性器を包み込んだ。

「ッ——うぐ、あっ、あ——！」

男がこじ開けたのは轟の結腸だ。痛みで強ばった身体が、ガクガクと痙攣した後に弛緩する。轟の結腸は飲み込んだ男の性器をぎゅうぎゅうと締め付けた。

「ぐっ、やばっ、ッ」

「やあー、あッ：あう」

吐き出される男の精液の熱さに轟が身悶える。結腸の中でたぷんと精液が揺れた気がして轟はまた軽くイってしまった。

「はー、めっちゃ出たわ」

「じゃー次は俺のもよろしくね」

息をつく間もなく入れ代わり立ち代わり男達の相手をさせら



れる。薬のせいで身体を動かさず逃げることもしない轟は、男達が満足するまでただただ時間が過ぎるのを待つことしかできなかつた。

「おーい、轟くん大丈夫？」

頭上にいるはずの男の声がどこか遠くに聞こえる。何度中に出されただろうか。どのくらいの時間が経っただろうか。轟は虚ろな目で掠れた喘ぎ声を漏らす。もう指先の一本も動きそうになかつた。

「おい、締めり悪いんだけど」

「轟くん、へばっちゃだめだよ？ほら頑張って」

ぺちぺちと頬を叩かれた轟であるが、その反応は乏しい。その様子を見た男が思いついたように身を乗り出し、轟の首に両手をかけた。

「ちよっと苦しいけど我慢しろよ」

「っ？うぐ、あ、っ」

「やっべ、めっちゃ締めまるわこれ」

首元に添えられた両手に体重がかかり、轟の気道を塞ぐ。無遠慮に身体を暴かれ、捌られ、抵抗しようとするると暴力で押さえつけられた轟にはその二本の腕を振り払う力など到底残って

おらず、酸欠で顔を真っ赤にしながらぼろぼろと涙を零した。舌を突き出し、必死に酸素を求めて喘ぐ姿に男たちは欲情を煽られる。

「あー、イきそ」

「ーッ、あ、はあ」

「はは、結腸下りてきてる？ぶち抜くよー」

「ぎ、あ、っ——！」

切っ先で結腸を貫いた男は腰を前後に動かし締め付ける弁に出入りするのを楽しんだ後、奥まで深く挿入し欲を吐き出した。轟は声を出すこともできず、はくはくと金魚のように酸素を求めてその小さな口を開閉させる。何度も絶頂に達した身体は痙攣を繰り返し、轟の眼球はゆるく上転していた。満足した男が締め付けていた首を開放すると、急に酸素を吸い込んだ轟が何度も咳き込む。暫くして、ひゅうひゅうとかすれた呼吸を繰り返しぐったりと動かなくなった轟をのぞき込むと、どうやら気絶しているようだった。

「あれ？轟くん寝ちゃった？」

「まだまだ時間あるんだから、勝手に寝るんじゃないよ」

「まあいいじゃん、ちよっとは休ませとかないと朝まで持たないでしょ」



顔も身体もいい最高の玩具をみつけた。そう笑った男達は轟の鞆から学生証を取り出すと、情事の跡を纏わせた轟の姿と一緒にカメラに写す。

「めっちゃいいの撮れたわ、これからもよろしくね轟くん」

「轟くん、ありがとね」

「また遊ぼうね」

乱れた制服のまま車内から追い出され、冷たいアスファルトにへたりこんだ轟の背中に楽しげに声かけられる。後ろから投げ捨てられた鞆が轟の頭にぶつかり、中身が散らばる様子を見た男が「ごめんねー」と言ってまた笑った。ドアが閉まる音、車が走り去る音がまだ日が昇る前の街に響き渡り、辺りがまたしんと静まりかえる。まるで何も無かったように。

呆然と地面に蹲ったまま、どのくらいの時間が経ったのだろう。まだ空は暗く、人の気配もない。誰かが来る前に家に帰らなくては。散らばった教科書やペンケースを鞆に詰め込み、鈍く痛む身体に鞭を打ってよろめきながらも立ち上がる。どろり。中から溢れ出した精液が太ももを伝うのが分かり、身体が強ばる。

ああ、早く家に帰ってシャワーを浴びないと。制服の汚れはどうしたらいいのだろう。洗面台で水洗いだけじゃ落ちないだろうか。もう数時間もしたら学校に行かなきゃいけないのか。帰った時に姉たちが起きていなければいいのに。アイツも家にいなければいいのに。そう言えば今日は体育がある日だ。身体についた傷は、首を絞められた痕は隠せるだろうか。誰かに問い詰められたりしないだろうか。まとまらない考えが次から次へと浮かんでは頭の中をぐるぐると回る。ああ、もう何も考えたくない。赤く腫れた轟の目尻からぼろぼろと涙がこぼれる。

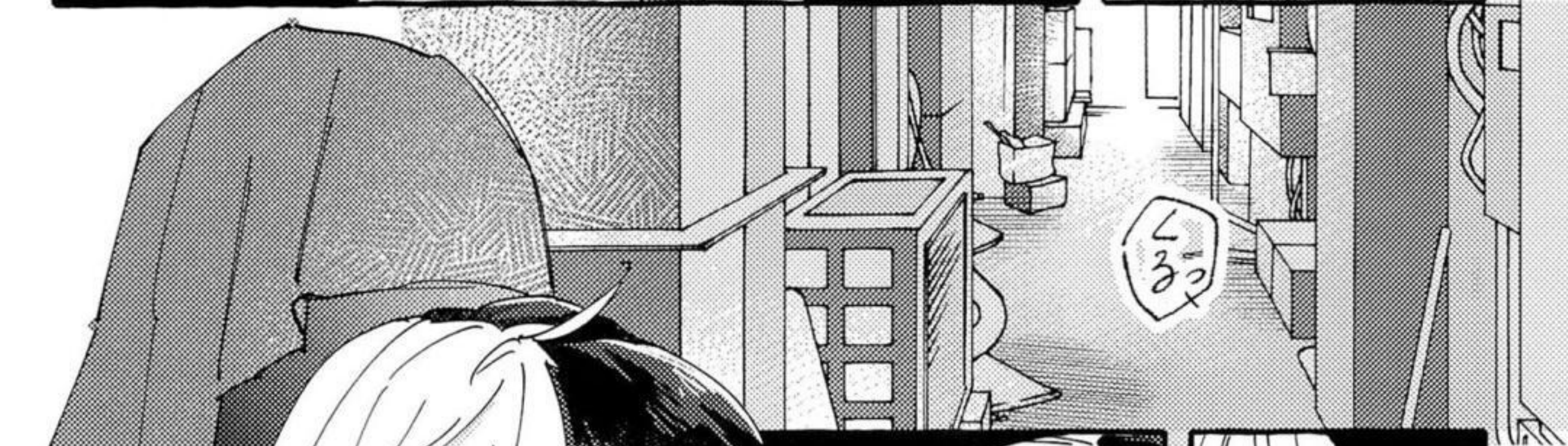
屈辱的な行為の最中、頭の中が真っ白になった瞬間にほんの少しでも幸せだと感じてしまった自分自身を、轟は殺したくてたまらなかった。

終













深い鈍色

吸い込まれる  
ような  
澄んだ青に、

花の  
かんばせ…



個性が…!?



嗚呼、  
芸術品の  
ようだ！

類稀なる  
個性

神からの  
賜り物に  
違いない

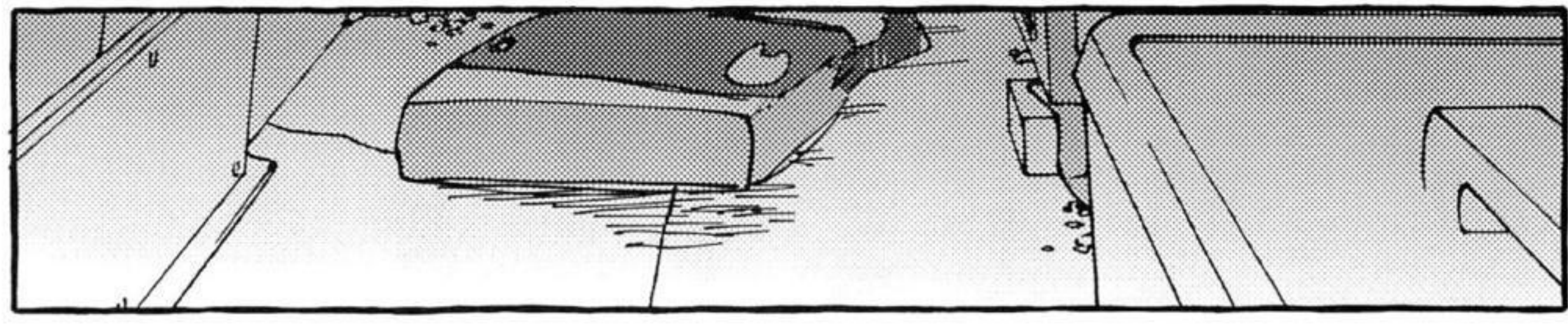
陶磁の  
ような肌



その御身を  
以て我々に

救  
い  
を

赦しと







はち

あ

…?  
?

あ

あ



…何だこれ



…ん、う!?



お

い



宗教施設の  
ような…?









これは  
焦凍君の  
御口で  
清めないよ

そうだ  
そうだ



私めのも  
救って  
下さいませ...



一滴も溢しては  
なりません



頭まわらねえ  
ふわふわする...

嗚呼、  
こんなにも  
汚れて  
しまわれた...














ご覧なところ



個性も使わないのに  
ヒーローを目指している  
貴方様の方が  
イカれているのでは？

や



あ！

…イカれてる？



焦凍君に  
救われている  
者共を

なんと  
健氣な…!

穢れを全て  
その御身で  
受け止めて  
下さる!

ここでなら、  
焦凍君は  
ヒーローです

嗚呼

…そうだな



三万円のパパ

f i s k

待ち合わせはいつも、寂れたビルの前だ。学校帰りの轟は学ランを着たまま、時計を気にしつつ人を待っている。

待ち人は、同級生でも家族でもない。寂しい夕日に照らされながら、ビルの壁に寄りかかって手持ち無沙汰に足元の小石を転がす。今日はどれくらい遅れるのだろう。いつだって轟は待ちぼうけを食らっては、こうして一人の時間を潰してばかり。あまり大事にされていないんだろうかと、そう思う。

約束の時間から二十分ほど経って、轟の前に止まったのは黒い車だった。見慣れた車種の見慣れたナンバー。助手席のドアを開けた轟は、硬いシートへ体を沈める。シートベルトを締め、斜め掛けのカバンは体の前で抱き締めた。

「遅くなってごめんね。待ったかな？」

運転席に座っているのは、スーツを着た男だ。年齢は恐らく四十歳程度だろうが、轟は彼にプライベートなことを尋ねたこととは無い。腹が丸々していて、薄くなりかけた髪をワックスで撫でつけている。電車に乗れば一人は見かけられるようなサラリー

マン。そういう、ごく普通の風貌の男だ。

「行こうか、焦凍くん」

男の声に、轟は返事も頷きもせず前を向いたまま。その凛とした横顔を舐め回すように眺めて、男は車を発車させた。

男と出会ったのは、中学二年生の終わり頃だった。まだ冬も半ばで、今にも雪の降りそうな日のこと。学校が終わり、家に帰りたくなくて駅前でぼんやり突っ立っていたところへ男が声をかけてきたのだ。「君、こんなに寒いのに、もう二時間くらいここにいるよね。どうしたの？」と。

聞いてもないのに、男はペラペラと色んなことを喋った。近くの喫茶店で仕事をしていたら君を見つけたとか、どこかの会社の役員だとか、君の髪色はとても美しいだとか、綺麗な顔をしているのに火傷跡が勿体ないとか。そんな話をされても男には欠片の興味も湧かなかったが、日が沈みきって真っ暗な中、冷え切った手を引かれてホテルに行ったのは半分ほど轟の意思だった。

今日も男と向かうのはホテルだ。いわゆるラブホと呼ばれる建物であるが、轟はそういった世俗的な名称を何一つ知らずに足を踏み入れている。こうして彼と会うのは両手で数えきれな



いほどだというのに、このホテルが「ラブホテル」と呼ばれ、セックスを目的として存在する場所であると教えてもらっていない。そういう下世話なことを知らない無垢なところも、制服で来るように指定されるのも、単に男の趣味だ。

殺風景な部屋の中で異様なほどの存在感を放つクイーンサイズのベッドに腰掛けた男は、ネクタイを解いて轟を手招いた。

「焦凍くん、おいで」

呼ぶ声にすら無表情を貫く轟が、男の前に立つ。両手を握られ全身を舐られるようにして見られると、背筋が凍った。

「また怪我してるねえ。痛くない？ 大丈夫？」

「……怪我なんていつものことだろ」

「やっと思ってくれた。焦凍くんの声が聞けて、パパは嬉しいなあ」

「……」

「おや、また黙っちゃったね」

まるで会話になっていない。それでも男は楽しそうに轟の腕を引き、自身の膝の上に跨らせた。太い指と肉厚の手のひらが太ももをなぞり、引き締まった腰を抱き、尻を揉みしだく。制服の上から体を撫で回す手つきは欲望に忠実で、いやらしいと称するよりもっと卑猥で下品だ。

「少し背が伸びたね。成長期ってすごいなあ。あ、でも筋肉も付いてきちゃったかな」

もっと少年らしい体が好みの男は、学ランを脱がせながら残念そうな声を出す。しかし轟の反応は薄く、ボタンを外されシヤツの下に手を入れられてもなお、ただ撫でられ続けている。それが面白くない男は、拗ねたように唇を突き出した。

「焦凍くん、どうしたの？ 最近可愛くないよ」

「……元から可愛くなんかねえだろ」

「そんなことないのになあ。ほら、パパって呼んでごらん。そうしたら、いっぱい可愛がってあげるからね」

いい歳した男が、猫撫で声を出している。そんな姿に気持ち悪さを感じて、轟の眉が顰められた。

「焦凍くん、そんな顔したらダメだよ」

「そんな顔って？ こんな汚え火傷面になに求めてるんだよ」

シーツの上に押し倒されても、轟の体は弛緩したまま。いつでも逃げられるとばかりに、男を舐めきった態度だ。

「態度の悪い子には、酷くしちゃおうかな」

「勝手にしたらいいだろ。この体が汚くなれば親父が嫌がるし、俺は別に構わない」

「そんな生意気言って。前はもっと可愛かったのになあ。反抗



期かな？」

会話は終わったとばかりに何も言わない轟に、男は顔を近づけてニンマリと笑った。

「本当に悪い子だ。お仕置が必要みたいだね」

そう言うと、男はスーツの内ポケットから小瓶を取り出した。

無色透明のそれが一体何なのか分からないが、「お仕置き」と称して取り出されたということには嫌な予感しかしない。轟が抵抗する前に素早く蓋を開けた男は、小さな口の中へ中身押し込んだ。

「んんっ?!」

不意を突かれ、甘い液体が流れ込んでくる。何を飲まされているのか分からない恐怖に焦って暴れようとするが、上から力任せに押しさえつけられ、身動きを取ることができない。

「げほっ、げほ！　っ、なん、だ、今のは?!」

「即効性らしいから、すぐ分かるよ。あ、個性は使っちゃダメだからね。体にどんな影響があるか分からないから」

その言葉で、轟は目を見開き怯えの色を見せる。咄嗟に口の中に指を入れて吐き出そうとするが、顔に強い衝撃があつてそれどころではなかった。

「……う、」

殴られたのだ。実の父親ほどではないが、体の上にのしかかっている大人の男から拳を振り下ろされれば痛いに決まっている。呻く轟が無駄な抵抗をしないよう、男は二発、三発と殴りつける。興奮して力加減を誤り、轟の口の端と鼻から血が垂れた。

「吐いちゃダメだよ。せっかく焦凍くんのために用意した媚薬なんだから」

「び、やく？」

「そう。焦凍くんいつも涼しい顔してるから、気持ち良くなつてもらおうと思って」

ねっとり鼻血を舐められて気色悪いというのに、体に今まで感じたことのない電流が駆け抜けた。

「……ふ、」

次第に体が熱くなってくる。個性を使ったのとは違う熱だ。シャツを肌蹴られた体に男の手が這うと、高い声が上がった。

「あっ」

「可愛い声だねえ、もっと聞かせてよ」

はあはあと、男の息が荒い。耳から首筋を舐められて、轟は声を出すまいと唇を噛む。

「我慢強いのもどこまで持つかな？」



楽しそうな男は枕元に放ってあったネクタイを手に取り、くったり力を失くした轟の両手を一纏めにして縛りつけた。

「い、やだ！ はずせ！」

「あれ？ 焦凍くん息が上がってるね。顔も赤くて、薬が効いてるんだねえ。よかったよかった」

「ふざけんな！」

男を蹴飛ばそうとした脚は、難なく捕らえられてしまった。

力の入らない体に愕然とする。そんな轟のズボンを脱がせ自らも裸になった男は、嬉々として見慣れない物を色違いの目に映し込んできた。

「見て、こんなのも持ってきたんだよ」

男がカバンから出したのは、乳首バイブだ。透明なシリコンのカップからコードが伸びて、小さなリモコンに繋がっている。訳の分からない物を見せられて、轟は息を飲む。カップを両胸に装着されると、吸い付かれるような感覚に背中がゾワゾワした。

「んん！」

用意周到な男に腹が立つ。今日は最初からこういうことをするつもりで、薬や変な道具を用意してきたのだ。ふ、ふ、と息を乱す轟が睨むも、男は楽しそうにニタニタ笑うのみ。携帯端

末のカメラを向けて、何枚も写真を撮っている。

「いいねえ、未発達の男の子がおっぱいカップ付けてるこのギヤップ、最高だねえ」

「く、う、」

「まだスイッチ入れてないのに、感じちゃった？ 淫乱だね」  
「……っ」

「これはどうかな？」

リモコンを持つ太い指がスイッチを入れた。カップがきゅつと窄まり、媚薬によって敏感になった乳首がバイブの振動に刺激される。初めての快感に、轟は唇を噛むこともできず叫ぶように喘いだ。

「ひ、っああ、あ！」

「んっふふ！ まだ『弱』なのに気持ちよさそうにしちゃって、『強』にしたらどうなるのかな？」

「や、っやだ！ うあああ!!」

バイブの強さが最大にされて、轟から悲鳴にも似た声が上がった。カップによって吸われた乳首には刺激が強すぎるというのに、媚薬の効果もあって頭が真っ白になるほど気持ちが良い。胸しか刺激されていないのに、自然と腰が揺れてしまう。

「焦凍くんすごいね、腰が動いちゃってるよ？ いっぱい感じ



てるんだ」

「っ、あ!!」

男が両胸を掴んで、強く揉みしだく。バイブの振動と男から与えられる刺激に耐えきれず、轟は喉を逸らせてガクガクと内股を震わせた。

乳首だけで達してしまったのだ。今までは男の手で扱かれて無理矢理達してばかりだったというのに、自身の腹に白濁が飛んでいる。触られてすらいのないのにとショックで放心する間も無く、装着されたままの乳首バイブの刺激によって体の熱が高められていく。

「あ、あっ……っ、」

「焦凍くん、すごくえっちな顔だよ。そそるなあ」

「とって、これ、っやだ」

轟が乳首バイブをとって欲しいと懇願するも、男は笑って首を振った。

「ダメだよ。これはお仕置きなんだから」

胸の玩具によって、轟の下半身は痛いほどに張り詰めている。しかしそこには一切触らず、大きく脚を開かせた男はローションを垂らした。

「っひ……う、」

冷たさに息を詰める轟のことは気にもしない。薬の効果で赤く熟れた後ろがヒクヒクしているのを確認すると、またカバンから何かを取り出した。

「ほーら、見て見て。焦凍くんの可愛いお尻に、こんなの入れちゃおうか」

男が手にしていたのは、男性器を模したバイブだ。蛍光ピンクの悪趣味な色をして、たくさんイボが付いている。未だ乳首への刺激でいっぱいになっていいる轟が嫌がって首を振るが、男は構うことなく胎内に突き入れた。

「っあ……が、」

内臓を圧迫される感覚で、上手く息ができない。

入れられた衝撃で前からは白濁が飛んでいるがそれどころではなかった。太いそれは、奥までずっぷりと入り込んでいる。

息つく間も無くバイブがグネグネと動き始めた。

「あああ!!」

普段はツンと澄ました顔で男を受け入れている轟が、薬と大人の玩具によって乱れに乱れている。これまで機械的に抱かれていただけの轟にとって、あり得ない快感に襲われて苦しいくらいだ。体の中に埋め込まれたバイブに前立腺を刺激され、ぎゅっと締めつけては自分で自分を追い詰めてしまう。



「あう、ぐ、っ……ひああ！」

細い悲鳴が絶え間なく、それが男を異常なほどに興奮させている。でっぷりした腹の下には赤黒い雄が勃ち上がり、血管が浮き出てグロテスクだ。

「焦凍くん、焦凍くん、すごく可愛いよ！ もっといやらしい顔見せて！」

機械的な音を立てて動くバイブを抜き差しすると、轟の腰が浮いてガクガクと痙攣した。

「ああ！ っ、っ……かはっ！ げほ、う……っパパあ」

もうやめると、懇願が小さく消えていく。

顔を真っ赤にして、轟はぐずぐずに泣いていた。

手を差し伸べてくれた男には、少なからず甘えていたのだ。

だから、素っ気ない態度でも許してくれると思っていた。

でも違った。また間違えたんだ。と、どこか冷静な思考の向

こう側が、轟を叱咤する。

頭も体も沸騰したように熱く、初めての快楽で焼き切れそう  
だ。目の前でカメラを構えている男が恐ろしい生き物にも思え、  
轟の体が震えた。

「ほら、焦凍くん。何がほしいのか言っごらん」

「……っ」

「こんな玩具じゃなくてさ、もっと欲しいのあるでしょ？ い  
つも欲しがってるやつだよ」

「……ぱぼ、の」

「うんうん、パパのなにかな？」

何でこんなことするの。なんて言えない。

愛が欲しいなんて、そんなことはどうしても言えなかった。

幼少の頃より実の父親からの暴力的な教育を受け続ける轟は、  
大人の男が恐ろしく、しかし同時に愛情が欲しいという歪んだ  
感情を抱いているのだ。

「言ってくれなきゃ分からないよ」

「……っあ、!!」

乱暴に奥を突かれ、ぐちゅっと嫌な水音がする。涙で滲む視  
界に何を映しているのか分からないまま、轟は教えられた言葉  
を舌に乗せた。

「ぱぼの、ちんちん、ちようだい」

「よく言えました」

「っ、っひああああ!!」

邪魔だとばかりに乳首バイブを外され、胎内のバイブも引き  
抜かれて、男のそそり立ったものが突き立てられた。胎内を穿  
つ凶暴なまでの熱に、轟はそれだけで達してしまう。腹の上を



薄くなった精液が垂れた。

「ああ、ああ、焦凍くんの中、すっごく熱いよおお！」

媚薬によって高められた熱のせいか轟のナカはいつもより温かく、媚肉はふわふわと柔らかいのに程よく締め付けてくる。

男は轟の腰を痛いほどに掴み、汚らしく喘ぎながら自分本位なピストンをする。

「あ、っあ！ はや、い、っ……んん！ あ！」

「おふっ、焦凍くんの中、僕のちんちん締め付けてくるよ……

っ！ お尻の中が、僕のこと大好きって言ってるよおお！」

「ちが、も、っ！ ああ！ っく……っ、っ!!」

轟の背中が弓なりに反り、胎内がぎゅううっつと収縮する。腰がヒクヒク震えて快感を訴えているが、達したにも関わらず腹につくほど勃った中心からは何も出ていない。

「ふ、っあ、」

「焦凍くん、女の子みたいにイッチャったね。可愛いねえ。ご褒美に、僕のちんちんで奥にちゅってしてあげようね」

男は轟の体をグッと折り畳み、膝をベッドにつけてしまう。

苦しい体勢の轟が息を吸った瞬間に、自身を根元まで埋め込んだ。

今まで入ったことのない所をこじ開けて先端が入り込み、過

敏なまでの轟の結腸を亀頭が無遠慮に舐め回す。

「あ、あ、っああ!! おく、だめっ、!! それだめえええ！」

「おほおお!! 焦凍くんが一番奥、気持ちいいよお！ 僕の先っぽが、ちゅってしてるの分かる？ 分かるよね？ ほら！

ほら、また！」

「ひうう!! ぐ、ああ、っ」

男が体を打ちつけるたびに、轟の体がガクガク痙攣してメスイキを繰り返す。不自由な手でシーツを握りしめ、頭を振ってみても、籠った熱も快楽も逃がすことができず、あまりに苦しい。

「あぐ、っう、あ、あ！ あ！」

「出すよ！ 焦凍くんのお腹の中に、僕の濃いのが、いっぱい出すよ！ いくよ!!」

「あああ!! っ、!!……っ！」

最奥に熱を受け止めて、轟も果てる。きゅんきゅんとうごめく媚肉が、男の精液を最後まで絞り尽くそうとしているようだ。

それに気を良くした男が、轟の腹の中を掻き混ぜるように腰を動かす。

「っあ、んう！ っ、」

「はあっはあっ、焦凍くんの中、気持ち良すぎて、全然収まら



ないよ。もつとえっちしよう」

「ふあ、あ……ああ……っ」

とろんとした轟の腕を縛っていたネクタイを解くと、きつく締めすぎていたのか赤く跡になっていた。気にせず薄っぺらな下腹部を撫でさすり、抽送する。先程出した精液がとろとろと溢れ、それにすら感じ入った声を漏らす轟はまたすぐにイッたようだった。

「あ、っあ、もう、イケな……っ、」

「可愛い、可愛いよ焦凍くん、今日はもつといっぱい可愛がってあげるからね」

「ばば、あ……っ」

轟が目の前の男の背に腕を回す。

それだけで、なんだか少しだけ安心できるような気がした。

＊

目が覚めると男はいなかった。

薬を使われたせいかわ、無理をさせられたからか、ベッドから起き上がった体は軋むように痛い。殴られた頬は熱を持ち、腫れている感覚があった。

「い、てえ……っ」

男が後始末をしたのか、散々どろどろにされた轟の体は綺麗になっていた。無心で制服をかき集め、緩慢な動作でシャツのボタンを留めながら時計を見ると、辛うじて学生服を着た子供が歩いていても補導されない時間だった。しかし補導はされなくても、こんなに遅く帰宅したら父や姉に怒られるかもしれない。

「あ……」

ベッド脇には三万円と「またね」の走り書き。

それを目にした轟は、急に胸が締めつけられるように痛んだ。いつまでこんな不毛なことをしているのだろうか、息が苦しくなる。

窓の向こうに目を向ければ、真っ暗な空には綺麗な満月が浮かんでいた。青白く美しい月に責められているような気がして、轟は窓に背を向けて虚しさで寂しさに涙を流した。

終



大学から来た  
です

今回母校である  
凝山中学で  
教育実習をさせて頂  
き……

ザワ

卒業生  
か……!

ち、  
男の子……

何か困ったこと  
があれば  
気軽に相談  
して下さい!

皆さん  
今日から3週間  
よろしく願います

さようなら、また明日 わた

パチ

パチ

パチ









……  
何ですか

先生



ごめんね  
もう帰るの？

今日一回も  
視線合わなかった  
から心配でさ

せめて  
挨拶だけでも  
思ってる

……  
すみません  
それじゃ



へえ……

噂通り  
ツれないんだね  
轟くん

……  
……







コシツ

我慢しても  
ツラく  
なっちゃうよ？  
ほらココ  
触って欲しそう  
にしてる

ん…っ

先生と  
もつと沢山  
気持ちいこと  
しようか

準備室

アツ

うあ…!!

かちゅっ

アツ

どう？  
先生の個性  
かなり  
イイでしょ  
轟くん

や、アア!!

ハッ

ちゅっ

ハッ



ホント  
期待以上に  
かわいいね  
轟くん♡

さっきまで  
あんなに  
反抗的  
だったのに

こんな  
なつちやうんだ？

ぽんっ

ぐちゃん

アッ  
ッ  
ッ

あ…  
ア

（ニヤニヤ）

実は  
こおーんなに  
ちんぽ大好き  
なんだって  
知らないんだね  
みんな

教えてみる？

ッ!!

ははっ  
冗談 冗談







……あ  
気が付いた？


具合ヨすぎて  
加減するの  
忘れちゃったよ  
ごめんね

しばらく  
痺れて動けない  
だろうから  
制服着せて  
あげるね？

……  
声出せねえ

……先生ね  
轟くんが  
トんじやってる  
間に良いこと  
思いついたんだ





放課後  
会いたいとき  
二人だけの  
合図があれば  
轟くんも  
来やすいよね？



…忘れちゃ  
ダメだよ？

起立ー

礼ー

さようなら

さようなら





轟くん  
……

『さようなら、  
また明日』



ハッピーエンド

しの

目の前は真っ暗闇だった。

胎児のような丸く縮こまるような体勢、そうしないとこの小さな箱の中には入りきらない。

ゆりかごと呼ぶには居心地が悪い。

けれど男のいいつけ通り少年はじっと堪えた。

何処に向かっているのだろうか。あとどれくらいかかるのだろうか。男からは何処に行くのかは聞いていない。

けれど少年自らこの箱に入った。

『君の望むところへ連れて行ってあげる』

少年は目を閉じた。いつ到着するか分からない、ならば眠ってしまおう。

不安はなかった。男のことを信用していたということもあるけれど、少年は全てを諦めていた。

男に手を引かれるまま、男に身を委ねる方が楽だ。

彼は父親のように怒鳴らないし殴らない、そして少年を決し

て否定しない。

今の少年にとってはそれだけで男を信用するのに十分すぎる根拠だった。

目が覚めたら本当に生まれ変わるだろうか。

少年は今までのことを頭の中で思い出していた。

ある日、通学路で背の高い男に声をかけられた。メガネをかけておりかっちりとしたスーツに身を包んでいる。

極限まで鍛え上げられた父親の体格とは正反対で、決してひ弱ではないが、線が細い印象だ。

レンズの奥の目じりは垂れ気味で人のよさそうな顔をしている。

人に会いに来て地図アプリを見ながら此処まで来たが、途中で携帯電話の充電を切らしてしまって困っていると男は言った。しかし少年は男のことを警戒していた。知らない人にはついて行ってはいけないと幼稚園児でも知っている。

男は怪しまれていると自覚をしていないのだろうか。



「公園の近くって聞いたんだけど」

呑気に言っ、辺りを見回している。そして少年は公園の場所を知っており、男から『公園』というキーワードを聞いて思わず「あ」と呟いてしまったのだ。

そうなれば早い。男は生活音に消え入りそうな少年の呟きを耳ざとく拾った。

「知っているのかい?!」

此処で「知らない」とは言えなかった。前のめりで、少年のような瞳で迫られて、少年はなんとなくこの人は悪い大人だとは思えなかった。

少年は小さく頷いた。此処からは然程遠くはないが言葉で説明するのに、公園までの道のりは入り組んでおり説明しにくいので自ら公園まで案内することにした。

公園に辿りつくまで数分ではあったが男とはとりとめのない世間話をした。男は口下手な少年を巧みに会話に乗せた。

少年はクラスでは一人も友人と呼べる者がおらず、家でも話せる人間がいなかったたので人と会話を交わすことが久しぶりだった。初対面だというのに懐かしい気持ちになった。

あつという間に公園に着いてしまって、少年は寂しい気持ちになった。

男は感謝を込めて少年の小さな手を握って礼を述べた。

「此処まで案内してくれてありがとう、助かったよ」

「いえ」

「君はこの辺りの人かい？」

「はい」

「そっか、だから詳しかったんだね。これ、少しだけお礼」

男は財布から札を一枚取り出し迷わず少年に差し出した。

少年はぎょつとして慌てて首を振った。

「いや、少し道を案内しただけなので、そんな大金受け取れません」

「ええっ!? 本当に助かったから：お礼をしたかったんだけど」

困ったなあ。カードと緊急用の一万円札しかない、と困ったようにこめかみをかく男に少年は啞然とした。

たった数分の道案内だけで一万円出してくる人間なんて普通いない。

「いや、ほんとにいいので」

「それじゃあ僕の気が済まない」

「本当に、ええと、じゃあ…」

自販機が目についてそれを指さすと男が首を傾げた。

「ジュース一本で」



「それだけでいいの？」

「はい、いいんです」

「君はまだ幼いのにしっかりしてるねえ」

「おじさんがおかしいんですよ」

「僕まだ若いのになあ」

けれど自販機に一万円札の投入口はなく、結局男が少年に礼をすることはできなかった。

「来週、今日と同じ曜日、今と同じ時間にまた此処に来るから、その時にお礼をさせてほしい」

そう約束を交わして二人は別れた。

それから少年は男と数分のやりとりが頭から離れなかった。学校で授業中、教師の話を聞いているときも、父親に特訓を強いられているときも、考え事をして父親に余計にこっぴどく扱われたけれど、あの日、男との会話が少年の変わらない日常に色を付けた。

決してジュースが欲しいわけではなかった。また会って話が見たいと純粹にそう思った。このぽっかりと空いた虚無感を埋めるために。

男との約束の日、あの日と同じ時間、少年は公園へと向かっ

た。

それからというもの男とは同じ時間同じ曜日に会って話をした。

通学路から少し外れた公園のベンチで冷たいサイダーをこちそうになって、門限ぎりぎりの時間まで話した。

学校にいても特に親しい友人はいない。皆、ヒーローの息子だと遠巻きに見て話しかけてくる者はいなかった。

物を盗まれたり、陰口を叩かれもした。家に帰ると父親の特訓で心身ともに疲弊する。

そんな毎日の中で、男との会瀬は少年にとって救いだった。男は否定しない。少年の話を真剣に聞き、頷いた。

少年の周りに心配してくれるような人間は誰一人いなかった。男はじっくり煮詰めるように時間をかけて少年との距離を縮めていき、少年は少しずつ家の事情を話すようになった。

日に日に増えていく傷を撫でながら、自分がされたわけでもないのに、男は苦痛に顔を歪める。いつしか男は少年にとって良き理解者となっていた。

「可哀想に、君は何も悪くない」



男は少年の頭を慈しむように撫でた。思えば父親にこうして頭を撫でてもらえることなど一度としてなかった。少年は瞳からぼろぼろと涙を溢した。

母と別れてから少年はもう二度と泣くまいと堪えていたが、どうしても堪えきれなかった。

男と出会ってから三年もの月日が経ち、少年は十歳になった。ある日男は真剣な面持ちで言った。

「おじさんの息子になってくれないか」

少年は困惑した。まだ人生の酸いも甘いも知らない子どもだけれど血の繋がっていない人間と親子関係になるなんて無理な話だ。

「もう傷つかなくていい」

男は少年を抱き締めた。

それに何よりも母親のことが気がかりだった。

そして少年には父親の個性を使わずにナンバーワンヒーローになることで父親に復讐するといふもくろみがあった。

だから直ぐに男の言葉を飲みこむことができなかった。

それだけ現実離れした男の願望に、少年は答えることが出来ない。

「ぼくは本気だよ。住むところは心配しないでいい、おじさんはこうみえてお金持ちなんだ。一生不自由なんてさせないし、君のこと、ずっとずっと大事にする。きっと、君のお父さんは悲しむけれど」

男の末尾の言葉に少年はカッとなって声を荒げ、まくしたてるように言った。

「悲しむ?! あいつはそんなたまじゃあない! 俺がいなくなっても、なにも感じない。あいつの欲望を満たすだけの道具としかみられていない! 俺はっ、俺は親父に個性しか見られていない、だって、その為にお母さんはあいつと!」

けして、けして息子が姿を消したことに悲しみに暮れることはない。少年は確信を持っていた。言葉に出すと自分がなんのために生まれてきたのか分からなくなってくる。

「親父は俺の個性にしか興味がないから、悲しむなんてことない」

「僕は君の強い個性もすごいと思う。けど僕は、個性がなくなると焦凍くんが必要だよ。焦凍くんは優しい。悲しくて、痛々



しくて放っておけなくなるんだ」

男は少年を個性だけでなく、彼自身を見ていたいという。守りたい。幸せにすると曇りなき瞳を向けながら恥ずかしげもなく言う。いつしか少年は男の申し出に頷いていた。男に身を委ねることに決めたのだ。

熱くも、寒くもなく、丁度よい。

目覚めると柔らかなスプリングの上にあった。

先程まで押し込まれた箱の中とは打って変わって居心地のよさに少年はぱちりぱちりと瞬きを繰り返すが起きて早々眩暈がして頭を抱えた。痛む頭を抱えながら部屋の中を見渡すと床も壁紙も真っ白で天井は高く、大きな窓があり、それは空気を取り込もうと全開に開け放たれている。

窓枠にぶら下がった真っ白なカーテンがそよいであり、窓の外から送られてくる風が心地よい。

少年は未だ本調子ではなかったが上半身を起こし、ベッドから降りた。

「焦凍くん、目が覚めたんだね。長旅で疲れているだろう。」

もう少しゆっくりしていいんだよ。お腹は減っていないかい？」

男のたおやかな声が鼓膜を優しく揺らした。

「ここ」

「ん？」

「此処が俺の新しい家？」

「うん、そうだよ。もう大丈夫だ。君のことを虐げる人は来ない、僕が君を守るから」

男はゆっくりとベッドに歩み寄る。長身で細身の背格好にかっちりとしたスーツを着こなしている姿はインテリな雰囲気醸し出す。

男はいくつも会社を持っておりとんでもない金持ちらしい。此処に来るまでそれが本当なのかどうか確信は持てなかったけれどあながち冗談ではなさそうだ。

男は少年の目の前に跪くようにして片膝を折ると、少年の小さな手を取る。こうべを垂れ、まるで物語に出てくる騎士のように、祈るように傳いた。

それから少年の新たな生活が始まった。



目立つ火傷の痕は最新の医療技術で綺麗さっぱり消え、髪の毛は全て黒く染めた。肌に刻まれていた無数の痣も日を重ねる度に消えていった。

此処は日本から遠い遠い場所で湖と山に囲まれており、学校には毎朝男が車で送っていき、迎えには男の秘書が担った。はじめは言葉が通じない場所に放り込まれ馴染むのに時間はかかったが、少年をいじめる者など誰一人としていなかった。

此処で生活をしているうちに言葉の壁はなくなって気付けば一人二人と友人と呼べる者も増えてきた。

男は家を空けることも多々あったが、一人家政婦を雇い、少年が寂しくないようにと、猫を連れてきた。

男の約束通り少年は何不自由ない暮らしを送り、平穏な毎日を送っている。

けれど時折思い出すことがある。今よりずっと幼い頃、大好きなヒーローになりたくて夢中になって映像の中のヒーローを見つめていた少年に母は微笑んでいた。しかしあの時、母が言ってくれた言葉を少年はすっかり忘れてしまった。

少年は十三歳になった。

いつものように同じ時間に眠ったその晩、違和感に目が覚める。下半身がひんやりしていて恐る恐るパジャマをめくるとその中にはべっとりとしたものが付着していた。それだけでなく、大事なところがジンジンと張りつめていて痛かった。少年は頭が冷えるのを感じた。どくんどくん、胸の奥が脈立つ。この年にもなっておねしょをしまったのだと肝が冷えたがおしっこではない何かにまた別の意味で少年はもしかしたら病気ではないかと恐怖心を抱いた。

真っ青な顔をしながらベッドから起き上がり、男の部屋へと向かう。

ノックをしてお父さんお父さん、と呼ぶと中から然程時間もかけずにどうぞ、と声がかかる。

男は枕に背を預け、右手には本を持っていたが、少年の姿を認めると、直ぐに本を閉じた。男が起き上がるよりも先に少年はベッドまで小走りで駆け寄った。父と呼んだ男の胸に飛び込み甘えるように胸に頬を寄せる。

「お父さん」

「どうしたんだ？怖い夢でも見たか」

少年はこの経緯を説明し、声を震わせながら「俺、病気が



もしれない」と呟いた。

男は、未だ済ませていなかったんだなあと、安堵する様子に少年は怪訝そうに首をかしげる。

「これはね。大人になるために大事なことなんだよ」

「大事なこと？」

「そう、焦凍は、他の子より少し遅いかもしれないけれど、男なら誰もが通る道なんだ」

「お父さんも、こうなったの？」

男はそうだよ。と苦笑いし、持っていた本をベッドのサイドテーブルに置き、掛け布団を取り払った。

すると少年の体を抱き込んだ。

「あっ」

ぐい、と肩を抱かれ、パジャマのズボンに入ってくる指先にひくん、と腰を揺らす。

「おとうさん？」

「大丈夫、お父さんを信じて、ここ、痛いだろう？」

「うん、痛い」

「今からお父さんが治してやるから」

少年は男の言葉に何も疑いを持たず身を委ねた。ウエストゴムを引っばってパジャマを下着ごと足から抜くと下半身は外氣

に晒される。ねとり、と粘液が糸を引き少年は羞恥に身を振った。男の胸にすがり付く指先に力を込めるが男は少年に「大丈夫」と耳元で囁いた。

少年は体を強張らせながらコクコクと頷いた。

「ひゃっ」

腿に男の骨ばった指先が触れる。思ったよりもひんやりと冷たくてすつとんきょうな声を上げた。

「ああ、焦凍のここは可愛らしいね」

するすると肌を滑る感触にピクピクと体を揺らす。ついにそれは少年の大事なところに到達して、張り詰めたそこに触れた。

「あっ！」

大事に大事に、少年よりもずっと小さな子どもに触れるような手付きで撫で上げる。ぞわぞわと背筋が震える。

下半身は今まで感じたことのない感覚がして少年は男の腕の中で身悶える。

「と、さっ、や、だ、これっ」

「嫌？」

「だって、変、だ。ちんちんっ、むずむずして、へんだ」  
少年の先端からは水飴のような粘液がとろりと溢れ出る。



『痛い』とは異なる。むずむずする。微量の電流が流れ込んでくるような。堪えようと体は言うことを聞かず施される手淫に下腹がガクガクと痙攣を繰り返した。

「怖くない、大丈夫」

小さな子どもを寝かしつけるような声色で囁かれて、それすらも反応を示してしまおう。

「あっ、う、と、さん、でちゃうっ、おしっこ、でちゃうからあ」

お願い、離して、いじわるしないで、

少年は込み上げてくる尿意に堪えるが、男の手は激しさを増していく。

「アっ…あうっ…でちゃう、っ…ひううう」

ぴゆるっぴゆるっ、背をのけぞらせ、未発達なそこから飛沫を上げる。

白っぽくてとろとろしている。おしっこは違うけれど生臭いなんとも言えないような臭いがした。

少年は出した後に異様な疲労感に苛まれる。

「おしっこ、しちゃった。ごめんなさい」

「おしっこじゃないよ。大人に近づいたんだ」

男が少年のこめかみにキスを落とす。少年はその心地よさに

うとうとと目を閉じた。

あの晩、男にしてもらった行為が忘れられない。

それを皮切りに少年は毎晩に男の部屋を訪れるようになった。何度か男がしてくれたように

扱いてみたけれど上手く出来ず、諦めて男の寝室を訪れる。

何度も夜を重ねるうちに男が施す手淫は激しさを増していった。いつしか少年は施される甘やかな快樂の虜となった。

「んっ、アっ…アうっ」

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

荒く息をする音、ぬち、ぬち、ぬち、と粘っこい水音が木霊している。間接照明が頼りなくベッドを照らす。未だ未発達な少年の身を男が背後から抱えている。

触れた箇所がジンジンと熱を帯びていく。長いこと体を愛しむように愛撫されていた。

ぬち、ぬち、ぐちっ

与えられる熱に体は疼いて堪らなかった。はじめこそはこの甘い痺れに背徳感を抱いていたが、それは回数を重ねるごとに薄れていく。



「ふあっアっ、ンっ……きもちいのっ……きちやうっ……！」

びくっ、堪らなくなつて素足が指先までピンツと張りつめる。シーツの上を滑り、襲ってくる快樂に身悶える。

びゆるっ、幼い陰茎から白濁を吐き出し男の手のひらを濡らした。

はあ——はあ——

男は少年の赤く染まった丸い頬を撫で上げ「気持ちよかったかい？」と問いかけると、少年はとろけ切った顔をして「うん……」と頷いた。

「ねえ、焦凍もお父さんのこと、気持ちよくして」

耳でそう囁くと、少年は恥ずかしそうにしながらも「分かった」と呟いた。

ベッドの上で膝立ちになり、男の膝の上に跨ると、柔らかそうな腿の間からはトロリとした粘液が腿を伝った。

「準備万端だね」

「直ぐ、入れてほしかったから」

「焦凍は、えっちだね」

「えっちな俺は嫌い？」

「そんなことはないよ。可愛い。大好き」

男の骨ばった指先が少年の濡れそぼった後孔に入り、探るよ

うにぬちぬちと抜き差しされる。

「あうっ……指、だめっ」

「だめ？気持ちよくない？」

「いいっ、きもちいい、よおっ……ん、あっ」

ぐちゅっぐちゅっ、ぬちゅんっ、

「ふふ、おまんこみたい」

「ひうっ、ちが、おれ、おんなじゃな、……ひっ、あっ!?そっ、

……な、激しく、かき混ぜないでっ、でちゃう、からあっ」

ぽたりぽたりと指で掻き出したローションがシーツに染みを作る。

「おと、さんのちんぽでっ、イきたいから、いじめないで」

「ああ……焦凍、可愛い……本当に可愛い子だ」

男は埋めていた指をぬるりと引き抜くと、それすらも少年は小さく嬌声を上げた。

そして男の下腹部を裸にしようと下着を捲るとぼろんっ少年よりも倍の質量を持ったそれが姿を現した。

少年は固唾を飲み、天を仰いだ雄にとろけきったそこを宛がった。

先端にノックされる度にそこはちゅぽんちゅぽんと熱烈に口付けるように吸い付く。



「は、ア、……あっ……あうううっ……」

ぬくっ、ぐにゆううう

「んあっ、ひうっ……!」

男のどくどくと脈立った雄を飲み込んでいく。

少年特有のなだらかな曲線美を描いた腰が仰け反った。快楽で全身火照った体はピンク色に染まっている。白く柔らかそうな腹、とろんと細まった瞳からは涙が浮かび、小作りな唇は半開きになって、甘い甘い嬌声を上げている。

男は息を詰めながら、少年の様子を見守っていた。すると何を思ったか、少年の腰を力強く掴み上げ、自らの腰をぐっと上に突き上げた。

ごちゅんっ!!!

「あああああ……!」

きゆううううううビクッ、ヒクッヒクッ、ぷしゃっ!

少年はその衝撃に再び絶頂に達した。男は締め付けにブルリと体を震わせた。

「うあっ、すごいっ……気持ちいいよ。焦凍っねえ、動いていい?」

はくはくと未だ息を整えている少年の耳元でそう囁くが、少年はその言葉を上手く処理できないのか、男にまたがり、雄を

深く啜え込み男の胸にもたれている。

しかし男は構わず、少年の尻たぶを形が変わる程に強く鷲づかみ、再び腰を激しく打ち付けた。

ずるるるるっ!ズプンッ

「あああああ……!」

「くっ、あ、しめつけ、すごいっ、」

「ひ、あ、やああっ」

腰を乱暴に掴み上げ前後に揺する。ただ本能のままに快楽を貪る行為。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ!

「あっ!ひっ!……や、……お、ぐっ、ぎあ……あああ……」

く!!まっ、いまっ、いってうからっ!

じゅこっ!、じゅこっ、じゅぷっ!ぐちゅっ、ぐちゅっ、

ぐちゅっ、ちゅぼちゅぼっ!

「あひっいんんんひぐっんぐううううっ、いぐつまたっ、  
イっちやううう」

ドピユッ、ビュルル——!!

「ひぐっ——うあああああ」

ビュルッビュクッビュビュッシャッ——

腰をクンッと過剰に反らした。ぎよろりと目は上を向き半開



きになった唇の端からは唾液をだらりと溢した。

ずるりと杭を引き抜かれたそこは白濁が溢れ出た。びく、びくつ、と快楽の余韻に体が跳ねる。

ベッドの上で横たわり、息を整える少年は仰向けに寝かされ、腿を大きく広げるような体勢を取らされる。

少年はここまでされてこれからされるであろう事態を想定し、ふるふると首を振った。

「まって、おと、さ……ひ、うっまって、まだっ……」

ふうふう、と汗だくになり息を荒げる男に組み敷かれる。ぬるぬるん、と再びバッキバキに勃起した雄を雌孔に押し付けられ、少年は顔を青ざめた。しかし少年の懇願も虚しく男は無慈悲に腰を打ち付けた。

ズブンッ!!!

「オッ——」

チカリチカリと目の前に星が散る。ピュルッ、と先端から薄くなった精子を吐き出した。

一気に奥深くまで受け入れた衝動に体が過剰に痙攣する。少年を犯している男の腰つきは次第に激しくなっていく。

ずぽっずぽっずぽっずぽっ、

「ひ、い、や、らっ、やああっ！」

奥を激しく貫かれる度に、ビクッ、ビクッ、と大きく開いた足が揺れる。

「あ!あ、ぐっ、!や、らっ、つ、かない、れでえっ、おかひくっ、なるうっ」

ごちゅっごちゅっごちゅ!

ぎゅむうう、と乳首を左右強く引っ張られ、ビクッ、と胸を反らせて強い刺激に悶えた。

「ひぐっ」

「ぐ、締まるっ、おっぱいつねられてっ、感じるなんて、変態だなあ。気持ちっ、いいだろっ?!」

「ちが、あっ、くく!?あぐっ」

「はあっ、はあっ、違わない、だろっ?!強くされるの、好き、だよ、なあっ！」

ドチュンッツ!

「ンオっ!あああああ——!はうううっ、すきっ、らいしゅきっ、ちくびっ、つよくっ、つねられうのも、おっきなおちんぽでおなかのおくっ、ちゅかれるの、っだいしゅきいいい」

「可愛い、可愛い僕の子、ご褒美沢山やらないとなあ！」

ごりゅうううううっ



「あぎいいいい」

「はっ、はっ、はっ、イクッ！精子出るっ！俺の子を孕めえ！」  
照明の照らすベッドの上では獣たちが一心不乱に腰を振りたくる。

ズパんツズパんツ、ごちゅんっごちゅんっ、肉と肉がぶつかり合い、精子でぬかるんだそこは男の雄が入り出す度に下品な水音を立てる。

少年は華奢な体を激しく揺すぶられ大きく開かれた足は男の律動に合わせてぶらんぶらんと人形のように揺れた。

「ひうっ！らめっ、あかちゃんっらめえっ、ひ、ぎっ、いいい！」

ビュ——！！！！ビュルビュルルルル

男の腰が激しく痙攣し、最奥に子種を注ぎ込んだ。

入り口はひくりひくりと痙攣を繰り返し、ドクドクと腹の奥に流れてくる熱いものを飲み込んでいく。男は一滴残らず中に注ごうと腰を小刻みに揺らした。

ズルッ、と引き抜かれたそこからはどろりと黄ばんだ精子が溢れでる。

「あ、ひ……」

栓を抜かれたそこはぱくりぱくりと開閉を繰り返す。

少年は一瞬の静寂に瞳を閉じかけていた。しかし、目の前には粘液に濡れた雄が目の前にあった。先程まで少年を蹂躪していたものだ。少年は顔を上げてそれに迷わず舌を寄せる。

「あふ……、ん、う……」

小さな舌先でぺろぺろと従順に男の雄を撫で上げる。

男は口元をいやらしく歪めながら少年の黒い髪を撫でた。


「君は、今幸せかい？」

少年は心地よさそうに目を細め男のものに舌を這わせながら「はい」と答える。

その表情は幸福に満ちていた。

終





やっと手に入れた




焦凍くん


ずっと君に  
焦がれていた

ま る は だ か

泪 飴



祝福も



全てを持って  
生まれた男の子

呪いも





辛いだろう



かわいそうに

う、あ…




まだ正気が残って…

早く君を救ってあげないとね


やめ…








君が苦しいのはさ



そうやって耐えて  
理性を保とうとするからだ



だからね



全部忘れるんだよ

君はNo.2ヒーローの  
息子で、最高傑作で

ヒーロー志望の雄英生徒  
だったかもしれない

いいや、もう夢を叶えて  
ヒーローになってたかな？

どこかの国の王子様  
だったかもしれないし

本当は人間ですらなくて  
孤高の吸血鬼なのかも



そうして君は幸せな丸裸に



ただの焦凍くんになればいい



Knock  
Lock  
Shake



新米バニーの前途多難な教育実習

みんこ

黒いレオタードスーツに身を包み、頭にはウサギの耳を模したカチューシャをつける。手首には白いカフス、首には付け襟と黒いリボン。尻に白い尻尾を揺らし、その下に伸びる両脚には網タイツを。最後は黒いピンヒールを履いてコツコツと軽快な音を鳴らせば――華麗なバニーガールの完成だ。彼女たちは慣れた様子で衣装を着こなし、華やかに笑いながら客と共に席について酒を注ぐ。

ここは全国屈指の美人と美酒が集まる、楽園と呼ばれるバニークラブ。今日も客入りが良く、酒がたくさん空けられていく。スーツに身を包んだオーナーは客の案内をしながら内心、売り上げを考えて悦に浸った。

フロアを見渡し、特別売り上げが良い席へ向かう。見事な腹をした中年の男がバニーに寄りかかって何か熱心に話しかけている。

「お客様、空いたボトルをお下げ致します」

「ああ、頼む。そうだ。この子にもう一本ボトルをあげてくれないか。さあ、何が飲みたい？ 何でも好きなものを頼みたま

え」

話しかけられたバニーは「いえ……あの、俺、飲めません」と首を横に振り、小声で返した。バニーたるもの客からの好意を無下にするなどあってはならない。しかし男は嫌がる姿に興奮したようで、鼻息を荒くしてバニーに抱きついた。

「ああ、お酒弱いんだねえ。可愛いねえ……君、プロヒーローのシヨートに似てるって言われたい？ そっけないところもそっくりだ。ああ、大丈夫。僕がただ君に貢ぎたいだけなんだ。飲まなくていいから注文してもいい？」

君の意志など関係ないと言うようにまくし立てる男に、バニーはもう何も言わなかった。

「……はい」

「ありがとう！ じゃあスタッフさん、この店で一番高いウィスキーを持ってきてくれるかな」

その言葉を聞き、オーナーは柔らかく微笑んだ。

「はい、承知いたしました」

席を立つ時にちらりとバニーの様子を見る。

客に抱き締められるその身体は小刻みに震え、顔は困惑と怒りと嫌悪の色でひどく歪んでいた。今にも客を突き飛ばしてしまいそうな拳を膝の上で震えさせている。



そのバニーは、女ではない。成年になりたての若い男で顔立ちは非常によい。程よく筋肉がついたしなやかな身体は男を知らない清いもので、ぶっきらぼうな態度と合わせて全てが可愛いと客に評判のバニーだ。

(たくさん働いてくれよ……)

オーナーは死角であくどい笑みを浮かべ、その場を去っていった。

意味が分からない、というのが最初の感想だった。

轟がサイドキックとして在籍する事務所に任務の依頼がきたのは三日前のこと。とあるバニークラブにて怪しい取引が行われているという情報を掴んだので、潜入し証拠を得てほしいという依頼だった。

依頼書はわざわざ轟を指名していた。曰く、強個性持ちかつ綺麗な外見のヒーローを募集しているらしく、その条件に轟が当てはまったらしい。

事務所の先輩から相談を受けた轟は、軽く内容を確認し了承した。何か異常事態があったとしても自分の個性なら対処が出来るだろうと踏んだからだ。

仲間が身分証を偽装し、自身の髪色を隠す為にカツラを被り、火傷痕も化粧で隠して変装したままでは良かった。

異常事態は店に体験入店する当日に起きた。

約束の時間に店へ向かい、入口で体験入店希望の者ですと挨拶をする。腕や胸に派手な入れ墨を入れた男が轟を見て目を細めた。

「おや、綺麗な子だね。ええと、ショウくんだったけ？」

「はい、本日はよろしくお願いします」

「うん、見た目はいいね。それじゃあさっそく着替えてくれるかな」

そう言われて手渡された仕事着をみて——轟は困惑した。

なんだか妙に、布地が少ない。それに衣装のほかに、つけ耳やリボンなどの装飾品が多い。わずかに眉を顰め、轟は男に問いかけた。

「あの、俺はボーイでの採用と聞いて来たのですが」

「君は顔がイイからね。せっかくならボーイはボーイでも、バニーボーイとして採用したいんだ。その衣装を着て客に酒を振舞うだけだよ。出来るだろう？」

「……いや、俺は……そういうことは……」

言葉を濁らせると、男は目を細めて語気を荒げた。



「言うことが聞けないのなら、帰ってもらおうか」

「……………」

轟は困惑しつつも内心焦っていた。ここで素直に引き下がってしまつたら得られる情報は何も無い。任務の成功のためには一時の恥を忍ぶしかないのか。迷う時間は無かつた。

「……いや、すみません。バニーボーイ……での採用で問題ないです。よろしくお願いします……………」

そう言つてしまつたゆえに、轟は予想だにしない災難に見舞われることとなつた。

衣装の黒い生地は伸縮性があるので、とてもキツイという訳では無かつたが、それでもそれなりの身長に轟に対してはギリギリのサイズだつた。レオタードスーツはぴっちり伸びきり、太ももや尻にいやらしくギュッと食い込む。網タイツは細やかな網の先に見える白い肌をより一層映えさせ、客はもちろんスタッフですら魅了させた。

その割に胸はなんだかさかさとした。わざとそういう仕様なのか、屈むとすぐに乳首が見えてしまふそうだった。

そんな衣装を着こみ、履いたことの無いピンヒールでよたよ

たと歩いていると、さつそく轟に接客せよとの指令が下されたのだった。

そして場面は冒頭へ戻る。

珍しい男の新入りを捕まえて上機嫌だつた客は、轟の顔立ちの良さ・艶やかな身体つき・慣れない接客に虜になり、何本もボトルを空けた末にスカスカの轟の胸元に大量の紙幣を突っ込んで帰つていった。紙幣を差し込む際、どさくさに紛れて乳首に触れられた時は、あまりの気持ち悪さに店内すべてを凍らせてしまうところだつた。

「お疲れさま。今日はそろそろ終いにしようか」

震える手でもらつた紙幣を整理していると、オーナーが上機嫌に話しかけてきた。地獄のような接客が終わると知り、轟はホツとした。

「このあと店の奥で、君の歓迎会を開こうと思つているんだ。急な話ですまないね。時間あるかい？」

そう言われ、轟は目をほんの少し細めた。店の深部を観察できるチャンスだ。あわよくば裏取引の証拠を得られるかもしれない。すぐに笑顔を作り、はいと返事をした。

「ありがとうございます、皆さんと親睦を深める機会をくださつて。もっとこのお店のことを知りたかつたので、嬉しいです」



「そうか！ それは良かった。それじゃあ早く片付けをして、歓迎会を始めようか」

「分かりました」

ぎごちなくピンヒールを鳴らし、轟はホールの片づけに励んだ。先ほど客に触られたところがベタベタしていて気持ち悪い。早いところこの衣装を脱いで店を出てしまいたかった。

「それでは期待の新人、ショウくんデビューに……乾杯！」

オーナーの明るい声を皮切りに、乾杯を告げる声が至るところから聞こえる。閉店後の店内の奥、スタッフルームの中には五名程度の男性スタッフとオーナー、それと轟がいた。悔しいことに自分以外の男は全員ただのボーイのようだ。自分だけが未だにバニーの恰好をしているのがいたたまれない。

テーブルにはいくつか酒のボトルと、適当なつまみや菓子が置いてある。

店の在庫にも関わらず、惜しげもなくボトルを開けて轟に酒を振舞いながら、オーナーは申し訳なさそうな顔をした。

「すまないね、ショウくん。今日はあまり残れるスタッフが多くなって……こじんまりとした歓迎会だが、たくさん飲んで食

べてくれ」

「いえ、とんでもないです。……いただきます」

せっかく歓迎会を開いてもらったものの、出来ればこの店のものには手を付けたくなかった。潜入先の食べ物など何が入っているか分からない。だが何も手を付けないのは気を悪くさせるだろう。

どうしかものかと考えあぐねていると、オーナーと視線があった。せっかく注いだ酒を飲んでくれないのか？ と言いたげな顔だ。内心ため息をついて、轟はそっとグラスに口を付けた。無論、飲む訳がない。酒なんてただでさえ思考を奪うもの、潜入捜査中はできるだけ摂取したくなかった。一口飲んだフリをしてグラスをテーブルに置いた。

その時、どくりと心臓が高鳴る音がした。視界がぐらりと揺れてひどい眩暈に襲われる。

「……………!?!」

気が付いた時には轟は床にぐったりと伏せていた。目先に映るオーナーの靴先がゆっくりとこちらへ向かってくる。

「な、んで……!」

やられた、と思った。超即効性の筋弛緩剤、それと個性抑制剤を盛られたようだ。でもどこで。接客中も何も飲まないよう



にしていたのに。

「今のグラスの淵に塗っておいたんだよ。用心が足りなかったねえ、プロヒーロー……ショートくん」

「……………！ おれの、正体を……」

急激に胸の中が冷えていく。一体いつからバレていたのか。気が付けばオーナー以外の男たちも自分の周りに集まってきた。カツラがあつという間にはがされ、火傷を隠していた化粧も無理やり落とされてしまう。そのまま腕を引かれて顔を上げられ、素顔を吟味されるように見下ろされた。

「心が読める個性持ちのスタッフがいてね。君がこの店を探りに来たことは最初から分かっていた」

「ならどうして、わざわざ泳がせた」

「単純に、君にバニーの価値があると思ったから。それにまだ、店の秘密は暴けていないんだろう？」

「……………っ」

ぐっと悔し紛れに唇を噛む。そうだ、まだ自分は何もこの店について知らない。何も成果を得ていない。それなのにただ正体を知られ、あんな屈辱的なことをさせられていた。

カッと顔が熱くなる。今日のことを思い出して羞恥が込み上げた……だけが理由ではないようだった。

「……………っは、あ……なん、だ……？ あっ……」

妙に身体が熱い。中心から茹だるように火照ってくる。くつたりと弛緩した身体を火照らせる轟を見やり、周りの男たちがニタニタと笑いだす。

「さっき君に盛った薬、媚薬の効果もあるんだ。身体、辛いよね……？」

「ん、あっ……クソ、やめろっ……さわん、なァっ！」

周囲の男たちが網タイツを引っ張ったり、尻の尻尾を引っ張ったりとちょっかいを出してくる。そのたびにジリジリとした熱を感じ、同時に途方もない嫌悪感に苛まれる。

「ねえ、ショートくん。僕たちとゲームをしないかい？」

「……………ゲーム？」

「これから僕たちが指示する内容を、どれか一つでも達成することが出来たら君の勝ち。この店の秘密を教えて無傷のまま帰してあげる。もし全部守れなかったら、君はずっとバニーボーイとしてこの店に飼われることになる。そう調教してあげる」

「……………っ」

ぞっとするような提案に鳥肌が立つ。ふざけるなど声を荒げて暴れ、逃げることも考えた。しかし同時にプロヒーローとしての矜持を保ちたい自分もいた。



ここでゲームを受けずに、自分の保身のために仕事を投げて何がプロヒーローか。そう自分を叱咤し、轟はオーナーを睨み上げた。

「分かった、ゲームを受けてやるよ……」

「お、イイね。元気な反抗的な目だ。……それじゃ早速ゲームを始めようか。その目付きをいつまで保ってられるか、楽しみだね」

オーナーと周りの男たちが愉しげに笑う。

一体なんのゲームが始まるのか、身構えた轟の前にバサバサと大量の紙幣が落とされた。

「なんだ……?」

「コレ、ぜんぶショートくんが今日稼いだお金だよ。ほら、最後のおじさんなんか、君の胸にいっぱいチップを突っ込んでいったでしょ? 集めたらこんなに紙幣があったんだ。初日なのにすごいねえ、ショートくん。いや……焦凍くん」

「なに、を」

「この紙幣を使って今から五分間、君の身体に悪戯してあげる。君がその間、射精をしなければ勝ち。射精してしまったら負け」

「は……?」

オーナーが告げた瞬間、男たちが床に散らばった紙幣を鷲掴

む。力の入らない身体を支えるように一人の男が轟の背後に回る。

「じゃあ、スタートね」

「んなの、耐えられるに決まって……っ!」

紙幣で触れられた程度で射精などするはずがない。轟は油断していた。それゆえに驚いた。男の一人が己のスカスカの胸元に手を突っ込んだ瞬間に感じた、神経を直接刺されるような感覚に。

「っひ、ア……!?!」

びくりと背中をしなせさせた轟に気をよくしたのか、男は調子づいた様子で胸を弄ってきた。視線の先に映るのは、自分の乳首の先端が紙幣で擦られている様。本当にただ、紙幣が触れているだけなのに、摩擦が起きるたびに熱く刺さるような快感が脳を刺激する。

「なん、で……ヤ、ああっ!」

「お薬の効果バッチリだね。ああほら、膨れたおっぱいが丸見えだよ……」

気が付けばレオタードスーツの上がすっかりはだけて胸が丸見えになっていた。乳首の先端を紙幣が滑る。ちりちりと熱く痒い。逃げようとする轟の身体を後ろの男が雁字搦めにして



捕まえる。

「あ、あっ……!!」

「五分間、動いちゃダメだよ。ほら見てごらん、今からココも虐めてあげるからね」

そうやって男たちはスーツの上から膨らんだ轟自身の先端をつついた。弄ぶような触れ方に頬がカッと熱くなる。いつの間にか存在を示しきっていた股間を必死に宥めようとしたって無理だった。ドキドキと震える性器をいざご開帳せんと、男たちはスーツの布と網タイツの股間部分をはさみでチヨキチヨキと切っていく。

「あ、あ……やめ、ろっ」

「わあ、焦凍くんのおちんちんすっごく元気だねえ」

黒いサテン生地が肌を滑り落ちると同時、ぷるりと宙に奮い立つ轟の性器。四方八方から視線を受け止めるソレにも、容赦なく紙幣が擦りつけられる。

「ほーらほら、イイ子」

「よく頑張ったご褒美だ。自分が稼いだお金だぞ？ うまいか？ オイ」

「っふ、あうづっ……!!」

下種な質問に答える余裕すらなかった。性器の先端に紙幣が

あてがわれ、包まれながら擦られるたび、抑えきれない興奮とともに熱い体液がじゅわりじゅわりと溢れ出ていく。押し付けた紙幣にどんどん染みが出来ていくのを見て男たちが下品な笑い声をあげた。

「うわあ、染みがすごいよ」

「そんなに気持ちいいの？ もっと遊んであげようか」

男たちは抑えきれない嬌声をあげて悶える轟に気をよくしたようだった。四方八方から手が伸びて轟の身体の至るところに紙幣が擦りつけられていく。

ぞくぞくとしたこそばゆい感覚の中に明確な気持ちよさを感じ、轟は嫌々と頭を振った。

「や、やめろおっ……!! はな、せえっ」

「お、イっちゃいそうだね。まだ三分しか経ってないよ？」

「あと二分がんばれ、がんばれ」

「くそ、っふ、アあっ……そこ、ばっか、や、んむうっ」

突然、背後にいた男に顎を掴まれてキスをされた。ぬるりと入り込む舌と煙草の臭いに顔をしかめる。顔を背けることは許されなかった。

「んんっ——!! っふ、んんっ……!!」

轟の小さな口の中は男の舌で蹂躪されていく。激しい口づけ







ツと睨みつけても、怖くないよと言うように頭を撫でられた。悔しくて悔しくて、性器を噛みちぎってやろうと顎に力を込めた、その時。

「焦凍くん、ちょっと我慢してね」

「ふ、……うごっ!？」

両頬を固定されたかと思いきや、男が容赦なく腰を進めてきた。無理やり入り込む性器の形に沿うように頬は膨らみ、口内の奥まで侵入した性器は更に深くまで進んでいく。

「~~~~~………、っ——………!!」

性器は喉まで侵入し、轟の呼吸の自由さえ奪った。気持ち悪いとかそういう事すら考えられなくなり、生命の危機を感じてひたすら暴れ狂うことしか出来ない。

「こら、暴れてないで早く奉仕して? 分かってる? 五分以内に口でイかせられないと負けだからね」

「フェラでって言ったのに、イラマするとか鬼畜だな」

「口に入れるって意味じゃ同じだろ。ほら頑張れ。舌を使って舐めるか吸うかしら」

呼吸困難に苦しむ轟に配慮もせず、男は急かすように頭をぽんぽんと叩いた。酸欠で回らない脳みそをなんとか動かし、えづきながらも男をイカせる術を必死に考える。

(した、つかって……なめ、なめる? こうか? こう………のど、くるじいっ……)

とにかく酸素を求め、轟は性器に吸い付いた。性器を舐めたことなど無いが本能でここだという所を舐め上げ、ちゅっちゅと吸い上げると、男の性器は嬉しそうにビクビクと震えた。

「おっ上手いじゃん……いいぞ」

上手いと褒められたと同時に性器が喉から抜け、呼吸が楽になる。頑張ってちろちろと舌を這わす轟をからかうように周りが囁しだす。

「でもあと二分しか無いよ。急げ焦凍くん。バキュームフェラしてあげて!」

「ふあ、ふあきゅーうふえあ? っへ、ほうやふんふあ……」

「お蕎麦を食べる時みたいに、おちんちんを軽く吸ってみてごらん」

「ううう……ほう、ふあ?」

自分の好きな食べ物を思い浮かべながら、蕎麦をすすする時と同じようにチュッと口をすぼめてみる。

「そうしたら、少しずつおちんちんを強く吸っていくんだ。出来るだけ豪快に音を立ててあげるとイかせやすいよ」

言われるがままに轟は性器を吸い始める。蕎麦をすすする時の



音を思い浮かべ、じゅる、じゅるるるううと淫らな水音を響かせることが出来た。

性器を吸い尽くすかの如く責め立てる轟に男が舌を巻く。

「うっ……やべえ、これはやべえな……!!」

先走りの量が増えていく。これは間に合わせる事が出来る  
と確信し、轟は一層強く頬をすぼませて激しく吸い上げた。

その時、背後にいた男が唐突に尻に触れてきた。

「お口だけじゃ寂しいだろ？ バニーの大好きなニンジン、尻にもプレゼントしてやるよ」

男は性器を頬張る轟の目の前に何かを見せつけた。その手にはニンジンの形をした極太のバイブが握られていた。顔がサツと青くなる。まさかこんな太いニンジンを入れるというのか。無理だ、絶対に無理だ。

やめろと言う前に男はちぎれたスーツを捲り上げ、ひくつく孔にバイブを入れ込んだ。

「……— ああ、あああっ!!」

じゅぼんつと太く立派なニンジンが轟の後孔に突き刺さる。あまりの衝撃に思わず啞えていた性器が口から漏れ、びたりと頬を打った。目を見開いてわなわなと震える轟を男たちは面白そうに見守っている。

「嬉しそうな声出しちゃって。そんなにニンジンがおいしいか？」

「腰と一緒に尻尾も揺れてんぞ。えっちなバニーだな」

「ほら、急いでちんぽ啞えねえと時間がねえぞ」

「うううう、っふ、ぐう……!!」

からかうようにグチグチとニンジンバイブを抜き差しされ、轟の腰が抜けていく。バイブにはローションが塗りたくってあったらしい。ぬるぬると滑らかに、それでいて恐ろしいほど内壁を広げていく異物に恐怖すら覚えた。

「ほら、俺のニンジンも食えって。萎えてきたじゃねえか」

「うぐっ……ん、んっ」

しょっぱい味のする肉棒、もといニンジンを啞えて必死に吸う。とにかくこの男をイかせれば勝ち。この悪魔のようなゲムから解放される。はずだったのだが。

無情にも時間は来てしまった。タイマー代わりのスマホからアラーム音が鳴る。

「あーあ。五分経っちゃった。残念だったねえ焦凍くん」

「本当に一生バニーのままかもな！ それもいいけど」

「……：うあ、うそ、だアっ……ごえっ!!」

打ちひしがれる轟に構わず、目の前の男は再び滾り始めた己



を口にねじ込んできた。それと同時に尻の中のエンジンも轟の敏感なところを強く押しつぶしてくる。

「んんんんっんん——！！」

ごりゅごりゅと容赦なく喉まで入り込むエンジンから、真っ白な液体が噴き出してくる。直接胃の中に注ぎ込まれるような感覚、酸欠と気持ち悪さでもう何も考えられなかった。

「う……えほっ、げほっ……」

「お疲れ様、焦凍くん。……あれ、イっちゃってたの？」

「うえ……？」

ぬるりと性器が口から、バイブが尻から這い出た瞬間、轟は力無く床に倒れ伏した。ぐったりとした轟をひっくり返し、男たちはくっくと笑った。

スーツと網タイツが切り取られた股間部分から丸見えになった性器は苦しそうに天を仰ぎ、少しばかりの白濁を漏らしていた。いったつもりなんて無かった。いつの間に射精したのだと轟は顔を青くした。

「お口とお尻にエンジン突っ込まれてイけちゃうなんて、バニーの素質あるよ、君。ヒーローなんてやってないでバニーに転職すれば？」

「……………誰がっ！ くそ、さっさと次の指示を出せ。次こそ

クリアしてやる」

酸素を得て、そして不覚にも射精したせいで頭は少しばかりクリアになった。口を拭って男たちを見上げ、罵倒の言葉を吐けば、面白い奴だと男たちは愉しそうに笑った。

「これだけやられておいてまだそんな目が出るなんて、君は楽しめる子だねえ……よし、それじゃ早速、次のゲームをしようか」

「……………っ、次は……………なんだ」

「騎乗位で、焦凍くんがイかず三十回以上ピストンできたら勝ち。ってのはどう？」

「……………き、じょうい」

轟の持つ、豊富ではない性知識でも分かる単語。男の上に跨って性器を挿入するということ。つまり、それは。

「セック、ス……………じゃねえか。嫌だ。俺は尻にチンコなんか挿れたくねえ。指示を変えろ」

「セックスだね。それがどうかした？ 偽物を啜えたんだっから、本物をお尻にぶち込んだところで何か変わるのかい？」

さも当然のことのようにセックスを指示してくる男たちに、轟は顔を歪めた。まだ全力が出せない身体では抵抗も無駄に終わってしまう。そうこうしている間に、男たちの中でも特に筋



肉質な一人が横になり、おもむろに自身の下を寛げた。

轟は絶句した。横になる男の身体から立ち上がる雄々しく猛った性器はもはや凶器だった。穿った者を確実にノックアウトさせてみせるというオーラすら感じる。ごくりと息を呑んだ轟を囲み、男たちはさあ早くと急かした。

「ホラ。時間が無いよ。やるしかないって分かってるだろ？」  
「早くしないと、せっかく緩めたお尻がまたキツくなっちゃうよ？ そうしたら辛いのは君だよ」

「……………う、っ」

よろよると引き寄せられるようにそそり立つ肉棒に近寄る。ピンヒールがカツ、カツと音を立てたあと、轟は観念したように男に覆いかぶさった。

「可愛いバニーちゃん。俺のニンジンも食べてくれるかい」  
気持ち悪いことを言う男を一睨みし、轟は逡巡した。

丸出しの尻をなぞる性器が気持ち悪かった。さっき啜えたニンジン型デイルドより数倍立派な気がするが、任務を達成するには一時の苦しさを味わうことも致し方ないのかもしれない。はーっとため息をつき、轟は一言発した。

「……………動くなよ」

そう言い、意を決して腰をおろしていく。男の性器が尻穴に

触れた時、ぞわっと鳥肌が立った。何も考えないようにして手を添え、少しづつそれを飲み込んでいく。

「う、うぐづっ……………!! っはー、はー……………」

「俺の大きいからね、大変だろう」

「うる、せえっ……………!」

自分の身体の中に異物が入ってくる感覚に嫌悪感を抱えながら轟はひたすら腰を下ろし続けた。ぬちゅ、ぬちゅと音を立てて男の性器が少しずつ轟のナカに吸い込まれていく。

「っは、ああ、っぐう……………」

歯を食いしばり、目尻に涙を溜めて、張り裂けそうになりながらなんとか男の性器を八割ほど挿れ終える。ふっ、ふっと苦しそうに息を吸う轟を虐めるように、男が一つ腰を突きあげた。性器が少し奥まで入り込み、苦しさに呻き声が出た。

「んっ……………!! う、ごくくなって、言っつて、んだろっ……………!」

「いつまで経っても焦凍くんが腰を振ってくれないんだもの。時間制限はないけどさ、早く動いてくれないと俺から突き上げちゃうよ」

「っぐうう……………!」

男に好き勝手突かれたら終わりだ。轟はヒールのせいで不安定な足元にイラつきながらも両脚を踏ん張り、震えながら抜き



差しを始めた。ぶちゅ、ぱちゅっといやらしい音が響くたび、周りで見守る男たちが下品な野次を飛ばす。

「んっ、っぐ、っふう、……んあっ、っはあ」

「一回、二回、三回、四回、五回。良いペースだね。この調子であと、二十五回がんばろうか」

「……にじゅ、ご……」

轟は途方に暮れていた。正直、五回腰を振っただけでもしんどい。男の性器が大きすぎるゆえにみっちり内壁を広げ、結果として敏感なしこりを強く押し上げていたのだ。動くとき自然にそのしこりを潰すことになり、神経を直接刺られるような感覚に襲われる。

「っく、う……」

あまり激しく動かず、機械的に動こう。できる限りしこりを避けて。そう思って腰を動かすと、その意思が読み取れたのだろう。自分の下の男がつまらなさそうな顔をした。

「へこへこと逃げ腰で、そんなんで数を増そうっての？」

「うる、せっ……腰、ふればっ……いいんだ、ろっ」

半ばヤケになりながら抜き差しを繰り返す。九、十、十一、十二。もう少しで折り返しだと思ったその時、不意に両腰を掴まれた。

「な、なにす……」

「ぬるすぎ。全然なっていないね。バニーたるもの騎乗位は基本中の基本だよ？　しょうがないね、本当の騎乗位ってやつを教えてあげよう」

「や、やめっ……！　っああアっああっ……!!」

くっとなめた男は容赦なく己を突き刺してきた。先端が未開拓の肉壁を押し広げていき、奥の奥まで満たそうと侵略してくる。

「おごっ……っひ、は、はらあ……さけ、るっ、から……やめ、ろおっ……」

「大丈夫、優しく広げてあげるよ。……ほら、もう俺のニンジンの形に合わせてお腹の形が変わってきてる。上手、上手」

「っぐうう、ああ、っふううづう……」

男の手が確かめるように下腹部に触れ、くっとなめてくる。はふはふと熱い呼吸を繰り返す、男の性器が腹の中で暴れ狂うのをギリギリのところまで耐える。いつの間にかびっしょりとかいていた汗がスーツと網タイツに沁み込んで気持ち悪い。額に張り付いた髪を別の男が掬い上げ、顔がよく見えるようにされる。

周りから「苦しそうな顔も可愛いね」だとか、「勃起してんじ



やん。ハメられても気持ちいいとか素質あるね」とやいやい言われるのがうざったい。轟は男の性器に耐え、数を数えることに集中しようとした。

それが間違いだった。

「んあっ……く、そっ……そこ、ぐりぐりすん、なア……!!」

胎内に埋め込まれた性器を意識すると同時、男が意識的に轟の弱いところを責め立てていることに気づいてしまった。前立腺を集中的につぶされ、規格外の長さで最奥の肉のドアを開けんとコツコツ叩いてくる。

「いま、二十回目。良い顔だねえ。あと十回、射精せずに耐えたら君の勝ちだけど……宣言しよう。君はあと、十回のうちにいく」

「は、はあ……? ンな訳、ねっだろ……くそ、うごくくなってえ、ずりい、そこばっか……つくう……」

「適当な腰使いで数増ししようとする君の方が狡いと思うけど。体験入店とはいえ今日の君はバニーなんだ。バニーとしての仕事は最後まで果たしてもらわないと、ね!!」

「がっ、くくく……!! つぎ、イ!!」

男に腰を掴まれたかと思えば、これから本番だとばかりに深く激しく性器を穿たれた。膨張した暴力によって声すら出せ

ず、轟は目と口を開けっ放しにして空を泳いだ。

「二十一」

「あがっ!!」

「二十二」

「あアあっ」

「二十三」

「ぎ、イくく……!!」

ごじゅっ、ごじゅっど激しく肉を打つ音と、ぶちゅぶちゅとローションが泡立つ音が卑猥なハーモニーを奏でる。なんとか力を入れようとする轟のピンヒールが床を蹴ってカツカツと音を立てる。

ぴくぴくと震える轟の性器を撫で、男は面白そうに笑った。

「苦しそうじゃないか。伊ってもいいんだよ」

「だれ、があっ……!!」

「強情だね。……ホラ、二十四回目」

「つく、ううう……!!」

ぼちゅんと最奥の肉壁が開かれる。まっさらな最後の地に男の猛った性器が侵略しに来ってしまった。

痛いはずなのに自分の性器は張り詰めたまま。みちみちと音と立てて自分の身体が改造されていくのを悟り、轟はぐずぐず



と泣き始めてしまった。

「あううう……やだ、やっだあ……！ はなせ、イきたくない、イぎだくないいっ……っひ、っひうう……!!」

「大丈夫、怖くないよ。早く楽になりたいだろう？ ……ホラ、二十五。二十六」

「あ！ あああ！ やあだ、アアアア……!!」

「二十七ア！ 二十っ……ハイ！」

「っぎ、うヴ——……!!」

ばちゅうううんと激しさを増して叩きつけられる衝撃。轟に耐えうる力はもう、無かった。

「二十、九っ!!」

「も、もお……やえ、れっ……イぎだく、な……」

「最後だ。……イけ」

低く呟いた男はぎりぎりまで性器を引き抜いた後、渾身の一撃を放った。轟のナカに隙間など作らないという強い意志の下、凶悪な性器を根元まで突き入れる。

「お、ああ、——……!!」

ごりごりと肉壁を滑る肉棒が前立腺を押し上げ、そのまま最奥に男の精子が大量に注ぎ込まれた。胎内に感じるすべての感覚に眩暈がするくらい興奮してしまった轟は、気が付いた時に

はとろとろと白濁を垂れ流していた。あまりの衝撃に視界の中にチカチカと星が散る。

「ひ、あひ………あう、ああ……」

「………三十。君の負けだよ、焦凍くん」

ふうとやり切ったようにため息をつき、精を吐き出した男の性器がずるりと抜けていく。

そうしてゆっくりと床に寝かせられた。力の入らない両脚はまるで何かを産むかのように開脚しきり、間からどろどろと白濁を漏らしてしまう。

「あ……ア……」

指示を遂行できなかった悔しさと終わらない行為に絶望が押し寄せ、それなのに身体はまだ深く感じ入ってから戻ってこれていない。ビクビクと痙攣しながら虚ろに母音を呟く轟を囲み、男たちはあーあため息をついた。

「やれやれ、焦凍くん。三つも指示を受けて一つもこなせないとはどういうことかな」

「本当はバニーになりたいんだろう？ 素直になりなよ」

「君ならNO.1バニーになれるよ」

轟をバニーにさせようとしてくる男たちの言葉に、悔しさに震えながら頭を横に振る。



「や、やだ……おれ、は……ひーろー、だぁ……」

「こんなエッチなヒーローいないよ？ 自分の姿、鏡で見てるかい？」

「やぁぁぁ……」

周りの男たちに囲まれ、羞恥と情けなさに心が折れそうになる。ぐずぐずと泣く轟を抱え、男の一人がよしよしと頭を撫でた。

「しょうがない子だね。なら、サービスゲームをしよう。今までのゲームよりずっと簡単だからエッチなことに弱い焦凍くんだってクリアできるさ。やってみるかい？」

「うう……」

正直もうゲームは受けなくなかったが、ここで拒否すれば負け越して一生バニーとして飼われることになる。それだけは嫌だった。しぶしぶ首を縦に振ると、男たちはニタリと笑った。

「それじゃあ行こうか」

男は轟を抱きかかえたまま部屋を出た。従業員専用のスペースから店の中へ戻る。店の奥まで進むと、バーの横にビリヤード台が置かれているのが見えた。

男の一人がラックやキューを取り出してテーブル上にセッティングしていく。てきぱきと準備を終えた男たちは、仕上げ

とばかりに轟をビリヤード台のコーナーに乗せた。打ち手と向かい合わせ、ボールが寄り集まっている側の左だ。直角のコーナーに合わせ、脚を九十度に開かされる。緩んだ股からとろりと先ほどの男の残滓が垂れてくるのが気持ち悪かった。

離せと暴れても後ろからがちりと抱きかかえた男がそれを阻止してしまう。

「な、なにを……！」

「暴れないでよ。君は今、ビリヤード台のコーナーにいる。つまり打った球が入る場所さ」

「ま、さか……」

「そう。今、君のお尻でポケット……打った球が落ちる場所だね。ポケットが隠れてしまっているんだ。だから、あの男が打った球は君のお尻の孔に向かってくる。それをうまく、お尻で啜え込みなさい。そして啜えた球をひり出してポケットに入れるんだ。それが出来たら君の勝ちにしてあげる」

「………っ」

背筋がぞわっとするような悪趣味な指示だと思った。グツと唇を噛み、抗議しようとしたがやめた。ここまで三つの指示をこなせなかった轟にとって、本来の目的であるこの店の秘密を知ることと脱出をするための最後のチャンスだ。今更この程度



の指示、恥ずかしくも無い。そう己に言い聞かせ、轟は小さく分かったと言った。

「対戦式にはしない。順番に君のお尻に向けて球を打つから、君が上手にポケットに球を入れられたらゲーム終了だ。さっそく始めようか。最初は私だ」

一人目の男が手球をセットする。開脚した轟と向かいに男がキューを持って球を撞こうと体勢を整えている。

自分の尻めがけて球を撞こうとしているのかと思うと、ぞくぞくした感覚が背筋を走る。先ほどまで極太の男を啜っていた孔はくぱりと開いて、期待するようにひくひくと震えている。男が球をショットした。白い手球がコンと球にヒットする。途端にバラバラと四方に流れる球。そのうちの一つが轟の方に向かい、ぴとりとくつついた。

「さあ、お尻に入れてごらん」

「つく、……!!」

轟は後悔していた。こんな体勢、こんなゲームを強いられて恥ずかしくない訳がなかった。男たちの視線を感じ、嫌々ながらも球を尻に入れ込もうと腰を動かす。

しかし思った以上に球は大きめだった。なかなか孔に入らず滑ってしまう。

「んっ、ぐ……でけ、えっ」

「私のモノよりは小さいだろう。頑張りたまえ」

「んん、つぶ、……あっ」

角度を変えてみた途端、つるりと滑って球は尻の届かぬところまで行ってしまった。ぬとりと卑猥に濡れたまま、球は数十センチ先で止まった。

「ああ、ダメじゃないか。次に期待だね」

「よーし、次は俺が打つぞ」

先ほどの男が打った球はこのポケットにも入らなかったらしい。別の男がキューを握る。

「せっかくだから、焦凍くんのエッチな液で濡れたやつを撞こうか。距離が近いからちよっと強めに入っちゃうかもね」

そう言って男は至近距離から球を撞いた。わざと強めに撞かれた球は、ぱくぱくと刺激を求めて開く孔にぶちゅんとヒットした。刺激に轟の背がしなる。

「ああ、あっ……!!」

「いいぞ、もう半分啜え込めたようなものじゃないか。台にお尻を当ててもう少し深くまで入れ込みなさい」

「いい、ひぎっ……」

入口に大きな異物があるのが気持ち悪く、轟は顔を歪めて唸



った。それでも球を落とさないよう、台に向かって尻をくつつける。

「ううヴ——……っ」

台によって球がすっぽりと胎内に入り込んだ。その感覚に身震いし、轟は嫌な汗を浮かべた。落とさないように必死に力を入れ、きゅっと孔を閉じる。

「上手に啜え込めたな。さあ、ポケットに球を落とし込めたら君の勝ちだ」

「っは、っはあ……くそ、ん、っ……！」

男に膝裏を抱えられ、ばかりと開脚したままポケットの上に尻を置かれる。はあ、はあと自分の息が熱い。後は胎内の球をひり出すだけだ。だが、その排泄に近い行為を大勢の男に見られながら行うということに酷い羞恥と屈辱を感じる。

「うう、うっ……みるな、みない、でくれっ」

「そんな訳にはいかない。君がゲームをクリアできたか、ちゃんと見届けないといけないからね」

「やだ、あぁあっ……！」

しかしもう、入口に力を込めるのも限界だった。球は重力に従って外に出ようとしてくる。みち、みちりと音をたてて入り口が開かれ、ゆっくりと濡れた球が顔を見せる。

「あ、でるうっ……みな、でえっ！　っあ、あ！」

「もう少しだよ、頑張れ！」

「っふうう——……っ」

球の半分まで見えてきた。自分から何かをひり出すことがこんなに難しく、恥ずかしいことだと思わなくて、轟はまたぐずぐずと泣いてしまった。

早く出してしまいたくて思い切り力んでみると、球がぬるんと気持ち悪い余韻を残して体外に出ていった。

ことんと軽い音がして、轟は球が無事にポケットに入ったことを知った。それと同時に周囲にいた男たちが愉しげに拍手をする。

「おめでとう。ようやく指示をこなすことができたね」

「っひぐ……う、も……はなせっ」

男に身体を台から降されるや否や、轟はその手を振り払った。泣き腫れた目元を拭う。

薬の効果が切れてきたのか、身体が動くようになってきていた。個性も使えるようだ。下半身を隠しながら、もうこんな男たちに遅れはとらないと轟は身構えた。

「もう……ゲームは終わった。早くこの店の秘密を話せ」

「そんなに怖い顔をしなくても教えてあげるさ。耳を貸して」



そう言うと男は身を屈め、轟にこっそり耳打ちした。

「——このオーナーは、実はカツラなんだよ♡」

「……………は？」

取引についての情報を得られると思っていた轟は、聞かされた心底どうでもいい情報に耳を疑った。声を荒げて男の胸倉を掴んだ。

「俺は知りたいのはそんな情報じゃねえ。ここで裏取引が行われているはずだ。その情報を吐け」

「えー？ そんなこと知らないなあ……俺たちは『店の秘密』を教えてあげるとは言ったけど、ね」

「……………！」

噛み過ぎた唇から血が滲む。心を読む個性持ちがいるのだから、何を知らいたいかなんてわかっているはずなのに。やられた。かくなる上は武力行使だと轟は手をかざした。

「クソ、しらばっくれんのもいい加減に——」

「ダメだよ焦凍くん。今日はサービスゲームでの勝利だから、教えられる秘密は一つだけ。これ以上の秘密を知りたかったらまたおいで。指示をすべてクリアできたら、もっといい秘密を教えてあげるよ」

ふざけるな。そう言いかけた時、トンと首筋に衝撃を受けた。

途端に暗転する視界。

男たちが軽やかに手を振っているのが見えた。

\*

「……………あ？」

気が付いた時には外にいた。自分の事務所近くの公園のベンチで寝ていたようだ。身体を起こして自分を確認する。

もうあのバニー衣装は身に着けていなかった。潜入前に着替えた私服に戻っている。

あまりにも整然とした恰好だったので、悪趣味な夢でも見たのかと思ったが、軋む腰と大事な部分の違和感がアレは現実であることを示していた。脚全体に網タイツの痕も残っている。

「……………クソ。やられた」

盛大にため息をつく。尻は清められているようだが、散々責められた衝撃をまだ忘れられないようで、寂しそうにきゅうきゅうとナカが蠢いているのが分かる。疼く身体が恨めしい。きゅっとかすかに震える身体を抱きしめる。

次、またあの店に行くべきか迷っていた。今日の自分の痴態を思い出すに、きゅとまた同じ目に遭うような気がする。個性



を使って無理やり突入する方が、自分の尻的にはいいのかもしれない。

「……………」

でも、もう一度ゲームに挑んでみるのも悪くないかもしれない。そう思う自分が憎たらしかった。

まずは今日一日何の進捗も無かったことに対し、事務所になんと説明……言い訳をするか考えるのが先決だ。

小さく舌打ちをし、轟は腰をさすりながらベンチから立ち上がった。

終



もみ

轟さくん

準備できましたか？

えあ

準備できたらこちらにいらしてくださいね

はい

後輩に

シヨート先輩  
マツサージ店  
行った事ないんすか!?

体めっちゃ楽に  
なりますよ!

なんなら俺が  
揉んであげましょうか?

なんて言われたから  
来てみたは良いが…

この格好は  
正しいのか…!?

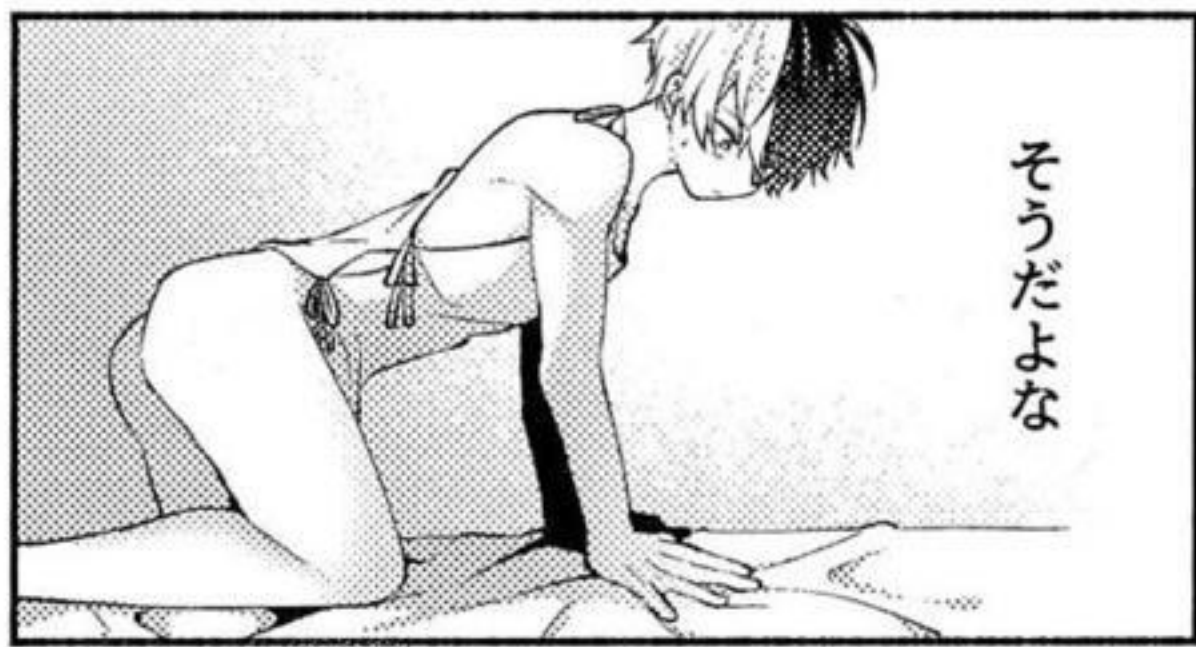
もみ

間違っ

轟焦凍  
エロマツサージ店へゆく

ドリタクス





そうだよな



男同士だし



ではこの台に  
俯せに寝てください

普通だ…



恥ずかしいが  
おかしいんだよな…

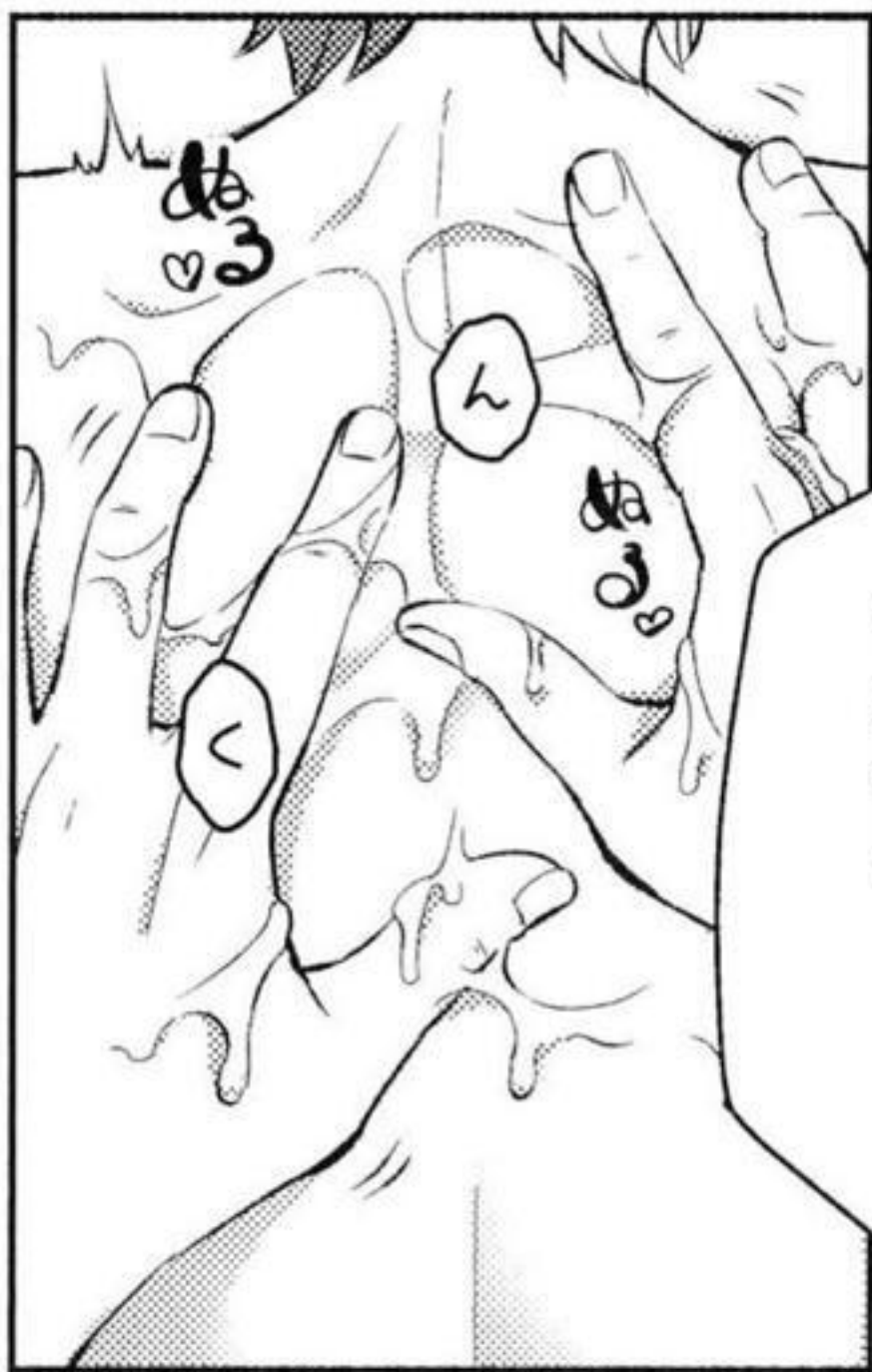
むむ♡

むむ♡



むむ









今日は全身マッサージコースなので前の方も塗ってしましましょう

まえ...?

ぬっ



いっ

ッ



ひああっ

にゅるん



今変な声出た...!

ぽろぽろぽろ





これが普通なのか!?

ちよっど  
ま...っ

ちよっど  
ま...っ

マッサージって  
こういうものなのか!?

ぬる

くうん...っ

ぬる



ピクピク  
ピクピク

あああーっ



あ...っ

声我慢しなくて  
いいですよ

まあしよつと思っても  
できないでしよつがね

ピクピク









普通ですよ

ふっう...?

そうです

じゃあ次  
下も失礼しますね

わ

ゆんゆん

ん...



あゝこれは大分  
疑ってますね

ぐいっ

ぐいっ



男なのに  
こんなムチムチで  
けしからんですね

ぐいっ

ん...



なに  
言ってる...





これは内側から  
解さないと  
いけませんね



ぐあッ

ちめろ

ロ

ッ



治療中なんだから  
暴れないでくださいよ

いってて...



そういう人は...

ニヤリ



変なところ  
触んじゃねえ

ササッ





強制的におとなしくなってます！

ぐ...じ



じた

離せ

じた

や

じた

我々に身を任せてください



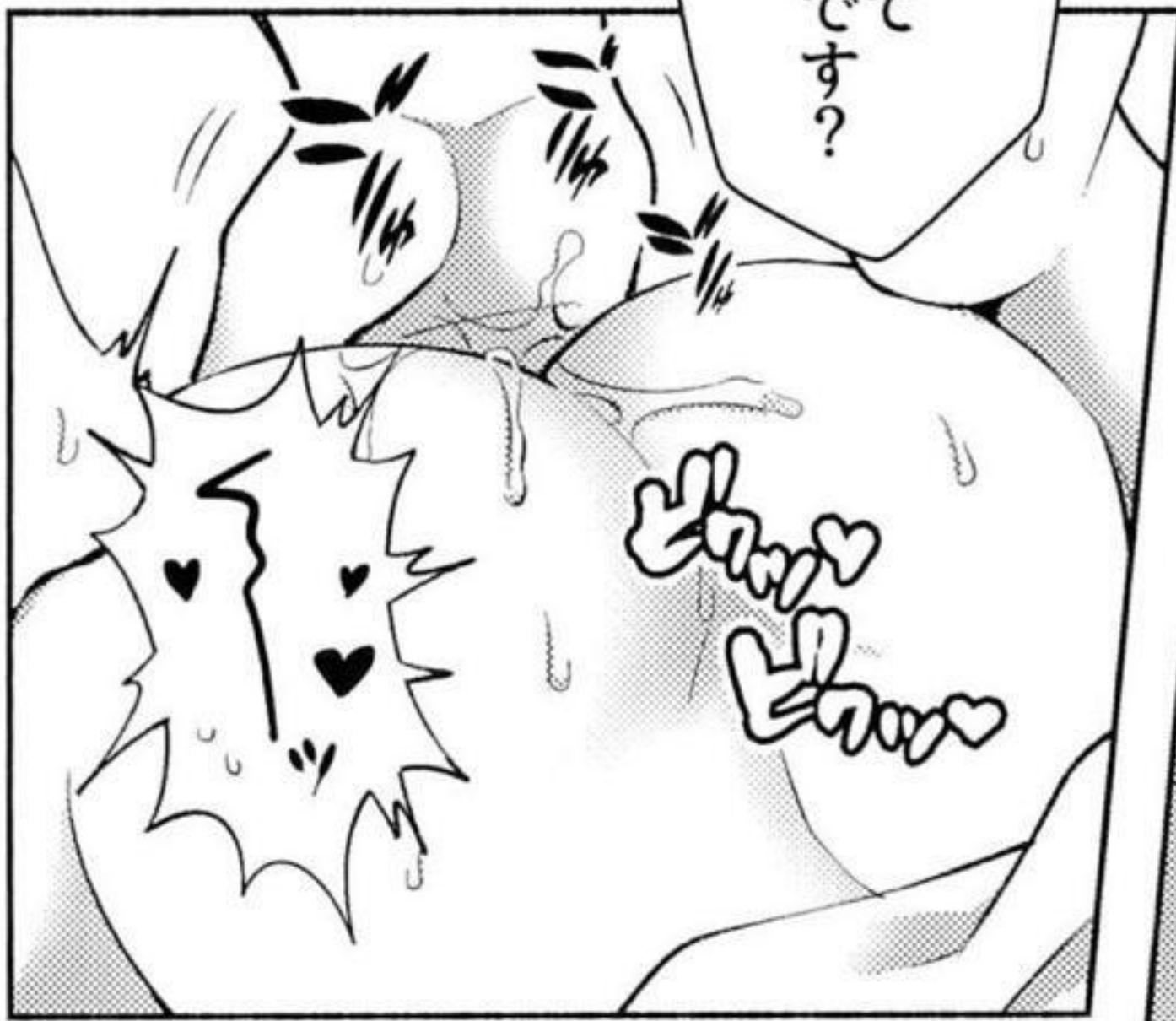
!? ちゅん

ねっ

すぐに天国に連れて行ってあげますから

ひゅん

















ハッ  
挿れたただけですかッ



天下のヒーロー様も  
ちんこには勝てない  
んですねっ

んああっ  
ちが…っ  
ちがうっ

違わねえよ  
オラ 啜える



お注射の  
経口摂取だ

しるこ…  
しるこ…  
しるこ…



オラ!  
毒素出せ!  
イけ!

はあはあッ  
出るッ

上からも下からも

全部飲んで  
くださいねッ

も…  
ダメ…ッ







ダメですよお客様





その後も何度もやめてくれ  
と懇願したが行為は  
エスカレートするばかり



こいつらは泣き叫ぶ  
俺を嘲笑い

何度も何度も  
いかされ続けた…

5時間後





…これで本日の  
治療は終わりです

お疲れ様でした



またのご来店を  
お待ちしております♡

びしょ♡♡♡

びしょ



Knock  
Lock  
Shake



Writer's comments



モブ轟1番好きなのCPなので  
呼んで頂けて大変嬉し  
かったです!!!!!!  
ありがとうございました!

土器  
TwitterID:  
@tdddn111



モブと轟アソビ先行おめでとうございます  
モブにいっぱい愛される轟くんを拝める本が世に  
生み出されたことに大感謝です...バグにします...



「とても興奮  
しました。」

poi  
PixivID:6929028





※事後に  
制服を直す  
とびりきくん。

モブ轟アンソロジー発行  
おめでとうございます。

初めてのモブ轟だったのですが  
ひたすらえっちな轟くんを描けて  
とても楽しかったです♡  
こんな素敵な企画に携われて  
モブは幸せ者です！  
ありがとうございました！

うに野

うに野  
PixivID:45800833

shoto ha kawaii!

素敵なアンソロジーにお誘いいただき、ありがとうございます！  
性癖を好き勝手並べただけですが、  
このような機会をいただけて本当に光栄です。  
そして何より一読者として切望していたモブ轟ア  
ンソロジーを拝める日が来るなんて夢でしか思ってい  
ませんでした。本当にありがとうございました！

モブ轟アンソロジー発行  
おめでとうございます！

紫藤  
PixivID:39608709



# モブ轟アンソロ発行 おめでとうございます

電車痴漢ネタ描けて  
たのしかったです~!  
わかりにくいけどシヨタでした!



キスギ  
PixivID:239842

アンソロ発行おめでとうです!!!

参加出来て非常に光栄です

誰よりも熱望しておりました

一読者としてこの上なく慶んでおります

ありがとうです♡♡

ヘン  
PixivID:34623888



モブ轟アソロジー発行おめでとうございます！

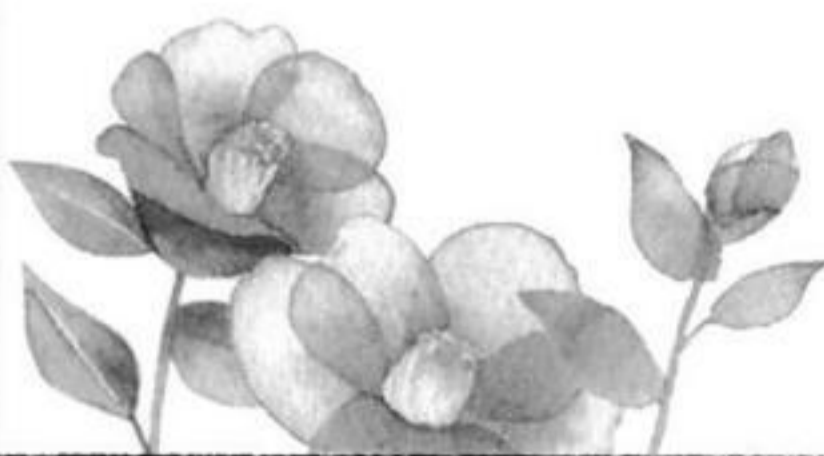
この度は素敵な企画に参加させて頂き  
ありがとうございました！

LIVE ●

ゆめの  
PixivID:5821523

お話を頂いた際あまりにも豪華なメンバーの中、  
自分の場違い感にのけぞりましたが、開き直って性癖と欲望のまま  
書かせて頂きました！！とっても楽しかったです！！！！！！！！！！

この度は素敵すぎる企画に参加させて頂き、  
本当にありがとうございました(\*^^\*)！！



halu  
TwitterID:  
@halu25182085



お誘いありがとうございました!!! **祝** モブ轟  
アンソロジー!!!

素晴らしいアンソロジーに参加できて感無量です。モブ轟は良いぞ。  
皆様の作品を見るのがめちゃくちゃ楽しみです。なぜ私が  
ここに...!!とゆうお気持ちでしたがとてもハッピーで描きました。モブ  
轟は良いぞ。(2回目)

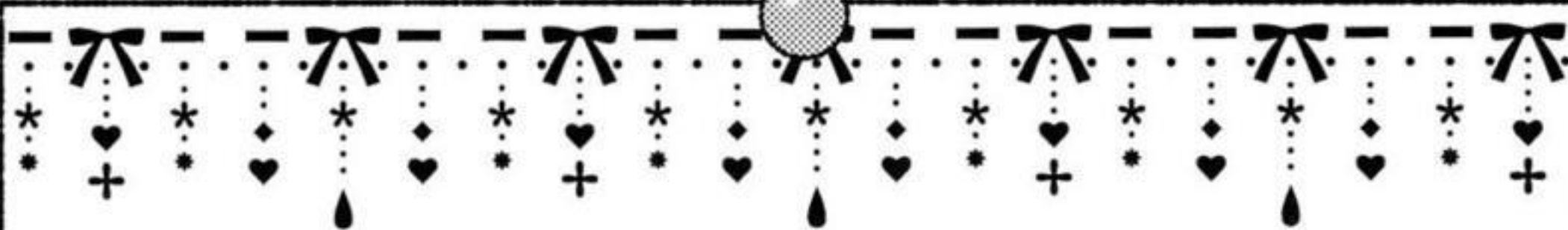
アンソロジーの  
轟君は  
どうも  
だと思えます  
(作文)



色々整いで描いて  
しましたが  
少しお染みで  
頂けたら幸いです~!!

みくに

みくに  
PixivID:29854681



この度はモブ轟アンソロジー発行おめでとうございます!  
モブ轟を詰め込んだアンソロジーが読みたいと  
毎日願っていたのですが、まさか自分が執筆者として  
参加できることになるとは思っていませんでした。  
夢のようです!

この度はお誘いいただき本当にありがとうございます。  
初めてのアンソロジー参加で素敵な思い出ができました。

モブ轟どんどん増えてくれ。

はるさめ  
PixivID:32877386



モブ轟アソロ発行おめでとございます!

えっちで可愛い轟くんの姿を  
たくさん拝読出来るのが楽しみです。  
お誘い頂きありがとうございました!

fika/煮



煮  
PixivID:59887921

素敵なアソロにお誘いいただき、ありがとうございます。  
中学生のクソ生意気なガンギマリ焦凍くんに酷い目に遭ってほしくて、  
お話を書かせていただきました。

焦凍くんのパパになれるなんて、モブの可能性は無限大ですね!

fisk  
PixivID:9241709





モブ轟アンソロ  
発行おめでとうございます！

きっとあんな焦凍くんや  
こんな焦凍くんで溢れている  
ことでしょう…

この度はお誘い  
ありがとうございました！

わた  
PixivID:2382067



主催者様お二方、アンソロジー発行おめでとうございます。  
お疲れ様でした。そして呼んでいただきありがとうございました。

こんなに素敵な作家さんたちが集まる中に混ぜていただき大変恐縮です。  
とても場違い感半端なく、本当に、本当に、申し訳ないです…。  
誠心誠意オノマトペマシマシで書かせていただきました。  
笑って許していただけると助かります。



しの  
PixivID:25278587





発行おめでとうございます！

泪飴  
PixivID:9495313



念願のモブ轟アンソロジー、無事に発行でき  
感無量です！ご参加くださった方々、  
そしてお手に取ってくださったモブ轟を  
愛する全ての方に大大大感謝です…！  
そしていっぱいいっぱいえっちなことをさせてしまった  
プリティ大天使轟焦凍くんに拍手！

ちなみにあたしのお話の後日談ですが  
焦凍くんはもう一度お店に行きます。  
でもだんだん気持ちよくなってきちゃって  
指示をこなしきれずにに終わります。  
でもイイ子なのでクリアできるまで  
通うのでしょう。頑張れショート！

パニは良い  
パニは良いぞ  
パニは良い

困

みんこ(主催)  
PixivID:5389049



皆様のおかげで  
素敵なモブ轟アンソロ  
になりました！  
ありがとうございました！

個人的にも人生で一度は  
描いておきたいと思って  
いたエロマッサージが  
描けて楽しかったです！

ドンタコス(主催)  
PixivID:40317093



**Knock  
Lock  
Shake**



Mob\***TODOROKI SHOTO** Unofficial Anthology

# Knock Lock Shake

■発行日

2021年5月22日

□主催

みんこ

Twitter:@mha\_inko

ドンタコス

Twitter:@dontakos42

■アソソ企画

Twitter : @mbtd\_anthology

HP : <https://mobtodoanthology.wixsite.com/mobtodo>

□連絡先

[mbtd1111@gmail.com](mailto:mbtd1111@gmail.com)

■印刷所

緑陽社様

□表紙デザイン

FLOSHIKI DESIGN様 (<https://floshiki.com/>)

この本は二次創作です。  
作者様、出版社様、及び各関連企業様とは一切関係ありません。  
この本の内容をネット上にアップロードする行為、無断転載、複製複写、  
ネットオークションやフリマへの転売を全て禁じます。

この本は成人向けです。  
18歳以下の方の閲覧は固く禁じます。



# Knock Lock Shake

Mob\**TODOROKI SHOTO*

*My Hero Academia  
Unofficial Anthology*

表紙イラスト

土器

口絵

poi

漫画

うに野

キスギ

泪飴

煮

みくに

ゆめの

わた

ドンタコス

小説

紫藤

しの

halu

はるさめ

fisk

ヘン

おんこ